悠　遊　第二号

企業ＯＢペンクラブ

企業ＯＢペンクラブ同人誌

《第二号》

目次

戦後50年に思う

◇海軍兵学校の終戦 ……北田 純一 5
◇奇妙な三人の兵隊のこと ……石井 正紀 8
◇終戦の日 ……佐伯利 治 12
◇またも敗けたか ……西島 力 13
◇終戦の日に至るまでの思い出 ……斎藤 勁 17
◇戦時の自分史 ……吉嵜 清己 20
◇終戦前後の数年 ……櫻井 清治 24
◇敗戦から五十年 ……野村 嘉彦 26
◇鹿地亘事件について ……きりん たかし 30
◇疎開地にて ……別宮 善郎 33
◇或る外国人の質問 ……角谷 朗宏 37
◇アジアをめぐっての感想 ……水谷 汎 40
◇終戦 ……岩崎洋一郎 42
◇八月十五日のあとさき ……遠藤 俊也 44
◇敗戦の学窓風景―大阪外語 ……三枝 亨 48
◇空の最前線となった銃後 ……中川路 明 51
◇弱卒の一喜一憂 ……林 篤二 55
◇戦争番外地 ……石川 正達 58
◇麻雀雑感 ……清水 喬 63
◇ものを書くことの難しさ ……都甲 昌利 64
◇ガンにならないために ……池田 善行 67
◇なぜ黙って話が聞けないか ……福井 律 69
◇プロ根性 ……藤岡 豊 71
◇老いらくのマナー ……衞藤甲子郎 74
◇無賃乗車をした犬 ……亀井 弘次 77
◇「吉葉山」つれづれぐさ ……吉葉 芳彦 80
◇戦士の誼 ……間渕 達明 82
◇カワセミ ……岩瀬 昭三 85
◇看護婦さんの友達言葉 ……八木 大介 87
◇ア・ニュー・リース・オヴ・ライフ ……大沢 章伸 90
◇蘭亭紀行 ……藤井 長治 94
◇サンディエゴと日本 ……今村 亮 97
◇読書文化昂揚と被爆者竹下肥潤氏 …田中 良平 99

◇イタリア北部の古都 ……吉井米三郎 103
◇絵について思う ……新井　進 107
◇村境の橋 ……浅野　正春 109
◇日本生残りの座標軸 ……上澤　準一 111
◇もっとエネルギー教育を ……森田　茂 115
◇朝鮮語と日本語 ……村田孝四郎 117
◇ドイツの戦後五十年序説 ……鳴澤　宏英 121
◇「脱・帰国子女」を出版しての前後譚 荘司　忠志 126
◇外国の知の殿堂を巡って ……中川　十郎 132
◇短歌会通信 ……細川　謙三 136
三枝　亨
北田　純一
鳴澤　秀影
浅野　正春
西川　知世
アブドルガーダー・栄子
◇欧亜感傷吟 ……田中　良平 139
◇ペン俳句〈一年を経て〉 ……平間真木子選 140
浅野　正春
石川　正達
亀井　弘次
上澤　準太
北田　純一
小林　正憲
三枝　亨
櫻井　清治
佐份利　治
鳴澤　秀影
西川　知世
原　青蜂子
森田　茂
吉井米三郎
平間真木子
◇ペン俳句の歩み―その二― ……平間真木子 143

浅野　正春
石川　正達
亀井　弘次
上澤　準太
北田　純一
小林　正憲
三枝　亨
鳴澤　秀影
櫻井　清治
佐伯利　治
西川　知世
原　青蜂子
森田　茂
吉井米三郎

◇近況報告……松方　清 146
◇地震と会社……許斐　義信 146
◇木村親さんを偲んで……八木　大介 148

◇年史・年表……森田　茂 153
◇執筆者名簿
◇事務局から……西川　知世 158
◇編集後記 160

表紙の絵　新井　進
カット　吉井米三郎

海軍兵学校の終戦

北田　純一

「遂に対ソ宣戦の詔勅が下った。恐れ多い事である。ただちに本日の感激を作文し提出せよ。分かったかー」

「分かりましたー」

一九四五年八月十五日正午過ぎ、場所は広島県江田島、海軍兵学校大原分校生徒館第八〇五分隊自習室、命令したのは一号生徒、命令されたのは三号生徒、つまり私たちである。　その日は玉音放送があるというので全生徒が校庭に集められたが、ラジオの雑音がひどくて殆ど聞き取れず、何が何だか分からないまま生徒館に戻った。そして冒頭の作文命令となったのである。

少し海軍兵学校のことを説明すると、海軍兵学校とは海軍士官候補生に兵学を教える学校である。入学はなかなか難しかったが、当時は戦時中のことで生徒数は七千をこえ、校舎も江田島本校のほか大原分校、岩国分校の三か所に分かれていた。

生徒館というのは寄宿舎にあたるが、軍隊の学校だから分隊単位に組織され、一つの分隊は約五十名、一年生から三年生まで各学年ほぼ同数の生徒が一つの寝室と一つの自習室を与えられて共同生活を送っていた。

海軍兵学校では最上級の三年生を一号、二年生を二号、最下級の我々を三号と呼んでいたが、伝統として三号の躾教育を一号が行うことになっていて、三号は何をしていようと一号から「待てー」と声を掛けられるとただちに不動の姿勢を取らねばならなかった。すると一号は

「貴様らは、娑婆気満々、ワワワワはー、ワワワワーとは何ごとか。分かったかー」

と怒鳴る。ワワワワというのはわざわざ聞き取りにく

いように声を殺して発音するので聞くほうにはワワワワとしか聞こえないのである。「分かったかー」と言われれば「分かりました」と答えざるを得ない。正直に「分かりません」などと言おうものならどんなお仕置を受けるか分かったものではない。かといって「分かりました」と答えれば「復唱」と命令される。聞き取れないのだから復唱できるはずがない。結局は海軍精神を叩き込んでやると鉄拳が顎に飛んでくる。三号にとっては毎日々々鬼のような一号から無理難題を吹きかけらているようなものである。「赤い煉瓦にゃよー、鬼が住むよー」という歌は江田島本校の生徒館が赤煉瓦だったことから、この三号の哀感を歌ったものである。

だが、海軍兵学校がご無理ご尤もの不条理ばかりの世界だったわけではない。確かに合理的な考え方も生きていた。ある尊敬すべき一号生徒から

「海軍兵学校は帝国海軍全軍の思想を統一するためにある。全軍の思想統一がなければ戦争はできない。海兵出身者はその思想の定規にならなければならない」

と教えられたことがある。けだし、現在でも立派に通用する至言であると今でも感服している。

そもそも一九四五年の三月、はじめて江田島に着いたとき、世話係の下士官に

「君ら、何しに江田島に来なさった。軍艦も飛行機もありゃせんよ。なにー、戦艦大和だって、神武天皇がありゃー古いって言ったやつかい。使い物にならんよ」

と水をぶっかけられた。

なるほど、学校が始まってみると教室での授業はほとんどなく、大部分は防空壕堀りだった。生徒館では鬼にいじめられ防空壕堀りでこき使われるのではタコ部屋に放り込まれたようなものである。その上、死ぬための訓練をうけるのだから、見ようによっては刑務所の死刑囚よりなお酷い。それを承知で全国から競って俊英が応募したのだから教育とはまことに恐ろしいものである。

六月に入ると米軍機が度々来襲しその度に防空壕に退避させられた。ある時、たまたま山の上で作業している最中に敵機が飛来した。敵のグラマンはちょっと行き過ぎてから急旋回して急降下し、停泊中の巡洋艦「利根」と「大淀」に閃光を浴びせた。ロケット弾を発射したの

だろう、一瞬にして利根はそのまま、大淀は横倒しになって沈下した。海が浅いのでどちらも沈没してしまうことはなかったが、まことにあっけない最後だった。

こうした再三の敵襲に対し味方の戦闘機は一度も迎え撃たなかった。本土決戦に備え温存されているとのことだった。前述の下士官の冗談が段々真実味を帯びはじめた。

沖縄はすでに落ち本土決戦は時間の問題、その上ソ連が参戦した。八月六日には広島に新型爆弾が投下され、生徒館からピンク色の茸雲がよく見えた。それが長崎にも投下され、どうやら原子爆弾らしいと伝えられた。

日本の取り得る道はおよそ決まっていた。敵を本土に誘い込み徹底抗戦する。日本人は全員玉砕しても決して降伏しない。だから敗戦はない。それが民族の誇りというものだと教えられていた。我々も薄々自分の戦死を予感し一種の悲壮感に浸っていた。

だから一号生徒が玉音放送を対ソ宣戦の詔勅と勘違いしたのも無理はない。我々も疑わなかった。筆はすらすらとすべった。

「恐れ多くも天皇陛下御自ら我らに詔勅を下し賜う。恐懼感激おくあたわず。もとより身命を国に捧げる覚悟、水漬く屍、草蒸す屍、は本望なり。たとえ敵ソ連が千万の軍なりとも何ほどのことやあらん。我ら言挙げせず醜の御盾となりて死地に赴き、必ずや平らけく治め、もって大御心を安んじ奉る所存……」 此処までは決まり文句、さて、これからと思案の最中、急に「作業やめー、ただちに校庭に集合」と命令が変わった。

そして日本がポッダム宣言を受諾し無条件降伏したことを知らされた。校庭に慟哭の声が沸き上がった。私も泣いた。いや、本当は泣く真似をし周囲に合わせたのである。人には言えないが本心ではどうしようもなく嬉しかった。これで死なずに済む、本能的な喜びだったに違いない。そのとき目に入った校庭のカンナの赤い色が何故か未だに眼底に焼き付いている。

終戦を契機に校内の雰囲気は一変した。一号の鉄拳制裁がなくなった。移動はすべて駆け足の原則もなくなった。私語雑談も許されるようになった。外出も可能になった。

なかでもほっとしたのは蠅取り競争が無くなった事である。それまで三号は蠅を取ることを義務付けられていた。そしてその数を毎日報告するのだが、他の分隊より少ないと先任の私のみならず三号全員に一号の鉄拳がうなる。仕方なく水増し報告をするが次第にエスカレートして、常識はずれの天文学的数字になってしまっていた。些細なことかもしれないが虚偽の報告は私にとって精神的苦痛だった。

間もなく兵学校の廃校が決まり我々は三々五々に故郷に帰ることになった。帰郷の順番を待つ間、三号だけで飯盒炊飯などを楽しみ、将来の抱負を語り合ったことがある。私は

「確かに戦争には負けた。アメリカの物量に負けたと言ってよい。俺はこれから経済に生きようと思う。武力戦争に負けても経済戦争なら勝てるかも知れない」

と抱負を語った。秋田出身の戦友から

「貴様のような大和魂を欠いた大阪人がいるから戦争に負けたのだ」

とこっぴどく反撃された。

彼は帰郷時、持ち出し禁止の軍人勅諭を荷物に忍ばせた。大阪といっても市内出身の某君は毛布も靴も捨て米だけ集めて帰郷した。大阪近郊出身の私は毛布や衣類も行李に詰め込んだ。

偉そうなことを言っていても少年たちの思想や常識の根底には出身地の事情が色濃く反映されていたのである。そして我々は、実はほんの十六、七歳の子供に過ぎなかったのである。

了

奇妙な三人の兵隊のこと

石井　正紀

もう四年も前のことになるが、太平洋戦争下に、石油を求めて多くの石油人たちが南下し、南冥に散っていったことを一文にまとめて上梓した。そんなこともあって、いろいろな書物に目を通した関係で、先の戦争について

は、なんとなく自分なりの史観を持てるようになったつもりでいる。

そんな自分の中で、妙に心にひっかかり、今なお釈然としない思いで心の中に秘めたままにしていた、ちょっとした出来事がある。

戦時中、わたしは群馬県の安中に縁故疎開していた。国民学校低学年の頃である。

東京に残った父の故郷ではあったが、親戚も少なく、どちらかといえば歓迎されざる者としての冷たい仕打ちの中で、弟と二人、食べ盛りの幼い男の子をかかえた母は、生活苦と気苦労とで、さぞやたいへんだったことと思う。

着るものはともかく、食住には、ご多分にもれず、ずいぶん苦労させられた。食料を求めて、秋間村（現安中市）や、野殿や後閑（ともに現富岡市）の方面まで買い出しに歩かされたものである。

それでも、上毛三山に囲まれた安中での生活は、それなりに楽しかった。空襲警報発令下とはいえ、避難した桑畑の中から、空襲をうけて炎上する高崎の戦火をのんびりと見学できるゆとりある生活だった。今でも、安中に対しては第二の故郷のような思いを持っている。

終戦の一年前の頃からだったか、定かには記憶していないが、通学していた安中町国民学校へ、相当数の軍隊が駐屯するようになった。恐らく、高崎の連隊の一部だったと思っている。

学校への行き帰りや、校庭などで、行進したり訓練する兵の姿を毎日のようにながめ、年配の兵卒たちが、年若の特務曹長に殴られる姿に、子供心にも悲しい思いをしたものである。一方では、非番の将校の軍刀をさわらしてもらい、青色の刀緒で鼻をくすぐりっこをして遊ぶといった楽しみもあった。

学校に駐屯した兵とは別に、終戦を迎えるほんの三ヶ月ほど前からだったが、三人の兵隊がわたしの疎開先だった寺に同居するようになった。

ひとりは、細面の、あまり丈夫そうでない年配の准尉（この頃には、特務曹長の呼称が変わっていた）さんだった。あとの二人は下士官で、そのうちのひとりは、少し赤ら顔で肥った兵隊さんだったと記憶しているが、もう

ひとりについては、まったくといっていいほどに記憶がない。記憶のある二人は長野県人だった。

三人は、戦時下の軍人とは思えないほどにのんびりしていた。軍刀こそは所持していたが、その他には武器らしいものは所持しておらず、むろん、たった三人で軍事訓練もありようがなかった。

寺の一室を借りていたわけだが、そこで、いつもごろごろしていた。もっとも、わたしも、いつも一緒にいたわけでないし、今思えば、そんな感じだったと記憶しているに過ぎない。まだ、ほんの子供だったわたしに、彼らの指揮系統がいずれにあったのか、また、安中で何の目的で何をしていたのか、分かろうはずがなかった。

今でもはっきり覚えているのは、夜間、灯火管制された町の中を彼らのあとについてよく歩いたことである。兵隊と一緒の行動なので、どこへ行こうがとがめられる心配はなかったし、おもちゃの刀を軍刀まがいに腰につるして兵について歩くことは、たまに学友などに見られようものなら、まさに得意の絶頂の思いであった。

もうひとつの記憶は、学校が引けたあと、よく近所の山の中へ連れて行ってくれたことである。とくに、安中駅のちょうど北、天神山（海抜三二三メートル）辺りの山中だったと思うが、古い廃坑とおぼしき場所へは何度も足を運んだものである。何かの調査をしているようだったが、むろん、子供のわたしにわかろうはずもなかった。

敗色の濃かった当時、日本は本土決戦のために、着々と軍備を整えていた。陸軍だけでも、全兵力一五〇万人の動員を考え、機甲部隊を含む一大兵力を北関東に集結させ、首都圏に上陸して北上すると想定される米軍を一気にたたき潰す計画だったという。しかし、数の上では大軍でも、訓練の行き届かない四十歳台の老兵を含み、しかも、小銃すら半分にも行渡らず、木銃を持たすというひどい軍隊だった。

集められた戦車だって、へなへなの鉄板で装甲されたもので、おそらく近代戦の物の役にたたない代物だったし、それに、当時のガソリンの備蓄量からすれば、北関東から首都圏まで走らせることができたかどうかだって危なかった筈である。

日本軍のおかしさは、そんな絶望的な状況下でも、ま

だしんけんになって米軍を迎え撃ち、それを殲滅させる作戦を考えていたことである。

わたしは、奇妙な三人の兵隊の使命は、おそらく、本土決戦に備えての準備のための調査だったに違いないと思っている。

専門家でないわたしには、定かなことはわからないが、たとえば、関東平野を米軍に制せられたとしても、いったんは退き、山岳地帯に米軍を引っ張り込むための陣地構築の場所を検討していたとか、一大作戦を展開する上で必要な物資の隠匿場所をさがすとかしていたのではなかろうか。

そういえば、准尉は、およそ軍人らしからぬインテリ風で、子供心にも、学校の先生を思わせるような兵隊さんだと思っていたものである。陸軍の築城部や建築部に所属する専門家だとしたら、そんな雰囲気をただよわす軍人がいても、決しておかしくないといえるのかもしれない。

八月十五日の天皇の詔勅放送は、住んでいた寺で聞いた。三人の兵隊も一緒だった。正直なところ、三年生のわたしには意味合いがよくわからなかった。

三人の兵隊たちが、

「敗けたか。もう少しなんとかなると思ってたがな」と口にするのを聞いて、日本が戦争に敗けたことだけは理解した。

丁度その日、東京から父が到着した。そのことを口にしたら、警防団の団長を務めており、やや頑なな性格だった父は、「そんなデマにまどわされちゃいけない」と、わたしを叱りつけるようにいった。

三人の兵隊のその後の動向はまったく知らない。同じ屋根の下に住んでいたのに、煙のように、いつの間にか消えてしまった。もともとたいした荷物もなかったが、それにしても、すばやい行動だった。

詔勅放送のあった日のうちだったのか、翌朝だったのか、あるいはまた、原隊へもどったのか、そのまま故郷の長野県へ帰ってしまったのか、今となっては、知るすべもない。

学校を初め、近所の寺に分散駐屯していた軍の指揮官クラスの軍人が割腹自殺をし始めたのは、三人の奇妙な

兵隊が姿を消してから間もなくのころであった。

終戦の日

佐伯利　治

昭和十九年、私たちが第三高等学校に入学したころ、それまでは三年であった学制は二年に短縮され、かつ二年生になれば勤労動員に出ることも決まっていた。従ってそれまでなら三年間で学ぶ事を一年間でたたき込まれる次第となった。

二年生になった時、同級生の大部分は大阪の住友伸銅などへ動員されていった。一年生の時たまたま物理班に入っていた私は物理教室の本尾教授の研究補助員として学校に残ることになった。

若く白せきで細面の本尾教授は、物静かな中に、物理学についても社会思想についても、常に真実を見つめようとする姿勢で学生たちの尊敬を集めておられた。軍人が支配する当時の社会体制に対しては、当然強い批判と反感を持っておられたが、滅多に口外できる状況ではなかった。

伝え聞くところによると、本尾教授は三高在学中、思想問題で特高（特別高等警察――一九二五年、治安維持法と共に新しく設けられた思想取り締まりを目的とする警察組織）に逮捕され、三高は中退で苦学の末京都大学を卒業し、三高の教授になられた由である。

さて、昭和二十年四月からは、閑散とした校舎で、物理、化学、数学等の教授が十数名と、我々六名ほどの補助員が、いわゆる軍の依託研究を行っていた。本尾教授は下宿住まいで、よく実験室に寝泊まりしておられた。

五月に入ると、真っ昼間でも数百機の編隊で大阪を爆撃したB29が三々五々西山の上空から現れ、京都の上空を飛んで行くようになった。

七月の或る日、午前八時前に低空で襲来したB29の編隊は住友伸銅の工場を集中爆撃した。命中精度が良く爆弾は全部工場に落ち、同級生たちが宿泊していた道路

一つ隔てた寮には一発も落ちなかった。お蔭で同級生には一人の犠牲者も出なかった。

七月の下旬、連日のように大阪を襲ったB29の一機は、落とし残した一発の爆弾を帰り道にポロッとこぼしていった。この一発が神戸に近い郊外住宅地の仁川にあった本尾教授のご自宅を直撃したのである。そして、母上、姉上をはじめ教授の一家は全滅された。

数日後お見舞いに行ったとき、焼け残った一室にぽつねんと正座をして頭を垂れておられた教授の姿が忘れられない。

八月に入って、本尾教授は京都の郊外で家を探し始められた。当時、京都の郊外の長岡京市に住んでいた私は、八月十五日の朝から西山の麓まで教授をご案内した。帰路自宅に戻ると間もなく十二時の玉音放送が始まった。教授と私は棚の上のラジオの前に立ち、頭を下げて聞き入った。

「今日から電灯や窓の黒幕を外して暮らせる……」それが私の第一印象だった。

「陛下は自決されるかも知れませんね」

「そんなことが起こるかも知れないな」

二人はそのまま黙って立っていた。

このとき教授の胸に去来するものは何であったろうか。

突然の終戦により家探しの状況も変わった教授は、間もなく駅に向かってとぼとぼと歩き始められた。道端の草いきれが強く鼻を襲った。

またも敗けたか

西島　力

「またも敗けたか八連隊（大阪）、勲章ちょっとも九連隊（京都）」と、戦前から歌にまで囃された。

九州だの東北だの関東だのの勇猛果敢な兵士に比べると、上方（かみがた）出身の兵隊は弱卒ばかりで、軍国日本にとっては余り役に立たない、つまりは大阪弁で言うところの「あかんたれ」だということなのだろう。

本当にそうだったのかどうか、確かめようもないし、私には特に出身地というものが無いから、べつに何処の肩を持ついわれもないのだが、どちらかと言うと成育期のゆかりから心情的に関西人を以て自ら任ずる私としては、その名誉のために敗戦にかかわって、いささか推論をしてみようと思う。

日本の近代化の流れの中で、上方すなわち京阪神地帯は所得水準と文明度とくに国際化の点で、日本で最も高いレベルにあった。人間というものは豊かさと文明に触れる度合いが高いほど、ただやみくもに命令どおり人を殺したり自分の命を捨てる気にはならなくなるものなのである。その意味で「あかんたれ」は文明の勲章なのではないか。

一九四五年（昭和二〇年）八月十四日、中学四年生の私は勤労動員学徒として川崎重工神戸艦船工場の中にいた。昼近く空襲警報が鳴ったがB29の轟音が頭上を圧した頃、やっと「逃げたい者は逃げてもよろしい」という命令が発せられた。随分ととぼけた命令であるが、こっちは命あっての物種と、脱兎のごとく飛び出しB29の大編隊の下をひた走りに走って神戸の山の手に辿りついた。

そこで拾ったのが敵機のバラ撒いた「マリアナ時報」というビラだった。椰子の木を題字にあしらったその「新聞」は次のように報じていた。

「日本の皆さん、日本はポツダム宣言を受諾し無条件降伏をしました。戦争はもう終わったのです」

私は仲間にむかって大声で「おい戦争が終わったぞ」と叫んだ。「敵のデマを信ずるやつは非国民だ。鉄拳制裁だぞ」と腕力の強いのが吠える。もちろん殴りはしない。私たちは茫然として東の方を見つめた。絶え間ない爆発音とともに大阪の中心部にたち昇る白灰色の巨大な煙の柱は数千米の高さに達し静止していた。

当時、西宮に住んでいた私はその夜、父親に従い隣家の大阪の新聞社に出ている人に空襲の状況を聞きにいった。隣の小父さんは声をひそめて言った。「それどこやおまへん。ええお話がおます。明日で終わりだす」

明けて八月十五日、今日の天皇陛下の玉音放送はいったい何だろうかと、朝から持ちきりである。「無条件降伏さ」と、私は昨夜仕入れた情報を披露する。「鉄拳制

裁だ」と、また念仏のように唱えるやつがいる。

正午、工場のスピーカーの前に集まった何万という労働者、動員学徒の中で予備知識も全くなしにあの玉音放送をいきなり聞かされた人たちは、実際問題として何のことやらよく解らなかったに違いない。

ラジオの音質についての技術的問題を割り引いても、そもそも詔勅というものは一般国民にはさっぱり解らないような人間離れした言葉で書かれているし、それを読み上げる昭和天皇の音声も、現人神（あらひとがみ）の尊称に相応しく、すこぶる人間離れしたものであったから。

それにもかかわらず、そこに集まった人々の多くは、長い間の戦争の苦しい体験で、その日、日本に何が起こったか、漠然とではあっても根本のところでは、可成すんなりと理解をしていたのではないかと、私は思う。敗戦は決して青天の霹靂ではなかったのである。

この日、日本国中は衝撃にうち震え痛恨の涙を流したと、マスコミは報じた。このあたりから私は何となく違和感にとりつかれるのである。工場であの放送を聞いていた私の周囲の人々の中で涙を流していた人を見たという記憶は私には全くない。

私の住んでいた隣近所の人たちの挨拶は、「ようやっと終わって、ほんまによろしおしたなあ」というのであった。

一軒おいて隣に五才ぐらいの男の子がいた。半年も前のこと、朝、勤労動員に出勤する私に、門の前で陽なたぼっこをしていたその子が声をかけた。「お兄ちゃん、日本は戦争に敗けるの」。おおぴらにそのような事を口にするのはとんでもない時代である事は中学生でも心得ていた。「さあどうかな」と、大人の返事をして私は通り過ぎた。

五才の童がそう言うのは親がそういう話をしているからである。別に高度な情報に接する機会もない下級サラリーマンのその家のあるじが、夜毎に暗い燈火管制の電灯の下で女房と額をつき合わせ、「日本はもう敗けよるで」と呟いている姿がまざまざと想像されるのである。

のちのちにまで私の違和感をふくらましたのは、各紙の一面に載ったあの日の皇居前の写真であった。少なか

らぬ数のゲートル、もんぺ姿の一般市民が土下座して頭を垂れている光景である。国民の力及ばず戦いに敗れたことを天皇陛下にお詫びして号泣しているのだという。私の引っ掛かる理由の一つは、そこが日本で最も高度な情報の集中する帝都だということである。

「天皇陛下の命令でとんでもない戦争に駆り立てられ、さんざん苦労した国民が、敗けたからいうて天皇陛下に謝るいうのんは、何やスジがちゃうのとちゃうか」という発想はお膝元だけに却って出にくかったのかもしれない。

終戦後まもなく進駐軍がやって来た。女を隠せ、殊に若い女は何をされるか分からないから男の格好をさせて山の中に疎開させろ、というような、今となっては笑い話のような騒ぎが日本中そうとう広範囲に発生したことを後で聞いた。すくなくとも私の知るかぎり、私の周辺ではそんな発想をした人は誰もいなかったし、そんな事態も起きなかった。

日本国民の大方は「鬼畜米英」などと本気で信じていたわけではないだろうから、むしろ戦争というものはそういうものだ、それが敗けた国の当然の運命だ、という経験に基づく情報に支配された結果だったのではないか、と思う。

ありていに言えば、日本がかつて日清、日露あるいは遡って秀吉の朝鮮出兵以来、全てのアジア侵略において自ら行なってきた所業を、半ば武勇伝として語り伝えた結果ではないか。だからそれは勇猛な兵士を輩出した地域には情報として蓄積され、上方のような勲章も貰えんような「あかんたれ」の地方には噂にもならなかったと、これが私の推理である。

敗戦にまつわる私の違和感をむりやり関西特殊論や東西比較文化論に結びつける心算はないのだが、それでも多少はそういうことと無縁ではなかろうという気もするのである。

昭和20年終戦の日に至るまでの思い出

斎藤　勁

昭和二十年八月十五日－終戦の日－私は二十才で、京都大学工学部燃料化学科の二年生でした。

二月からの学徒動員で日本製鉄広畑工場（兵庫県姫路市）へ、その年の五月から海軍技術委託学生として、山口県徳山市の海軍燃料廠へ配置され、同地で八月十五日を迎えました。

（海軍技術委託学生とは、在学中に試験を受け、卒業すれば海軍に入り、技術士官の道を歩むコースで、在学中から手当が支給されます。当時の普通の身体を持った理工系学生の間では、落第して徴兵猶予を取消され、陸軍に行くことは最低最悪のコースで、卒業後、海軍の短期現役技術士官の試験を受けて、合格することが、最高最良のコースとされていました。但しこの試験に合格するには、一度でも委託学生の試験を受けておいた方が、合格し易いと諸先輩から聞かされていたので、試しに受けたところ合格してしまいました。結果から言えば、手当の貰い得となった次第です）。

八月十五日の終戦の日を極めてクールに対応できたのは、私を取り巻く環境がクールであったからだと思いますので、その経過を説明したいと思います。

第一は徳山へ行く前、燃料化学科の主任教授児玉信次郎先生より

「大日本帝国が正に滅びようとしている時、どんな些細なテーマを貫っても全力をつくせ。君達は来年京都へ戻って、卒業試験にかかれるかどうか判らない。」

と言われた時のことでした。

食糧等の不足はありましたが、古都京都でノンビリと学生生活を送っていた私にとって、この言葉は衝撃的で、そこまで追いつめられているのかと驚愕しました。

（なお、児玉先生は当時の合成石油製造の最高権威で、学内に中間試験工場もありました。またポリエチレンの合成研究も始められており、昭和三十二年研究グループと共に住友化学へ移籍され、日本で最初のポリエチレン

生産を始めた方です。またノーベル賞受賞者福井謙一先生は、戦後児玉研究室の助教授として、スタートされました)。

五月一日、前年より動員されている三年生の交替要員として、八人の仲間と共に燃料廠に出頭しました。燃料廠の技術士官は大学の二年乃至十年の先輩が多く、後輩として暖かく指導していただきました。

子供の頃から慣れ親しんだ多くの軍艦が失われた事を聞かされても、現実の戦況より驚きませんでしたが、燃料事情が底をついている事には前途の暗さを感じました。

各部署での実習が終わり、五月十日私は最東端のメタノール合成工場へ配置されました。午前十時頃、空襲警報が発令され、徳山湾の上空をB29の大編隊が来るのが見え、あわてて防空壕に飛び込みました。ガード下で列車十本程が通過する如き爆撃の音と、壕の木枠がミシミシと揺れ動く中で、恐怖の二時間が終わりました。

この日徳山を空襲したのはB29約二百機で、燃料廠は東西両端併せて五百メートルを除く、製造設備とタンク地帯の中枢部分は壊滅し、燃料廠としての機能はなくなりました。　壕から出た時、空は最後の油の黒煙で覆われ、恰も夕暮れの様でした。夕刻、屍体の破片が飛び散る中、本部へ行き二百余の死者の中に、五月一日私と共に燃料廠の門を入った大阪大学の学生の死を知りました。聞けば彼は最も堅固なコンクリート製の壕に入ったのですが、不発弾が命中し、コンクリートの破片により圧死したとの事でした。隣の学生は足に一カ月の重傷、その隣の学生は全く無傷でした。運命のいたずらとしか言い様がありません。

数日後、葬儀も終わり、一人息子の遺骨を抱いて両親が、夜道を寮から駅へ向かった時、季節外れの一匹の蛍が私達の前を飛びたちました。死んだ学生の魂が私達に最後の別れを告げたのだろうと語り合いました。

六月に入り、父が胃癌で重態との手紙を受け、許可を得て甲子園の家(野球場の東)に戻りました。翌六月十五日白昼、尼崎市に対する爆撃、焼夷弾攻撃があり、甲子園も被災し、一軒隣の家が焼けました。重病人を壕に移動した無理のためか、十九日父は亡くなりました。あと一カ月で満五十才になる所でした。幸い空襲もなく葬

儀は無事行うことが出来ましたが、霊柩車が無く、柩を荷車に乗せ火葬場へ運び、情けない思いをしました。

なお、甲子園の家は八月六日早朝（広島の原爆投下の五～六時間前）亡父の四十九日の法要を行った日の夜に、西宮市への焼夷弾攻撃の際、全焼したとの事でした。

七月に入り、戦闘機の機銃掃射が始まりました。至近弾は経験しましたが、私の周辺は皆無事でした。徳山市街の背後の山に壕を掘り、残存する物資の移動する作業に狩り出されました。最も丈夫に作った筈の壕が山崩れで潰されました。中は無人でしたが惨状を見た時、何をしても無駄ではないかと感じました。

七月二十七日夜、徳山市は焼夷弾攻撃を受けました。早々に寮より逃げ出し、裏山より徳山市の焼け落ちるのを眺めていました。不見識な話ですが美しいと感じました。

そして八月六日が来ました。原子爆弾かも知れないと午後には廠内で噂されていました。翌日現地へ調査隊がでました。同行した士官に聞いたところ、彼は

「若し地獄というものがあれば広島の状況だろう。原子爆弾以外ではあの惨状は作れない。もう駄目だなあ。」と暗い表情で答えてくれました。

八月九日、ソ連が国境を越えて侵攻してきました。同日長崎にも原子爆弾の投下がありました。これ以後廠内の雰囲気が変わり、惰性で動いている様な感じでした。私にしてもこの数日間何をしていたか、今以て思い出しません。そして十四日の夕、工場長より

「いよいよ手をあげる。明日正午それに関する放送があるから、冷静に対処する様に」と耳打ちされました。

八月十五日、その日は抜ける様な青空の広がる暑い日でした。拡声器から流れる放送は雑音が多く、最後尾にいた故もあり、よく聞きとれませんでした。またこれが昭和天皇の録音放送であることも後で知りました。ただし、これで助かったという思いが胸一杯に拡がった事を思い出します。殊に、寮に帰り、窓を明け、灯火管制用の黒い布を取り去り、明るい電球の下で、学校に戻れるうれしさを仲間と話し合った事は忘れることが出来ません。

それから五十年がたちました。今日の日本の姿は当時

の想像をはるかに越えたものでした。燃料廠の跡は、出光石油の工場として生まれかわり、戦争の跡もなくなりました。

最近、戦争体験の風化を嘆く声がよく聞かれますが、体験の風化は当然のことで、嘆く必要は全くありません。然し、この様な悲惨な戦争体験を多くの人々に強いた愚かな戦争をするに至ったプロセスは、後代に伝えるべきだと思います。これは戦争の悲惨な体験談よりももっと重要な事柄です。現代の教育の最大の欠点は、この愚行のプロセスを、全く教えない所にあると想う今日この頃です。

戦時の自分史

吉嵜　清己

昭和十二年（一九三七年）、旧制三重県立上野中学一年生の七月、北京郊外盧溝橋の銃声から日中の戦火が始まった。若者達は狭い日本を後にして広大な大陸に進出を夢みていた時代である。旧満州（中国・東北地方）には既に開拓団が入り、それに続けと教育されていた。中学校は配属将校の監督の下で、週に一～二時間の軍事教練と、夏と冬の野外演習も実施され、友の中には学業途中の三年生から予科練に、また四年修了後陸士・海兵に進学する優秀な生徒がいた。校内の話し方・態度は軍隊調に軍事一色で、剣道または柔道が正課となっていた。こうした国粋主義の強い中でも英語の授業は週に六時間もあって、「お前ら英語を軽視せずにしっかり勉強しておけ、将来必ず必要になるから」とその重要性を諭された先生もいたのである。

数学の先生は出征して負傷、隣の洗濯屋の一人息子は胸部貫通銃創を受けたが幸いにも九死に一生を得て帰還した。戦死者の市葬も挙行され、中学生が参列してお国のために死んだ英霊を見送るなど戦争の悲劇も感じられた。農繁期、出征兵士の家に学徒動員され稲作を手伝ったが、おいしい白米飯をご馳走になる楽しみもあった。

昭和十六年（一九四一年）十二月八日の太平洋戦争勃発の夜は三重県下の中学五年生が南・北軍に分かれ、翌九日早朝遭遇戦となる演習中で、三八式歩兵銃を担ぎ、刈り入れ後の霜の降る田圃に両軍が展開、対峙していた。夜半、近くの農家から威勢のよい軍艦マーチに続く、大本営発表のハワイ真珠湾攻撃の大戦果、マレー半島沖の英国戦艦プリンス・オブ・ウェールス、巡洋艦レパルス撃沈のラジオ放送を聞き、学友と共に歓声を上げ興奮した記憶は半世紀後の今も脳裡に残っている。

翌年春、岐阜高農（現岐阜大学）に進学、水泳部は東海地区予選に優勝、私は神宮プールで開催のインカレに配給米を持参して出場することができた。昭和十八年、ガダルカナル島の敗戦撤退から情勢は変わり、その年のインカレは中止となったが、まだ学生生活を楽しむ余裕はあった。しかし十月、文科系学生の徴兵猶予の特典が廃止になり学徒出陣が実施された。私の農芸化学科は特典が与えられたが、農学科・林学科の学生は兵役に服すことになった。当時、七～八倍の高倍率入試に打ち勝って入学、一浪・二浪の人達も多く、彼等が学業半ばで戦地に赴くのは耐え難いことであった。同じ兵になるなら陸士に進学すべきだったと無念の言葉を残して学園を去る友もいた。

就学期間が二ヶ年半に短縮され、昭和十九年九月繰り上げ卒業となった。郷里・伊賀の松茸（その頃松茸は現在のキャベツのように八百屋の店頭に積み上げられていた）それからタバコ屋を営む叔母から配給品を横流ししてもらって、それらをみやげに、また鉄道関係の知人に頼み闇の切符を手に入れ、就職先の東京に向かった。

塗料工場は軍の指定を受け、監督将校が派遣されて軍用塗料の生産におわれていたが、年輩の男達と若奥様・娘達で構成する女子挺身隊が主な従業員で、元気な若者は徴兵されて少なかった。配給米は一日につき二合一勺、

副食物も乏しく、東京の生活はひどい食糧難で飢に悩む毎日であった。繊維ばかりの松茸より栄養のある煮干を持ってくるべきだったと思ったが後の祭り。上司の技術課長も主任も結核を患った人達で療養もせず、立川にあった軍の研究所の指導の下、電波吸収塗料と航空機用塗料の開発に従事、私もこれを手伝った。

昭和二十年（一九四五年）の正月休みは、軍関係者以外の切符購入は困難で、とても郷里に帰れる状況になく、小石川の外務省職員であったいとこの家に厄介になった。彼は東京は危ないというので母と子供三人、それにおもな家財を伊賀に疎開させ、庭に防空壕を堀り空襲に備えていた。現に正月休中、米軍機が飛来して爆弾を落とし神田が被害を受けた。

二月に入り空襲は激しくなったが、まだ敵の大型爆撃機B29に我方の戦闘機が、鷲につばめが挑むように攻撃していたし、高射砲も射撃され敵機の下の方で炸裂するのが見られた。B29が逆さまになって東京湾に落ちたときは皆で拍手喝采、またつばめが鷲に体当たり攻撃した壮絶な場面では悲壮感が漂った。

三月、毎日の空襲に我方の反撃は見られなくなった。多摩川縁南六郷にあった工場内のドラム缶は既に川原に疎開してあった。しかしまだ生産に必要な多くの可燃物が保管されていたから、焼夷弾攻撃があれば大火災になる危険があった。ただ運を天にまかせ、私のような若者が、実は食べる物が無く腹がへって元気がないのであるが、三日に一度は工場に泊り、虱に悩まされながら警備を努めた。

三月九日の夕暮れ時、残りのドラム缶の撤去命令が下され、学徒動員の中学生と女子挺身隊が二名一組となり、ドラム缶を転がして川原に運んだのである。その夜、品川区大井町の独身寮で就寝中、ブーンという飛行音がいつもより大きく、続いてすさまじい爆発音と地響きが起こった。対岸の江東区が一面の火の海となり、風も急に強く吹きだして熱気と臭気も伝わる恐怖の夜となった。低空で飛ぶB29の大編隊が下界の炎で赤く照らし出され、攻撃が品川区に及べば海岸に逃げようと寮生一同緊張して見守っていた。この夜明けまで続いた空襲で十八才の山口君が犠牲となった。彼は工業学校で化学を修め同じ

技術課で働いていた。彼の遺体は男・女の区別もつかない黒焦げの焼き芋のようになっていたであろう。会社が特別につくった握り飯とお茶を持って、山口君の安否を尋ねた同僚は、橋の上に小さな子供の血の足跡があるのを見たとき、鬼畜米軍に憤りで震えたと語ってくれた。その夜、十万の民間人が地獄の火の中で死亡したという。

四月初め、航空母艦から飛び立つ艦載機の機銃攻撃は恐怖をよぶもので、その回数も増え、東京の空は完全に敵の手中にあった。まだ寒いある夜、技術課長を責任者に四名が工場を警備中、突然上空でザァーという音〝危ない〟とっさに私は近くの防空壕に転がり込んだ。壕には地下水が溜まっていて全身ずぶ濡れに。幸い大部分の焼夷弾は川原に落ちたが一発が工場に隣接した民家に当たった。家は火災となり主人が負傷、近所の我々が訓練通りのバケツリレーで類焼を免れた。

これは近いうちに「殺られる」と不安になっていた四月中旬、現役召集が届き、技術課長の「お前も征くのか」の言葉を後に、郷里・上野市役所の徴兵係に伴われて金沢市の工兵部隊に入隊した。奇遇にも中学時代の友二名も同じ隊に。我々は理科系学生の徴兵猶予で他の現役兵より年上で入隊となった。初年兵教育は厳しく上等兵や古兵によく殴られた。それでも三度の食事が与えられ、夜は寝られ、当面殺られる心配もなく軍に疎開の形となった。敵の焼夷弾攻撃に備え、金沢の主要道路は住宅をとり毀し拡張していた。工兵隊はこれに出動、大きな由緒ある家が倒れるとき、両手を合わせ涙で見つめる老婆の姿は哀れであった。

八月十五日、無条件降伏。中学時代の友が「俺たち若い兵は敵の捕虜になって外国で使役に使われるらしい、脱走した方がよい」と言う。部隊はどうなるのか不安であった。間もなく将校から復員について説明があり、九月初め郷里に帰ることができた。家は機銃爆撃を受けたが両親は無事、その時の銃弾は今も神棚に祭られている。

十月、煮干はなく、安価な松茸を持って廃墟の東京に。工場の建物は九割が焼け、栄養失調の留守隊と再会を喜び合った。まだ十月中旬の季節というのに人々は寒い寒いと焼け残った木材を燃やして暖をとる状態で、栄養不良から技術課長と二名の若者は結核が悪化して死亡した。

独身寮の二室が焼け残り、復員してきた八名が雑魚寝で入居、工場の焼け跡整理に取り掛かった。黒顔料のカーボンブラックの山は消火の方法がなく燃え続け、小石川のいとこの家は灰に、防空壕だけが残っていた。亡くなった人達のご冥福をお祈りする。

終戦前後の数年

櫻井　清治

仙台の大学に入学した昭和二十年の六月二十日に、北海道千歳線沼ノ端の北部歩兵第四五六大隊歩兵砲中隊に現役入隊した。陸軍二等兵である。

仙台で入隊通知をうけとった日、郷里の北海道稚内に発った。青函連絡船の中で横になれただけで、一昼夜以上大混雑の列車の中での立ちどうしであったが、入隊前日の夜になんとか家に帰ることが出来た。

待ちかまえていた人たちとの壮行会で散々飲み、次の日の朝は五時におこされ、万歳の見送りをうけて汽車にのり、やっと入隊に間にあった。家族との時間はまったく無かった。

終戦となり軍隊からもどったとき、姉が「入営の日、お父さんがあなたの机に座って、清治となにも話すことが出来ず送り出してしまった、と涙を流していたのよ」と語ったのが強く心に残った。

終戦の日、苫小牧への行軍があった。途中軍歌をうたわせられたり、陸士出身の若い将校にはっぱをかけられたりした。小休止のとき、誰かが天皇陛下の放送があると言いだした。なんだろうと思ったが、苫小牧の小学校に入ってからの休止時間がやけに長い。そのうち、どうも戦争が終わったらしいとのささやきが伝わってきた。同じ分隊の農家からきた初年兵が「家に帰れる」と飛び上がるようにして言ったのが印象に残っている。

苫小牧から原隊へは無言の行軍であった。隊へ帰ると兵舎全体がざわめいている。幹部連中もどこかにいってしまって、夜の点呼も満足になかったような気がする。

軍律といってもはかないものだと思ったが、終戦のことははっきりした。

月の明るい夜であった。兵舎を出て月をみていたら、なんとなく涙が出てきた。通りがかった小隊の古年兵が「おい、二等兵どうした」と寄ってきたのに無性に腹が立ち「この野郎、お前は悲しくないのか」とどなったらあわてて離れていった。本当に戦争が終わったんだと思った。

その後、いろいろな流言や憶測がとんだが、結局入隊三ヶ月後の九月二十日に除隊、沼ノ端駅での解散となった。汽車待ちで小隊がかたまっている上空を、突然アメリカの軍用機が超低空で下りてき、迷彩服のアメリカ兵が身をのりだして、我々に大きく手を振りながら飛び去った。ふざけるな!!と思ったが、同時に手を振る兵のしぐさに一瞬フレンドリイなものを感じた。きのうまで戦ったアメリカとはどんな国だろうと思ったのを覚えている。

昭和二十三年四月、仙台の大学を卒業して就職のため生まれてはじめて上京した。入社したのは旧三井物産の新会社である。前年に制限付きながら民間貿易が再開されたので、いずれ海外に行けるだろうとの単純な動機からであった。

会社は戦災に焼け残った有楽町駅近くの電気倶楽部ビルにあった。ところどころガラス窓の破れたビルの、欠けた階段をふみしめながらの職場通いであったが、当時の会社は何でもやっていこうという活力に溢れていた。有楽町一帯も活気に満ちていた。靴磨き、サンドイッチマン、戦災孤児、粋な姿の進駐軍GIと夜の女たち。世間はようやく落ち着きを取り戻しつつあったとはいえ、この辺にはまだ終戦後の混乱がうずまいていたのである。会社ビルの隣に「スバル街」があった。洋画のスバル座のある広い通りから少し段々を上り、奥は行止りのアスファルトの小路をはさんだ一角に喫茶店、中華料理や、ブティック風の店が並び、芸能人もよく出入りしていた。当時としては気のきいた一角であり、仲間とよくいったが、飲む方はなんといっても有楽町駅反対側の「スシ屋横町」であった。

鮨屋、ラーメン屋、おでん屋、焼き肉屋、ジャズ喫茶

からあやしげなバーなど、百軒以上の店がひしめきあい、しょう油や肉のやけるにおいと、立ち小便のくささに満ちていた。値段もまちまちで、そのときの懐具合と気分で仲間とよく飲んだ。終電車もなくなり、どこかで沈没したことも再三あった。

いま、あの一帯には当時のおもかげはまったくない。会社のあった焼けビルやスバル街のあとには、二十階の南・北有楽町電気ビルが偉容をほこっており、スシ屋横町付近は東京交通会館となっている。ヌードダンサーに胸をときめかした日劇や、屋上より伝書鳩が夕焼けの空にはばたくのが印象的であった旧朝日新聞社は、有楽町マリオンにかわっている。

今でも当時の面影を少しでものこすのは、有楽町駅からマリオンにぬけるせまい「朝日街」と、有楽町線路沿いの「ガード街」であろう。昨年、当ペンクラブの友人がガード街の酒場につれていってくれた。大勢のサラリーマンが、飲み、食べ、声高に笑い話していた。そのうち、このあたりは、終戦後、大陸からの引揚げ者や、復員軍人を泊めて感謝された「日の基一泊寮」のあとではないかと思った。店の名をきくとやはり「日の基」とのことである。しばし友人の語りかける言葉も耳に入らず、戦後この有楽町一帯で、仕事と生活の大部分をすごした、若き二十歳代のことを思い出し感慨にふけったのである。

敗戦から五十年

野村　嘉彦

敗戦から五十年、今新しく記憶に甦る日米学生会議の貴重なまた楽しい思い出。そこには今なお少しも変わらないアメリカ人の考え方を見ることが出来る。

一九四五年小生は「敗戦の詔勅」を後ほど解体された三井物産の事務所で聞きながら唯、悔しさと切なさで涙が頬を流れるに任せていた。以下学生会議の追憶を辿って見たい。

一九四〇年は丁度太平洋戦争即ち、真珠湾攻撃の一年

前で日米関係が険悪になって来た頃、将来の両国の友好と平和を夢見て、現在は駄目でもお互いが年を取り両国の中堅となった時に戦争が無くなる事を期待して今から仲良くしてその基盤を築こうという目標の下に、学生の自治で一九三三年から当初は細々と実施されて爾来回を重ねる事七回、主として学生自身によるカンパによって日米交互に開催地を引き受けて、一九四〇年は戦前最後となり且つ最大規模でアメリカ側男女各二十五名計五十名が来日し、日本側男女合計百名、その三割が女性であった。

この会議は当時の日米間の険悪な空気の中では、一般から見れば一寸異様な企画と見えたらしい。勿論、理解ある層、例えば外務省、文部省等の担当者、ならびに財界の一部からは物心両面のご援助を頂いた。

しかし軍を中心とした当時の帝国政府の政策に勢力を持つ向きからは陰に陽に悪辣な干渉があり、特に当時の悪名高い「特高」の連中が、学園のカンパスに潜り込み参加者の思想動向に関する一方的、且つ行き過ぎたチェックを行い、ある若い女子学生は外務省発行の我が国の経済統計を所持していたかどで警視庁に連行されて、極めて不愉快な尋問をうけた例もあった。（彼らの言う利敵行為即ちスパイ容疑であった。）

さて会議における私の参加した「政治経済グループ」における担当のアジェンダは、

一、日本の中国大陸への「膨張政策」に関する考察（expansion）

二、太平洋における軍備と国防問題

今でも一寸恐ろしくなる議題であった。

私の主張は次の諸点、即ち

（一）世界の列強で今までに膨張（expand）しなかった国があるか。皆expandして今日の姿になったのでは無いか。但し日本の長い鎖国の間に各国は既に地盤取りを終わっており、出るのは中国しか無かった。従って。pen door policyを主張したが列強の袋だたきに会った。一寸酷いのでは無いか。

日本は土地が狭く人口は多い。それに年々百万人増加する。それにも拘らず各国は米国を初め日本人を締め出している。従って最後に残されているのは中国大陸であ

る。中国は長い間列強の侵食に苦しんでいる。中国を初めアジアの各国は長年白人の支配に苦しんで来た。日本軍の大陸進攻は彼等を白人から解放する為の聖戦であると信じている。日本はこれらの地域に対して何ら領土的野心を持っていない。どうか日本の行動にもっと理解を示して欲しい。その上で世界に対して日本に対する誤解を解消し正しい世論を喚起して貰いたいと強硬に論じた。

勿論当時は日本政府の一方的な教育、指導によって我々学生は日本のみならず世界の動向や真相、真意を知らなかったので、全く独善的議論を米国の学生に吹っかけたわけで、日本の敗戦後、真実に関する理解が深まるにつれて、今更に若い時の暴言に深く恥じ入る次第であるが、その当時私の暴論に対して示された米国学生の総合的な見解は今尚私の胸の中に深く刻まれている。

米国学生の意見

（一）外国へ軍隊を出すのは侵略である。

理由はどんな「美辞麗句」を付けても要するに言い訳に過ぎない。要するに自国の安全と利益と権利の主張の為である。もし単に相手国の利益だけの為に出兵すればその国の主導者は「foolish」と言わなければならない。

（二）自国の人口が国土に比して過大であると思えば先ず「Birth control」をすれば良い。日本政府が人口増大を野放しにしているのは「やがて日本人は世界を埋め尽くすつもりなのか。恐ろしい事だ。」と反論された。

（三）与論をもっと重視すべきである。与論や世論に反して成功した政府、国家は未だ嘗て無い。尤も我々米国は与論の国と言われているが、与論は実際は時の政府が巧妙に政府に有利な与論を作り上げるように作り上げているのである。現に我々米国の学生は、過去に間違ったことをやった事がないと教えられている。

このフランクなディスカッションは閉ざされた社会に住む日本学生と、フリーな世界に学ぶのびのびとした米国の学生の触れ合いにより両国の将来に大きな明るさを期待させた。

我々は米国の学生の議論に色々と反撃を試みた。議論は結局すれ違いに終わったが、矢張り自由は良い事だと感じた。またbirth control に対しては、米国は日本をハワイのようにして最後にはぶん取ってしまうのだろう

と反撃した。その通りになっているが、彼等は結局日本を占領する気持ちは全く無い、即ち取る程魅力のある国ではないと考えていたようである。日本側は夢にも米国と戦う意欲は持っていなかった。だが若し戦っても負けるとは思っていなかったのが偽らざる当時の心境であった。

両国学生が完全に一致したのは共産主義の脅威であった。

全然一致しなかったのはヒトラーに対する評価であった。

日本側は彼はヒーローである。今後かれの動静を正しく評価し注意すべきであるとの見解を表明した。事実当時の我々学生は英独が戦えば総合戦力に優れている英国の勝利に終わると信じているのが大部分であった。これに対し米国側は一致して彼はcrazy なりと一笑に付したのが印象的だった。

さてそれから一年半余り。日本は米国はじめ世界を相手に愚劣な戦争を仕掛けて大敗北を喫し、一方ハワイは完全に米国の一州となった。

更にそれから朝鮮戦争、ベトナム戦争（何れも米国の一方的進攻）、イ・イ戦争、アフガニスタン、パナマ、ニカラガ、そして先般の湾岸戦争、更にはベトナム戦争末期における米軍の進攻に端を発したカンボジアの内戦と周辺国の絡み合いを静かに振り返って見ると、五〇年前の米国学生が出した結論（進攻は侵略）が私の頭の中でちらつくのである。思うに人間は過去百年否三千年の間で、文明の代名詞とされている科学は現象的、物質的には大きな進歩を達成したが、われわれの住む世界は全く何らの進歩もなかったのでは無いかと些か寂しく感ずる。

世界は矢張り我々の少年時代に体験した「がき大将の支配する社会に過ぎない」と言えるのではないだろうか。腕力の強いがき大将と小金を持った青白いインテリの組み合わせが、子供じみた現代世界の平和維持の為には実に奇妙なことではあるが、正に不可欠の要因といえないだろうか。不思議な国アメリカと奇妙な国日本が今こそお互いをもっと勉強し、より知りあって小異を捨てて大同につく精神で、一心同体的心意気で世界の荒波を乗り

越えて前進する事を世界平和維持の為心から希うものである。

鹿地亘事件について

きりん　たかし

松本清張が「日本の黒い霧」シリーズで、下山事件、三鷹事件、松川事件等を追及して行く内に、占領軍の謀略と推理し作品として発表した。見事な見識に敬意を表したい。

その中でも、鹿地亘事件は、真相がわからない、と、1960年に述べている。三十五年経過して、事件の内容が風化している。そこで、別な角度からスポットをあててみることにする。

1

昭和二十三年の秋、中国から帰国した鹿地亘は夫人の池田幸子と、新宿区下落合にひっそりと住んでいた。まだ、戦後の混乱から抜け出せずその日の食料を求めて、あくせくとしていた時であった。当時の落合は、上落合、下落合、西落合の三地域になっていた。上落合には、戦前から、幸徳秋水のアジトがあったし、下落合には、階段のある坂の中段に林芙美子の屋敷があった。画家や作家など多くの文化人が住んでいた。西落合には、共産党の幹部や、企業の社長や役員の邸宅等があった。

町の青年達は、「自由、平和、民主主義とは何か」勉強会を開いていた。その青年達が「鹿地亘の時事講演会」を下落合の御霊神社で開いた。第一回は、十五名程の人達が集まり、鹿地亘を囲んで車座になり話を聞いた。中国での反戦運動や、日本脱出の時等の苦労を淡々と語った。参加者達は穏やかに、凛とした態度で、平和の尊さを説く人柄にひかれた。毎月一回、鹿地亘の話を聞こうということになった。

この時は夫人の池田幸子も同席したが、すでに鹿地亘は胸を患っていたようだ。

二回目の会合の時のことである。司会の青年が、突然、

二十名程の聴衆に問い掛けた。『皆さん、ここに戸塚署の刑事が来ています。あなたは戦争中は特高でしたね、平和な世の中になったのに私達を監視しに来たのですか、変ですね。はっきりと答えてください』一瞬、騒然となった。『そんな奴は出ていけ』の声がとんだ。『飯田刑事でしたね、ご説明ください』『いや、私はただ個人の資格で、鹿地亘先生のお話を聞に来たのですから』

『皆さんのご意見は、』『即時、退場』全員の声が響いた。そして刑事には外へ出てもらった。座談会は一時間程でおわったが、刑事は会合が散会するまで、神社の境内で様子を窺っていた。四、五回鹿地亘の講演会は続けられたが、毎回、刑事がやってきたので、鹿地亘の講演会はうちきった。鹿地亘を見張るのが目的だったのか、青年会の左翼化を監視していたのか、さだかではないが、GHQ情報部の指令で、鹿地亘と青年会の動向を監視していたことは間違いない。

2

鹿地亘はペンネームで、本名、瀬口貢。明治三十六年生まれ、鹿児島県出身。七高を経て東大を卒業した。プロレタリヤ作家同盟の一員となり、プロレタリヤ文化聯盟へと発展的解消する中で、そこの書記長となった。その後、リンチ共産党事件で二年間の刑務所暮らしをして出獄した。昭和十一年、神戸から青島へ、更に上海へわたった。ペンネームは日本から中国へ渡る、つまり、「かのちへわたる」鹿地亘と、平凡につけたと語った。

上海では、内山完造の世話になり、魯迅を紹介され、「魯迅全集」の翻訳などして、豊かな生活をしていた。この頃、池田幸子と結婚し平穏な生活を営んでいた。しかし、昭和十二年、支那事変の動乱は上海におよび、鹿地亘は漢口へ、更に、重慶へ逃れた。この時は、孫文未亡人の宋慶齢や郭沫若の援助をうけた。そして、政治部長の陳誠の下で、対日宣伝を担当し、抗日宣伝活動機関の反戦同盟を作り、終戦まで活躍した。ここでの活躍が、戦後アメリカ情報部の鹿地亘を逮捕した目的であった。

当時の重慶には、蒋介石の国民党軍と毛澤東率いる赤軍の接点があった。アメリカ側の情報は国民党軍の情報将校鹿地亘が担当していた。そして、ロシヤ側の情報は赤軍へ、野坂参三が担当していた。

つまり、鹿地亘は、アメリカの情報も、ロシヤの情報も暗号解読できる数すくない情報員であつた。情報の交換や操作によって、戦争の局面が変化したり、残虐な殺しあいに、心に期するものがあつたようだ。

もう一つ大事なことは、中国においても、日本でも、鹿地亘は共産党員ではなかった。その証拠に、日本に帰国した時、共産党や労働組合等の派手な歓迎を受け、あたかも凱旋将軍のような態度の野坂参三にくらべ、何時、帰国したのかわからない状態で、ひっそりと日本の土をふんでいることでもわかる。

3

昭和二十六年、サンフランシスコ平和条約、つまり、単独講和により、日本は連合国軍による占領から、独立国としての第一歩を踏み出すことになる。しかし、朝鮮戦争の終結とともに、米ソの対立が激しくなり、冷戦時代に突入してゆく。

日本が独立したとはいえ、アメリカ情報部は残留し活躍していた。核兵器の開発、宇宙への開発競争と冷戦は発展、激化していくわけだが、キャノン機関は、米国の情報も、中国、ロシヤの情報も解読出来る、鹿地亘に目をつけたのは当然ではなかつたか。

藤沢で結核の療養中の鹿地亘を、拉致せざるをえない状況になつていた。ところが、病弱な鹿地亘の頑強な抵抗と拒否にあい、キャノン機関は彼の始末に困り始めていた。そんな折、米軍キャンプのボーイ山田が、監禁中の鹿地亘から手紙を託され、内山完造に届けた。新聞等が取り上げたため、にわかに「鹿地亘事件」としてクローズアップされたため、鹿地亘は釈放された。その後国会でも取り上げられ、公安当局は三橋なる人物を登場させ、鹿地をロシヤのスパイであつたと証言させた。だが、立証されずにおわった。

また、『黒い霧』を執筆した松本清張も一時期、米軍情報部に監視されていた。

戦後五十年、もう一度、占領下の七年間の日本の空白時代を掘り起こす必要があると、考えている。

疎開地にて

別宮　善郎

抜けるように青い空。だれもが思い出すその日は、山奥の小さな町では、ひときわ暑い日でもあった。

少年が玉音放送を聞くことができたのは、重大放送の予告があって周りから足止めされていたからだろう。雑音混じりの放送は彼には「最後まで戦え」との勅旨にしか聞こえなかった。ところが、大人たちは口々に「負けた」とつぶやいて鼻をすすり上げている。

少年が上目を遣うと、長い緊張から解放されて行き場を失った彼らの表情が醜く変わっていて、少年を驚かせ惨めにさせた。

「違う！まだ負けてなんかいない！」

絶叫すると、いたたまれなくなって土間に駆け降りた。外に出て、自転車に飛び乗った。

昼下がりの町にはひとのかげがなかった。隣村まで足を伸ばしてみても、田畑からひとが消えていた。少年は力一杯ペダルを漕ぎながら、「神風はどうした」と泣き叫んだ。

疲れて道端のくさむらに倒れ込んだ。目をとじると、蝉しぐれもなく、時間さえも停止したかのような静寂に包みこまれた。

怖くなって、少年は目を開けた。見上げれば、抜けるように青い空。少年は掌で涙を拭いながら、でもこれは汗だとまだ負け惜しみを自分に言い聞かせていた。

少年は母親の実家に縁故疎開していた。伯父が営んでいる雑貨商は屋号をいえばだれでも知っている老舗ではあったが、商いはすっかり細っていた。少年が文具を必要とすると、伯母は「あっちで買っておいで」と金を渡してくれる。あっちとは伯父が暖簾分けしてやった丁稚の店のことだった。

「坊ちゃま、おまけづら」

少年がその店に顔を出すと、愛敬溢れた内儀さんがちょっとした景品を少年の手にのせて、少年を恥ずかしがらせ

た。

伯父夫婦には国民学校二年生の息子がいた。彼は東京からきた従兄がもの珍しかったのか、少年をしつこく観察していて、少年がちょっとでもへまをしようものなら、それを家族の前であげつらって少年を苛立たせた。

秋のある日、少年は従弟を裏庭に引っ張り出して、土蔵の前で思い切り殴りつけていた。子供会のきのこ刈りがあって、少年は年下の少女とふたりだけ山奥に取り残されてしまい、帰ってくるのがだいぶ遅れた。それを従弟が待ち構えていて、からかったのだ。

一緒に迷子になった少女は一軒置いた呉服屋に疎開してきた病弱な東京っ子だった。

子供たちは班ごとに早朝体操を義務づけられているので、まだ暗い中を当番が拍子木を叩きながら仲間を起こしに回る。彼女が当番のときには、少年はわざと寝坊して何回も何回も名前を呼ばせては彼女を困らせた。

少女がたまに外に出て来るときは喉に湿布を巻いているので、少年は彼女ができる遊びにつき合ってやった。

秋が深まると、少女の表情から笑みが消えた。空襲で両親を失った、と聞かされた少年は彼女にしてやれることの何も持たない自分が歯がゆくてならなかった。

「やさしいから、あなたが好きよ」

国民学校三年生のくせに大人びた言い方が少年の胸をときめかした。

病弱といえば、少年も幼い頃よく熱を出して床に臥せたものだった。甘えん坊で、いつも母親のたもとにしがみついていた。

疎開はそんな少年を千仞の谷に突き落としたのに似ていた。そこの生活は厳しくて少年を甘やかすことがなかったから。真冬でも裸足だった。出征兵士を出した農家の田植や草取りに狩り出された。松根掘りもやらされた。

でも、そうした毎日が少年をたちまち変えた。丈夫になった。方言で土地っ子をやりこめるようになった。そうなると、もう両親のことなど忘れて、町なかを我がもの顔に走り回っていた。町のひとたちも微笑んで少年を見守っている。そんなこともあんなことも、今の少年にはすべてが以前からあったかのように当り前のことになっ

ていた。

冬のある日、休みの長い仲間の様子をみに、少年はいやがる子分たちを引き連れて千丈おろしが粉雪を舞い散らす山あいを歩いていった。病気なら見舞うのが当然だし、ずる休みなら登校を勧めなければならなかった。何しろ、教師や級友のだれ一人としてその子のことを心配してやらないのだから。

川べりの掘っ立て小屋は傾いていて、革を焼くいやな匂を放出していた。その子はちらっと顔を覗かせただけで、声も交えずに引き込んだ。代わりに小柄な女性が出てきた。

「坊ちゃま、こんなところに来るでねえ。早く帰ってくんろ」

結局、その子は二度と学校に戻らなかった。少年は、それでもまだ、貧乏があの母子をいじけさせていると思い込み、手をこまねている教師をせめなじって困らせた。

春のある日、学校から戻ってきた少年は奥座敷に呼ばれた。母親が床の間を背にして座っている。懐かしい！でも、少年は突っ張って、母親の前にかしこまって正座した。

「お父さまがお亡くなりになりました。たまたま深川に出掛けていたお父さまは三月十日の大空襲に巻き込まれたのです」

少年は目を細めて遠くをみた。B29の航跡を追い掛ける以外に戦争の体験を持たない少年に突然敵が襲い掛かってきたのだ、畜生！。

胸がうずいたのは、悲しい知らせがあの少女と共通の経験を持たせてくれたからだった。

涙ぐんだのは、いずれは海軍兵学校に進むと決めている自分とは違って、親のないあの少女がこれからどうやって生きていくのかと思いを馳せたからだった。

翌日、少年は父親の遺骨を抱いて、コヒガン桜の紅霞む町並を、母親の歩調に合わせてゆっくりと歩いた。

菩提寺は高台にあった。行事を終えたあと、少年が墓地から町を見下ろしていると、伯父が隣に立った。しばらく沈黙したあとで、彼は右手を伸ばして左から右へと

動かした。
「お前の家はこの範囲の土地を所有していたんだぞ。代々の大地主で、立ち並ぶ倉にぎっしりと詰まった米俵が今でも目に浮かぶ。跡取り娘の祖母さまはそりゃ、男勝りのしっかりもので……。だが、魔がさした」
祖母が大きな相場に失敗したのは、少年の母親が父親の許に嫁いできて間もなくのことだった。そのため、少年が今通っている国民学校の敷地も、学校に隣接している町役場の敷地も、いや町の過半を占めている土地のすべてを手放すことになった。
母親はしゃがんで草をむしっている。
「栄枯盛衰は世の常のこと。そう言って、祖母さまは泰然として恥じることがなかったな」
少年の父親は祖母と妻を連れて故郷を捨てた。祖母は少年の誕生と入れ替わってこの世を去っている。
少年の父親は息子に一巻の家系図を遺していた。古びて乾燥しきったそれは開くと、茶褐色のこまかな紙片を少年の膝に落した。
「二代にわたって不運が続いた。だが、祖母さまと父さまにならって毅然と生きるんだぞ。そして、早く大きくなって祖国を守れ」
伯父の話に耳傾けながら、少年は町のひとたちが彼の前では一様に無口で没落の歴史に触れてこないことに気がついた。そのぬくもりが彼の成長をはぐくんだのではなかったか。
夜、少年が奥座敷で母親と並んで床につくと、母親は掛け布団を持ち上げて「こっちへ来てもいいのよ」と誘ってくれた。少年が首を横に振ると、母親は微笑んで眠りに入った。やせた母親の背が頼りなげに震えている。
「母さん、ぼくがいる」
少年は母親を守り抜く覚悟に身震いしながら、しかし、声に出す勇気はまだなかった。

或る外国人の質問

角谷　朗宏

私の外国の友人で二、三年に一度日本に来られる方がおります。同氏は無類の知日派で、色々のお話しが出て来るので、私にとっても、外国人が日本をどう見ているかを知る上で参考になる点も多く、来日された際にはお目にかかれる事を楽しみにしております。一応同氏をA氏として置きましょう。

今回も来日されましたが、同氏のスケジュールによれば、週末土日を挟んでの日程になっておりますので、久し振りに週末を利用して日本の何処か名所旧跡にでも御案内しようかと提案しましたが、何のためらいもなく『ノー』と断られました。同氏の意見では、週末は皆様にはそれぞれ家族サービスとか、趣味の研究等おやりになる事が色々ある筈なのに、それを妨害したくないと言うありふれた理由もあるにはあるが、更に自分にとって前向きな考え方として、外国に滞在して時間のある時は、出来る事なら自分の足で色々の処を歩き回り、実際に肌にふれた形でその国の実情を知るようにしたいとの事でした。唯一つだけ当地でホテルから地下鉄に乗ってその終点迄往復して帰って来るにはどの様に切符を買い又電車に乗れば良いのか教えて欲しいとのことで、その点だけやや詳しく説明して置きました。

週が変わり、同氏が帰国される直前に一緒に食事をする機会がありましたので、週末をどの様に過ごされたのか聞いてみました。同氏の話では、地下鉄に乗りその終点駅で降り、駅を中心として東西南北に気の向くままにぶらぶら散歩をしたとのことでした。彼の印象としては、東京の町は何処へ行っても清潔であり、日本独自のものと欧米の影響が程よくミックスしている処は見事であるとの褒め言葉がありましたが、これは外国人よりしばしば聞く発言であり、特に取上げる迄もないことと思います。むしろ彼がホテルと目的地の間で利用した地下鉄の中での話が極めて印象的でした。

彼が地下鉄に乗ったのは週末の筈ですが、彼の見た処

では乗客の内訳は三分の一づつに別けられ、即ち第一の三分の一は読書する人達、第二は居眠りする人達、第三は同伴者同志で談笑する人達になるのではないかとのことです。そしてその乗客の表情は彼が今迄旅行した何処の国の乗客の顔よりも穏やかで平和的であり、彼の経験から言って、日本人は本質的に世界で最も平和的な国民ではないか。勿論これには日本の強い経済力で裏付けられた豊かさがバックになっていると思うとも付け加えました。それから彼は私に対し、自分としてどうしても納得出来ない点があるとして、私の回答を求めてきました。即ち彼としてはそんな穏かな顔をした日本人が、どうして戦争中に数々の残虐行為を犯したと報ぜられているのか全く想像がつかない。此の点日本人としてどの様に解釈し又説明するのか教えて欲しいとのことでした。残念乍ら私としてはその質問に対しその場で明確な回答が出来ない儘に同氏と別れました。

私はその後機会ある毎に此の問題をどの様に解釈したらよいか考えるようになりました。私なりに色々と考えた一つの結論としては、日本軍隊特に日本陸軍では新兵イジメの風潮が蔓延して軍隊内部に独特の雰囲気を醸し出し、階級さえ上なら自国軍隊の新兵にさえ乱暴狼藉の限りをつくしても何とも思わぬ日本軍人が、外国人捕虜に対し残虐行為があったとしても、それは充分に予想される様な気がします。幸か不幸か、私は昭和三年生まれのため、ギリギリの処で軍隊経験をしておりませんが、軍隊経験のある方の大半は、軍隊での新兵イジメに対しては批判的と諒解しております。例えば昭和四十年代に日本経済新聞の『私の履歴書』の欄に寄稿された方達は年齢的に見て殆んど軍隊経験を持っておられましたが、例外なく軍隊の不合理性を指摘しておられたのを記憶しております。

又私の友人で、既に亡くなられましたが、一緒に酒を飲んだ時などに、その人が戦時中軍隊で外国人捕虜の管理の任に当たったが、上官からはっきりした理由もなしに彼等を殴打せよと命令され、本人はやり度くないので躊躇していると、上官から彼自身に鉄拳制裁が飛んで来る始末でやむを得なかったが、今でも彼等には申訳なかったと思っていると告白していた方がおられました。何れ

にせよ軍隊に入った途端に一般の日本人社会とは全く異なった雰囲気に入れられ、そこでは可成り不合理に物事が取進められたとしてもそれが当り前と言うことではなかったかと推測されます。昭和三十四年から三十六年にかけて五味川純平のベストセラー小説「人間の条件」が映画化され、その中で主演の仲代達也さんが軍隊に於ける新兵の立場を見事に演じておられるのを見た事があります。

この点で残念なのは明治維新以来、日本の陸海軍にも後日名将軍としてその徳望を称えられた方がおられる事は承知しておりますが、軍隊での新兵取扱いにつき警告を発する勇気のある将軍の話は聞いておりません。勿論当時の軍隊内の雰囲気から言えば「そんな警告を発する将軍がおればそれは腰抜けだよ。」と言う事で、それよりも新兵に対して、お前達は天皇陛下の赤子だと持ち上げて置いて、現実には塵芥（チリアクタ）の様にこき使う事こそお国のためだとなっていたのではないかと思います。

この様な私の考え方から、A氏が次回来日された時には前回の同氏質問に対し「日本人は同氏御指摘のように、国民性としては穏健で平和的であるが、例外として戦争中の日本軍隊、特に陸軍では一般の日本人社会とは違った独特の雰囲気があり、それが一部で残念な行為に及んだのではないか」と言う回答を用意してはと思っております。

唯私自身軍隊生活の経験が無い事から、この問題は現実に軍隊経験された方の意見を出来るだけ多く求めるべきではないか。そして私の考え方に間違っている点があれば訂正して行きたいものと考えております。戦争が終わって五十年を経過した現在軍隊経験のある方は六十八才以上になっております。従って今が彼等から意見を聞いて置く最後のチャンスでもあるでしょう。勿論同じ軍隊経験と言ってもその方の置かれた環境、例えば直属上官の性格如何でも可成りの違いはあると思います。又残念乍ら敗戦で終わった戦争については、不愉快な思い出も色々あるでしょうし、それを今更無理に引き出そうと言う気持ちは毛頭ありません。併し今回の如く知日派の外国人からこの問題につき日本人としての回答を求められた時に、出来得ることなら自分達も含めて納得出来る

ような回答を準備して置きたいと考える次第です。

アジアをめぐっての感想

水谷　汎

私はアジア・太平洋戦争に従軍中にシンガポールで敗戦となり降伏した。

開戦当初から敗戦必至と考えていたが、敗戦が現実のものとなってみると、日本は米国の植民地となり、彼らの前に膝を屈して生きて行くのかと胸中暗澹たるものがあった。

然し一方では、死なずにすんだ!!軍国主義から解放される!!自由とデモクラシーの時代がくる!!と希望と歓喜の情が胸底から沸々と湧いてきて複雑な心境の日々であった。

八月末の一夜、交誼のあった中国人が私に次のように諄々と説いた。

「日本人は負けた!!負けた!!と悲観落胆しているが、負けたと言っても日本は初めて負けたのだ。国家には栄枯盛衰がある。日本人も再建復興に努力すれば、やがて一流の国になるだろう。ハラキリを絶対にするな!!

日本は我々を英国の圧政から解放すると宣伝したので日本に協力してきたが日本も結局は英国と同様に圧政をしいてきた。日本が敗退し再び英国が侵入してくるが、我々は彼らを追い払う覚悟だ。この解放闘争に日本人を巻き添えにしたくないから一日も早く日本に帰ってほしい。」

この忠告を受けて私は豁然と心機一転したことを鮮明に記憶している。

今年は戦後50周年だと喧伝され、これにかかわる論議や行事が百出している。米国政府は太平洋戦争終結50周年の記念式典を9月2日に挙行すると報道されている。

アジア・太平洋戦争とは何であったのか?

これについて、私見の大要を述べる。

明治維新以後、アジアに軍事的、経済的侵出を重ねて

きた日本の対アジア戦争と、アジアを取り巻く侵略主義的欧米諸列強と日本との激突が複合したものがこの戦争であった。

この私見に対し正当防衛戦争であったと主張する論者をはじめ、反論者が多くいる。

「大東亜共栄圏」、「聖戦」、「東洋諸民族の解放」の美名の下に侵略戦争の道を歩んだことへの自己批判を怠り、いまだに「アジア諸国の独立と経済発展は日本の戦没者のたまもの」なる見解が根強く潜在している。

更に欧米列強のアジア侵略は、日本の侵略より以前に行われており、戦後も侵略しているにも拘らず、その事は棚上げされて謝罪が行われたこともないのに、何故に日本だけが侵略国呼ばわりされるのかという反発意識が国民の間に地下水の如く流れている。

この問題について、我々が前車の轍を踏まぬために国民的合意の形成が急務である。この急務を達成するために世界の近現代史のとしてのアジア・太平洋戦争の究明が不可欠である。この究明のため、戦死者の遺族、戦犯死刑者の遺族、戦犯受刑者及びその遺族、従軍者、内外の戦争被災者、学者などをひろく糾合して徹底的な論議を重ねることが必要である。

次に戦後の日本の足跡はどうか。

日本は米国の占領下におかれたが、米ソ冷戦下の米国の世界戦略に基づいて米国は日本の経済復興を全面的に支援し、講和条約、日米安保条約が締結（一九五二年四月）され、いわゆる「独立」をした。

その後、日本は賠償を通じてアジア特に東南アジアとの経済関係を復活し、更に朝鮮戦争特需によって経済力が増強された後は民間投資、ＯＤＡが精力的に行われてきている。

この経済動向を世界、特に東南アジア諸国は如何に見ているか？日本が経済的侵略主義を志向していると警戒されぬよう慎重に対処して、日本の前途についての選択肢の決定を再び誤らないことを期せねばならない。

以上、浅学を省みずに雑然と、月並みな所感を述べたが御叱正をいただきたい。

あの大戦で非業の最後を遂げた人々の冥福を祈って、擱筆する。

終戦

岩崎　洋一郎

その日の正午は小田原駅の前の広場にいました。木製の簡単な台が正面に設けられ、小型のラジオが用意されていました。

玉音放送という前代未聞の大事件があると言う事で、その日の朝我々成蹊学園の尋常科（中学のこと）の三年生は学級疎開先の箱根の芦の湖畔から下りてきたのでした。箱根寮には三年生のみが約８０人ほど疎開しており、文字通り晴耕雨読の毎日でした。戦況が日に日に不利になり、方々の前線での玉砕が報道される環境のなかでの玉音放送は、本土決戦に当たり国民に一億玉砕の決意を促すものと先生方が考えたのも無理はないと思います。生徒たちにこの際親との「最後の別れの為の帰省」をさせようとの配慮であったと思われます。生徒はその日は東京に帰ることが許され、戻る期日は「出来るだけ早く」という事だったと記憶しています。実は一週間前に私の母が別れのために箱根に訪ねてきました――私の家の隣組に中野の憲兵学校の校長が住んでおり、その夫人から広島に投下された新型爆弾の破壊力が想像を絶するもので、十万人の方々が一瞬に亡くなられたと聞き、その内東京もその被害に会うと覚悟しての訣別の訪れでした。

生徒が帰省すると言っても、もう交通機関は満足に動いていないし切符もなかなか買えないし、東京に帰っても家が焼かれている人もいようし、又本土決戦となると十五－十六歳でも男子は戦闘に駆り出されであろうし、明日の予想が付かない状態でした。疎開先の芦ノ湖湖畔は今でこそリゾート客で賑わいますが、当時は農作物もろくにできない、交通が不便な、そして山間でラジオの電波もよく入らない田舎でしかありませんでした。バスが一日に数本かしか走っておらず、元箱根から小湧谷駅まで山道を間道伝いに歩き、辛うじて運行されている登山電車を待って小田原に下りてくるのです。正午までに絶対に間に合う様にするために、朝早くから寮を出発したものです。

昼少し前に小田原駅にたどり着けたので、駅前広場で玉音放送を拝聴することにし、仲間も段々と集まってきました。当時は広場に大勢の人が集まるのは危険があったのです。もうその頃はサイパンからのB－29爆撃機のみでなく、艦載戦闘機による機銃掃射が連日行われ、広場に居れば恰好の標的になりかねません。でも、その日は飛来する飛行機の爆音もなく人数が膨れ上がってきたのでした。

何処からともなく一人の陸軍の軍服を着た中年の退役中尉が出てきて、壇上に登り我々に向かって「全員整列！そこの学生！私語せずに早く隊を組め！」等と横柄に命令を下し、仕切るのです。まるで陛下の御名代になったように。当時は軍人に逆らうと大変で、まごまごすると活を入れるとかで往復ビンタに見舞われるかもしれません。

そうこうする内に時間となり、放送が始まりました。ラジオが小さいこともあり、雑音が多く良く聞き取れませんでしたが、皆、一生懸命に耳を澄まして一語も聞き漏らすまいと汗が滴り落ちることも忘れていました。まず感じたのは陛下のお声のキーが高いことでした。毎日こんなお声で話しておられるのかなと、フと考えてしまいました。次は難しい言葉遣いでした。詔勅なので仕方がないのでしょうが、難解な文章でした。次第に周りの人達がざわついてきました。何が話されているのか殆どの人は分かっていない様子でした。無理もありません。私も所々しか聞き取れず、分かりませんでした。でも、キーワードがはっきりと耳に入ってきました。「ポツダム宣言の受諾」「忍び難きを忍び――」これで「日本が負けた」「日本が降伏した」とだけはっきり分かりました。「やっぱり！」と言う感じでした。国民一億総玉砕は無くなった！。

放送が終わり人々が放心した様に立ちすくんでいます。いま何が話されたのか――徹底抗戦の激励だと受け止めている人が多かったようです。良く聞こえずに「どうなったの？」と聞いている同級生もいます。例の軍人も未だ壇上でそっくりかえっていました。でも途方に暮れた顔をしています――何が起こったか完全に把握していないようでした。わざと聞こえるような大きさの声で

「陛下が戦争を止めるって」と言いました。軍人はこちらを睨んでいます――殴られるかなと逃げる体制をとりました。軍人はほっと大きくため息をついてから、元気なく壇を降りて人陰に隠れるように消えてゆきました。

朝から敵機の爆音が聞こえない謎もここで急に解けました。やけに静かです。人々も未だひそひそと小声で話しています。予想外の展開で呆然としています。

何時か習った「国破れて山河あり」と言う句が何故か鮮やかに浮かんで来ました。この言葉が何故か凄く重い実感があり、遠くの箱根の山並みが綺麗に見えて、恐らく一生忘れ得ない光景になる予感が体を駆け抜けてゆきました。

八月十五日のあとさき

遠藤　俊也

昭和二十年八月十五日。日本人なら皆そうであろうが、私にとって特にこの日は忘れ得ぬ日となった。

その日は、私は、帝国海軍の一士官として、呉から大湊への赴任途上の車中で突然終戦の報に接し、まさに晴天の霹靂。虚脱感の中、文字通り途方に暮れた一日であった。

――大学を一年修了、学窓から二年現役の海軍主計見習尉官に応募、首尾よく合格したものの、もう敗色が濃くなりつゝあった昭和十九年秋から翌年の春までの半年間東京の築地にあった海軍経理学校で、空腹に悩まされながらの猛特訓を克服。そこを卒業したあと、私は、今までの海軍の南方作戦の最大の根拠地、呉軍港に配属、主計少尉に任官して、度重なる敵機の襲来の中、本土決戦の準備のための激務を遂行して来た。

私のいたところは、呉海軍軍需部第四課、課長は主計大佐で、士官だけでも、他に少佐二名、大尉三名、中尉二名、少尉四名の大世帯で、末席の私などは、南方作戦のために用意された莫大な量の被服および糧食を本土決戦用に分散疎開させる現場仕事で日夜忙殺された。軍港外の島々に倉庫を築き、隧道を掘り、そこに物資を運搬し隠すという役目であった。民間の土木会社との折衝、作業の監督、果ては、水兵を沢山使っての船での物資輸送など、今考えると青二才だった自分にしてはよくやれたと、つくづく感心してしまう。全く若者の体力と軍人としての責任感の賜物であろう。

それがいま、私は、海軍省人事局からの電報一本により、さいはての地大湊海軍軍需部への国内としては長旅の転勤途中にあった。

私が東京行きの急行列車に乗ったのは、八月十四日の夜だった。敗戦の色がますます濃くなってきて公用の旅も激減しているのであろうか、普通車は広島方向からの避難客でかなり混んでいたが、この二等車（今でいうグリーン車）はガラガラであった。燈火管制のため、車内は薄暗く、窓外は闇である。たまに駅についても乗降客はほとんどない。

途中、地方の大都市を過ぎる。B29の焼夷弾空襲を受けたのであろう、街は紅蓮の焔に包まれて真赤に燃えていた。今まで空襲のたびに何回も見た光景である。私には何の感動もなかった。岡山か福山あたりではなかったかと思われるが、今の私の記憶は定かではない。列車は駅で一寸停車したあと直ぐ動き出し、残り火が赤くくすぶる駅の構内をあとに物憂げな汽笛を一声二声しぼり出して一路東へ暗闇の中を突走ってゆく。私は、何となくさびれた気持ちになり、連日の疲れが出たのか直ぐ寝入ってしまった。

人声がするので目が覚めた。大阪、京都あたりから乗客が増えてきたようで、もう空は明るく、列車は大津のあたりを走っているのか、琵琶湖が望まれた。湖面の漣が眩しく朝陽に映えている。持参した朝食用の握り飯を口にしていると、昨夜から同じ客車に乗り合わせていた若い陸軍中尉が私の席に寄ってきてこう囁いたのである。

「今日正午に陛下の重大放送があると、さっき乗って

きた人から聞いた。これは只事ではない。降伏のようだ。エライことです。」

私は愕然とした。そして、わが耳を疑った。しかし、どうも真実のようだ。それでは、この日本はどうなるのか。海軍はどうなってしまうのか。一体自分はどうすればよいのだ。すべての疑問が集中して頭は混乱した。と同時に、今まで張り詰めていた気力が一ぺんに体力から抜けていく感がした。

何れにしても、もう直ぐ名古屋だ。名古屋で事情を確かめよう。名古屋には父を始め家族がいる。父と相談できることは願ってもないことではないかと地獄で仏の思いであった。そう心が決まると、アアこれで自分はもう死ななくても済むのだなという大きな安堵感に包まれた。本土決戦になれば、軍人である自分は真先に死ぬだろう、家族達の命も危い、それが救われるのだ。これからの如何なる苦しい代償を考えても、これだけは一番幸福なことだと、落着いて考えられるようになった。

それにしても、呉での体験は一体何であったのか。再び呉における悪夢のような毎日が想い出される。それは全く第一線の緊張そのものであった。主なものだけ拾ってみても—

七月一日深夜の呉の大空襲——B29の焼夷弾投下により、三人一緒で町の高台の民家に下宿していた私たち第四課勤務の少尉は、着のみ着のままで（といっても軍装とトランクは無事だった）焼け出された。呉の市街は大半が焼野原となり、翌朝、無数の焼死体の累々と転がった様はまさに地獄絵といってよかった。——

続いて、七月二十七日朝の延べ数千機の米軍艦載機群による呉軍港大空襲——これは、まさしく緒戦のパール・ハーバーの悲劇の日本版であった。燃料が尽きて動けぬ日本の残存連合艦隊の戦艦・空母・重巡など歴戦の強者が、恰もなぶり殺しのように完膚なきまで破壊・沈没されるのを目撃せねばならなかった。私自身も、無蓋ランチで部下数名と軍港を横切るときこの海戦に巻き込まれ、周囲の軍艦よりも高く上る水柱と、赤い焔と真黒の煙に包まれて燃える味方の艦の廻りを、落下してくる敵味方の無数の銃弾と砲弾の破片を浴びながら右往、左往、九死に一生を得たこと。攻撃の合間を縫って、傾き

始めた航空母艦から痛さに泣き喚ぶ十何名かの重傷者を呉海軍病院まで私のランチで運んだこと。

そして最後は、八月六日午前八時十五分の広島への原爆投下――これも軍港の入口でランチの上から目撃した。爆発の閃光を浴び、その後しばらくして熱風を受けて私のランチは激しく揺れ、間もなく広島上空に例の円盤を頭に頂いた真白な茸雲がむくむくと空高く立ち昇る。そのあと午後になって、呉に逃れてくる沢山の被災者たちの見るも痛ましい姿。――以上の呉での体験は文字通りの生き地獄だった。

あれやこれや思いを巡らしているうちに列車は名古屋へ着いた。自家で旅装を解いているうちに父が役所から帰ってきた。父の元気な姿を見ると何故か目頭が熱くなってきた。

父の話では、無条件降伏は事実だった。父との相談の結果、私は、軍の命令どおり、家で一泊して翌朝大湊に向け出発することにした。燈火管制が何年か振りで解かれたこの晩は街も家の中もあかあかと電灯で輝いた。命の救われる思いであった。私の人生であとにもさきにもこの夜ほど平和の有難さを思い知らされたときはない。

あと、大湊までの道程は長かった。着いてみると、本州のさいはてにあるこの軍港は、戦争なぞどこにあったのかと言わんばかりに、物静かな入江の奥に眠っていた。沖に数隻の小型艦艇が望見されるだけだ。あとで聞けば、春に一回米機による小規模な空襲があっただけという。

ここの、こじんまりとした海軍軍需部での私の勤務は総務課で、さして多忙ではなかった。牧歌的な下北半島の自然を友に毎日楽しく暮らした。呉の戦塵を流しに来たようなものである。そのうち、終戦処理事務も大半片づいたので、私は、十一月初旬、同僚とともに復員した。既に紅葉の季節であった。

名古屋への帰路、私は新潟に数日間滞在した。新潟は私の故郷であり、親戚・知人が多かったからである。そのとき偶々、東京で親しくしていた東京美術学校在学中の友人が帰省していると聞き、その友人の家を訪れた。まだ女学生だった彼の妹を私はそのとき始めて見た。六年後に私がその妹と結婚することになろうとは、そのとき誰も予見していなかった。

あれから五十年の歳月が流れている。その友ももう此の世にはいない。

敗戦の学窓風景―大阪外語

三枝　亨

終戦の玉音放送は、大阪の上本町にあった大阪外事専門学校（大阪外国語大学の前身）の校庭で聞いた。よく聞きとれなかったが、或る教官が「戦争は終わった。空襲はないぞ」と言ったのが印象に残っている。逃げまどわされるB29の空襲はこりごりであった。

巷間には、占領米軍の婦女暴行などさまざまなデマや噂が流れたが、学内は平静であった。ハーバード大学卒など外国通の教官や外国人先生が沢山いたためであろう。

終戦でほっとしたが、他方「明日からどうなるのか」誰にも分からず、お先真暗な混沌の中で、学生生活がスタートする。

終戦の昭和二〇年の四月、大阪外専にビルマ語部が新設された。農村の三男に生まれた筆者は、南方への雄飛を夢みてこのビルマ語に挑戦した。四月に登校すると、校舎は空爆の大きな被害をうけていた。焼け残った教室で細ぼそと授業が行われる。

教材などは一切ない。頼みはビルマ育ちの若い日本人教官一人だけである。教官が黒板に書きそれを筆写して習う。この教官は、英語に堪能であるが日本語は不自由であった。

このような授業と防空壕堀りが正課で、時おり空襲避難をしていると終戦になる。終戦は学内の空気を一変した。昨日まで敵国語と下目にみられた英米語部が一躍脚光をあびる。これにひきかえ南方雄飛の我がビルマ語部の夢は微塵にくだかれる。教官は頼りない。ビルマ語部生の間に浮足がたってきた。

他方、兄弟語部のインド語部には、澤英三教授ほか立派な教官がいる。その上、インドが期待されはじめたので、インド語部が活気ついてくる。

敗戦はすべてを変える。見るもの聞くもの様変わりであった。それなら「俺も一からやり直そう」と決意し、翌年二月退学届を出して、新たにインド語部を受験した。

勉強より食べるが先

空襲の心配はなくなったが、食糧事情は日をおって悪化した。一週間分として配給された「麦粉、パン」などの主食は三日間と持たない。市内の焼け跡のあちこちに闇市場が現われて、パン、雑炊、米麦、タバコなど生活必需品が出回ってくる。だが、インフレの物価高騰のために、闇物資にはなかなか手が届かない。

食糧難に学生もこまる。学校をサボリ、田舎へ食糧の買い出しに行く。幸い筆者は四国の農村の出身で、四国には食糧がある。輸送が大問題であった。当時、国鉄の切符購入が第一の難関である。大阪駅の構内には浮浪者が屯し、そのために到る処が公衆トイレ化して悪臭を放ち、その中で幾時間もうんざりするほど待たされる。この切符を入手しても、列車に乗り込むには長蛇の列が控える。漸く乗車すれば、そこは身動き一つできぬ鮨詰め状態である。

食糧横流しの闇屋が横行していたので、大阪など主要駅や連絡船の乗替場所には、取り締まりの警察官が目を光らしていた。学生は大目に見られて、米麦類の没収にあうことは殆どなかった。

インド人のS・R・ヴァルマ先生も物資欠乏に困っていた。インド人にはミルクは必需品である。四国から練乳缶を持ち帰り、土産として進呈すると、先生は「サンキュー」を連発して子供のように喜ばれた。戦後は誰もが困っていた。

学窓の風景

昭和二十一年始めから、高槻の元工兵隊兵舎が仮校舎となる。古い木造で囚人を収容するような殺風景な建物であった。この中に、教室、事務室、学生寮や食堂などが雑居する。

インド語部の教室は、クラス当たり学生数二〇人内外のために、一〇畳間ほどの狭い部屋である。大きな黒板と教壇、その一段下に机と椅子が三列ほど並ぶ。教官とは常に顔を突き合せているので代返は不可能であった。哲学や国文など共通科目の講義は広い部屋で行われた。

何れにしても、誰かが廊下を歩けば足音が響きわたるという古い兵舎である。　勿論、教科書類はなかった。教官が手作りのガリ版プリント、または、教官が黒板に手書きしたものが教材となる。正に往時の寺子屋スタイルの授業であった。

「飯がなくても勉強はせい」

やがて学校生活が落ちついてくる。昭和二一年一〇月には運動会、翌年には文化祭が復活する。大阪市内の会館を借りて、原語の演劇祭を開催し、市民の拍手喝采をうけた。このような快活な学内風潮の中に、ショッキングな事件が発生する。昭和二十二年三月、進級学生リストの発表があり、その結果インド語部には、クラスの半数にのぼる留年生が生まれた。

留年処置を主張されたのは、インド語部では学部長の澤教授である。「事情はどうであれ低い学力は困る。大阪外語の沽券にかかわる」と。先生は学問に妥協なしとの信条の持主で、かつ原則は頑として曲げられない。食糧難の中でも、この信念を貫かれた。

忘れ難い恩師、二人

澤先生は学究一途の学者であった。比類ないインド語学力を買われて、ネール元インド首相が来日した時、通訳をつとめた。大家だが一向に鼻にかけず、むしろ俗世間から超然とされていた。

持物や衣服に無頓着である。或る夏、高槻の駅を降りると前に老人が悠然と歩いて行く。頭に白いタオルを乗せ、ズボンからワイシャツの端をのぞかせている。澤教授であった。　インドが大好きで、インドを語る時目を細められて微笑まれる。何処となく悠久の大河ガンジスを偲ばせるが、ヒマラヤのような峻烈な風格も漂う。この老師の後姿は、社会に出ても胸中から消えず常に心の支えとなる。

もう一人忘られない仁がいる。インド人のヴァルマ先生である。講義はすべて英語である。「オフツン」「キャストル」などとインド人の習癖をみせたが、英文自体は、格調高い美文のクィーンズイングリシュである。

ロンドン大学で英文学をおさめられた秀才で、英詩に造詣が深く、駐留米軍に請われて講師をつとめられていた。先生は、一人息子を亡くされて日本人の妻と二人暮

らしのために、学生を愛され何時も自宅に歓迎された。インド語や英文学について、労をいとわず丁寧に教えられ、このような学生との交流を生甲斐としていた。

このヴァルマ先生に非礼なことをした。二年生の学期末、有志一〇人でスキヤキパーティを開いた。衆議一決、ヴァルマ先生を招待することになり、筆者が案内をつとめる。

先生は大変よろこばれた。パーティの間、終始笑顔で応対され、珍しくインド民謡などを披露された。（後日分かったが、インドの紳士は人前では唄わぬと言う身嗜みあることからこれは破格のこと）。処が、皿にとり差しあげた料理の中、牛肉はついに箸をつけなかった。当時、その意味が分からなかった。

後ほど澤教授に打ちあけると「そんな事もしらないのか」と半ばお目玉をいただき、インドの菜食主義制など民俗慣習の教えをうけた。振りかえると、この辺りが国際化意識の芽生えであろう。

戦後の激動とりわけ「無いないづくし」の中で、このような失敗や体験を積みかさねながら学窓生活を送り、そして社会にでた。

商社マンとして、海外のあちこちに駐在し、その間、印パ戦争、イラン革命やイラン－イラク戦争などいろいろな紛争や動乱に遭遇してきた。だが、その渦中にあっても比較的に平静さを保ち得て、戦争を知らぬ若い駐在員から頼りにされた。

これは、学生時代の敗戦や戦後の体験が物を言っているのであろう。こう言う激動期の体験には名状しがたいものがある。

空の最前線となった銃後

中川路　明

一、B25の来襲

昭和十七年四月十八日の午後、私たち中学新入生は運動場の芝生に寝ころんでだべっていた。突然東の方の空

に見慣れない双発機が低空で現れた。飛行機好きの友人が「ノースアメリカンのB25だ」と声を上げたとき、頭上を過ぎた同機が西の方に爆弾を落とした。私の家にかなり近いと思い、気の狂ったように鳴る空襲警報の中を走って帰った。私の家の南方二百メートルに高い塔のある洋風のお屋敷がありそれが目標とされたといわれた。その筋向いの家の庭に大きな穴が出来て周囲の数軒が破壊されていた。一軒は我々仲間うちで評判の可愛いお嬢さんがいる家だった。心配して佇ずんでいるとき、消防団から老婆が一人怪我をしているので病院に運んでくれと頼まれた。担架もないので吹き飛んだ雨戸板に載せて随分遠くの病院にかつぎ込んだ。立派な雨戸だったので言葉も出ないほど疲れたことを思い出す。開戦から四ヶ月、シンガポールは二月に陥落しフィリッピンは進撃中で、国内は提灯行列の戦勝気分にあっただけに、ドーリットルの気違い行為という大本営の発表を信じていた。しかしその二月後にミッドウェー海戦、キスカ、アッツの敗戦があり、彼我の大勢は変わっていた。

二、深夜の大空襲

昭和十八年は二月のガダルカナル撤退に始まり、昭和十九年六月マリアナ沖敗戦、七月サイパン、テニアン、グアム島の守備隊の玉砕と敗退が続いた。これらマリアナ諸島を整備した飛行場から「超空の要塞」B29は日本本土往復が可能になり、十一月の東京初空襲以来終戦までの無差別空襲が行われた。

私の郷里神戸では昭和二十年二月四日、B29百二十九機の白昼超高度からの爆弾攻撃が最初であった。全く見えない高度であったので軍は盲爆と言ったが西神戸の軍需工場で甚大な被害を受けた。この時丁度伊丹の陸軍飛行場に遊びに行っていた。迎撃に行った「飛燕」隊が被弾しながら帰着し、負傷者も見られ戦争を初めて目撃した。

そして三月に入り、九日東京（B29、三百二十五機、焼夷弾千七百トン）、十三日大阪（同じく二百七十九機、千八百トン）に次いで十七日神戸に三百九機が来襲、実に二千四百トンの焼夷弾攻撃を受けた。この時使われたのがナパーム（油脂）焼夷弾で径八センチ、長さ五十センチくらいの六角柱の焼夷弾が十六本づつ三段重ねの四

十八発の集束弾であった。これが三百メートル上空で分散しそれぞれ麻のリボンを尾翼として落下する。低音でうなり続けるB29の飛行音、ザーザーと降り注ぐ弾の落下音、そして三百六十度満天から赤い炎をくゆらせながらの火の雨は正に恐怖の塊であった。近頃でこそ夢に見ることはなくなったが、不謹慎ながらどんな花火にも比べるべくもない巨大花火であった。

二月までは軍事目標に限られていた空襲は、三月から超低空の非戦闘員対象の無差別攻撃になった。東京や大阪のような広い都市では外周部を先に攻撃し火災を発生させ、次ぎに中心部でせん滅する非道なものであった。神戸は六甲山と大阪湾に挟まれた細長い街であったため進入路も制限され、いわゆる絨毯爆撃になり焼夷弾の量が多かったといわれる。この時の絨毯爆撃は非常に正確で百メートル刻みくらいに順に西から焼いてきた。その代わり、一度自分の区画に焼夷弾が落ちたら二度と同じ所に落ちないので防空壕から出て消火にかかることができた。焼夷弾は余り貫通力がなく二階に上がって火を吹いている焼夷弾を外に放り出したという武勇伝も多かった。

ちなみにナパーム焼夷弾の一束の錘であった径三〇センチ、高さ十センチの鋼鉄の塊は戦後漬物石に好適であった。また不発、不完全燃焼の焼夷弾から燃料を回収するため、焼夷弾拾いと称する五十センチくらいの長さの取っ手のついた金属製の箱が売られた。

三、白昼の爆弾攻撃

五月十一日には芦屋の航空機工場にB29、六十機による死者千三百人にのぼる集中爆撃があった。この頃には日本の戦闘機、高射砲も沈黙し低空爆撃となった。弾倉が開くと鮫のようなB29の銀色に輝く腹面の一部がさっと黒くなり、バラバラと爆弾が投下される。爆弾の落下音は焼夷弾よりはるかに重厚である。蛸壷の防空壕の縁に座ってこれを見ていた。なんとなく恐くなり壷の中に身を潜めた直後に、座っていた場所の近くに五センチほどの弾片がブシュッと音を立てて落下した。命拾いだったかも知れない。というのは二年上の親しい先輩が友人の家の家庭菜園の畑で伏せていたが、たまたま高くなっていた畝に懸かっていた腰に大きな弾片が当たり出

血多量で亡くなったからだ。

昭和十九年の春から学徒動員で行っていた工場は甲子園の海軍の飛行場に近くにあり、ずんぐりした「紫電」は急上昇力があり頼もしかった。しかし五月頃から日本の迎撃機は空襲警報と共に飛び立つが、何処かに退避して警報が解除されると帰って来る温存体制に入って制空権も失われた。

四、白昼の焼夷弾爆撃

六月には入っていよいよ降伏催促の徹底的な空襲になった。五月末東京（B29千機、焼夷弾六千八百トン）、六月一日大阪（同じく四百八十機、二千九百トン）、そして五日神戸は三百五十機、三千トンの爆撃を受け私の故郷東神戸の住宅地は壊滅した。死者も三千五百人に達した。またも、神戸の山手に直線を引いたように綿密な絨毯攻撃であった。幸いなことに自宅はその線の山側にあったので被災しなかった。大火災になるとまさに火の海で炎は波のように地上を這い二十メートルの道幅を越え止まることなく、防火演習などは蟷螂の斧にもならなかった。その常として煤を含んだ真っ黒な雨が降り始めその後には無惨な焼け跡が残った。灘は酒の名所で、街角毎に供出された四メートルほどの高さの酒樽の貯水槽が役に立つことなく焼け残ったのが目を引いた。電気、水道、電車の全てが停止し全く都市機能を喪失し、回復することなく、堺、岸和田、和歌山など大阪湾沿いの都市が次々と夜空を焦がし敗戦の日を迎えた。

五、機銃掃射の恐ろしさ

制空権の喪失と共にグラマン・ヘルキャットによる機銃掃射が始まった。最初は敵も恐かったのか鵯越えと同じく、六甲山の山影から海に向かって急降下するだけで銃弾音の聞こえた時には見えなくなっていた。そのうちに操縦士の顔が見えるほどの低空から、電車など動いているものに襲いかかるようになった。ある時田圃の中を工場に行く道で襲われた。自分たちが狙われているような気になり、遮るものもなくただ伏せるだけの逃げ場のない恐怖を味わった。

六、戦い敗れて

停電のまま八月十五日近くの駅で終戦放送を聞いた。全国でその日までに飛来したB29延三万四千機、爆弾・

焼夷弾十七万トン、被爆百三十四都市、死亡者四十七万人（広島、長崎十九万人含み沖縄九万四千人含まず）である。朝鮮半島、台湾出身者を含む昭和十二～二十年の日本人戦死者二百三十万の二割に達する。銃後は正に最前線であった。

「終戦当時、国内の指導者や軍部は実際に戦闘をしていなかった。まだ竹槍で戦うことを主張していた。しかし大部分の国民は、空襲を通して戦い、敗れ、疲労と飢えに打ちひしがれていた。そして戦後情報の開示につれて真実を知った草の根の力が、どん底から日本の再建に立ち上がったことが驚異的な日本の復興の原動力になった。」との見解はこの間の事情をついており同感するものである。

本稿作成中兵庫県南部地震が発生した。テレビでの故郷の惨状を見て五十年前への逆戻りを感じる。奇跡的に戦災を免れた懐かしい古い家は殆ど倒壊したという。再び緑の街の再生を願いつつ筆を擱く。

参考文献　日本大空襲（朝日新聞社編、原書房）
朝日新聞（一九九五、一、一、朝刊）

弱卒の一喜一憂
―五十年前の八月―

林　篤二

昭和二十（一九四五）年八月、私は、「支那派遣軍」直属の予備士官学校の幹部候補生として、南京にいた。同じ兵舎内の下士官候補生などともに、通称「金陵部隊」と称された。南京市の東郊、紫金山の麓にあったので「金陵」と呼んだらしい。七、八年前の雑誌「歴史と人物」増刊号に「支那派遣軍の誇る最精鋭の虎の子部隊」と大ゲサに紹介されていたが、実体は初年兵に毛が生えた程度の現地教育部隊にすぎない。ただ毎日の訓練だけはヤケに激しかった。

◇　◇　◇

八月の南京は暑い。連日の炎天下での猛訓練で全員疲労の極点に達していた。日射病やマラリヤで演習中に倒れるものが続出した。ガリガリに痩せた。食欲も全くなかった。三食に出される脂のギラギラ浮いた豚汁を目を

つむって流し込んだ。「このままでは任官までに全員戦死だなあ」と話し合う毎日だった。

十日ごろから変な噂が流れはじめた。

「日本軍が降伏するらしい」

噂の出所は、南京市内に出た事務係の下士官の話だった。市内の繁華街で市民が「中華民国万歳」「蒋介石総統万歳」を叫んで、爆竹を鳴らし、銅鑼をたたいているという。

「こりゃー、ひょっとすると、戦争が終わって日本へ帰れるかも知れんぞ」

「いや全員捕虜になって奥地へ連れて行かれ、一生こき使われるそうだ」

悲喜こもごもの説がささやかれた。

十三日だったと思う。夜の点呼のあと、中隊長から「病兵も含め全員集合」の呼集がかかった。二コ区隊、約百五十名の前に立った中隊長は陸大を出たばかりの三十二才の少佐殿。

「お前たちも聞いておるだろうが、現在東京では戦争終結の議が進んでいる。この不埒な動きに対して、総司令官閣下(注)は昨日、断固反対する旨、参謀総長に上申された。『百万の精鋭健在のまま敗戦の重慶軍に無条件降伏するが如きは、いかなる場合にも絶対承服し得ない』という趣旨である。すなわち中央で終戦を決定しても、支那派遣軍は天皇を日本からお迎えしてでも、独自で戦い続けるのだ……」

いつもは大声の中隊長の、押し殺したような話しぶりが、却ってわれわれの胸に泌みた。訓話が終わって自室へ帰ると「あーあ、これで日本へは、もう帰れんことになったなあ」と誰かがつぶやいたが、誰も応ずるものはなかった。

◇　◇　◇

八月十五日も朝からいつもの通りの炎天下の野外訓練。枯れ草の荒野で重機関銃を引きずる匍匐前進と後退の繰返し。肱が破れて血がにじみ、汗がしみて痛い。突然「演習やめ全員かけ足で帰営」の号令がかかる。教官の将校全部に、総司令部から集合が命じられたという。何はともあれ演習中止は有難い。兵舎へ帰って休んでいると、またまた夕方近くに「全員舎前に集合」の声。整列

したわれわれの前に現れた中隊長の目が赤い。

「本日正午に、戦争を終結するとの天皇のご放送があった。司令官閣下からも承詔必謹のご訓示があった。われわれは軍人である以上、陛下の御命令は絶対である。あすからどのような苦難があろうが、それに耐えるのが武人の道である。そのためにもあすからの訓練はいままで以上に厳しいものであることを覚悟せよ。……」

しばらくは言葉の意味が頭に泌みこまず、怒りも、口惜しさも、悲しさもなかった。ただ「あすからは今まで以上の猛訓練」の一句だけが重苦しく響いた。

それから二十日間「猛訓練」は続いたが、教官たちも気合が抜けたとみえ、あまり過酷なしごきは、やらなくなった。どうやら無事で内地へ帰れそうだと実感したのは、九月に上海へ移送され、捕虜収容所に入ってからだった。

帰国は二十一年三月二十日、復員船が鹿児島湾に入って、青々とした日本の山を見たときは、涙がとまらなかった。

◇　◇　◇

帰国後間もなく、日本軍降伏直後に発せられた蒋介石の有名な「恨みに報いるに恨みを以てせず」演説を知った。この演説のなかで蒋は「……もしも暴行をもって彼らの従来の誤った優越感にこたえるならば、恨みに報いるに恨みをもってすることとなり、永久に終止することなく、それは決してわれわれ仁義の軍の目的ではないということを知らなければならない　云々」と述べている。蒋は共産軍に対抗するため、日本軍に融和的態度をとったとする見方もあるが、中国大陸の軍民百六十数万が、敗戦後数ヵ月で無事帰国できる糸口となったことは、否めない事実である。また演説内容の格調の高さを考えると、日本は道義上でも中国に負けたことを認めざるを得ない。

（注）当時の支那派遣軍総司令官は岡村寧次大将。最後までポツダム宣言受諾に反対だったが、一面、当時の陸軍切っての中国通といわれた。国民政府要人にも知己が多く、これも復員業務を進める上でプラスになったといわれる。

戦争番外地

石川　正達

◇第一幕（地震・トロ台）

と　き…昭和十九年十二月七日昼下がり。

ところ…豊橋・吉田城址にある陸軍航空本部航空基地設定練習部（第百部隊）の兵営。

戦局は日々に悪化。武器よりも円匙（スコップ）が必要になって、幹部候補生八十余名は熊本の兵科予備士官学校から豊橋に配転され、土方訓練に励んだ。

二階講堂で受講している時、グラグラっときた。震度5はあろうか。全員退避。飛び出した営庭には長い亀裂が走っている。各地に被害が出ているに違いない。

「貴様ら、弛んどる。はよう整列せんか！」　営庭に置かれたトロッコの台車に片足を掛けて、区隊付き見習士官が喚いている。この「トロ台」見習士官は、幹部候補生を痛めつけるのを生き甲斐がいのようにしている。なぜ、こうも威張り散らすのか。

特別操縦見習士官という制度があった。飛行機乗りが足りなくなって操縦士を志願すれば直ちに見習士官として採用された。しかし適性検査で地上勤務に回される者も多い。

トロ台も地上勤務組で、空飛ぶ夢が破れた挫折感と「特操くずれ」の劣等感がある。それに、急造の見習士官では、まともな部隊指揮が出来ない。予備士官学校でみっちり鍛えられた幹部候補生から馬鹿にされた。

その欝憤を晴らすには、軍人勅諭に頼る外ない。「上官の命令は朕の命令」であった。候補生を片っ端から殴って、空威張りすることになる。絶対服従だから抵抗できない。

この旧制富山高校から志願してきた年下の若造に殴られて、誰もが悔しい思いをした。次の年の一月末、見習士官となって、それぞれの任地へ赴くとき、皆が言い合った。

「万が一、娑婆に帰る日があったら、トロ台野郎を、ただではおかないぞ」

ところが、この「万が一」が現実となる。

◇第二幕（穴掘り部隊の終戦）

と　き　昭和二十年八月十五日前後。

ところ　岐阜市郊外の古市場周辺。

二月、穴掘り実戦部隊が長良川沿いに展開した。私は第三中隊に配属され、蘇原小学校に陣取り、各務原近くの山にトンネルを掘って航空機の地下発動機工場を造っていた。

各務原には航空機工場が多いので、空襲もしばしば。七月九日夜にはB29百三十余機が来襲、岐阜の街は焼け野原と化した。

「八月には万歳の提灯行列があるんだって。岐阜提灯が飛ぶように売れているそうや」

行きつけの料理屋の女将が言っている。庶民の感覚は鋭い。八月十二日にはポツダム宣言受諾が伝わってきた。

軍務に精励していた者ほど深刻に受け止めた。私でさえ、国の将来や自分の人生について、この時ほど真剣に考えたことはない。

豊橋時代から行動を共にしてきた沢田という血気盛んな戦友がいた。十三日夜、宿舎で二人向かい合って、じっくり話し合った。

「俺は滅びゆく皇軍と運命をともにする。中隊長は深刻な顔をしていたから、自刃するだろう。俺も腹を切る」と沢田は言う。

「腹を切って何が始まる。俺も帝国陸軍の最後を見届けたい。だが、自刃はさせないよ」

二人はお互いに軍刀で指を切り「皇軍と運命を共にしたい」と血判書をしたため、中隊長に届けた。

十五日、校庭でラジオ放送があった。その夜、沖縄出身の上等兵が衛兵に立番中、銃で自殺した。沈痛な空気が部隊に流れたが、次第に復員できる喜びに変わっていった。

膨らんでいた部隊は正規の人員に整理、十数名いた見習士官も沢田と私を残して、帰郷していった。私たちも結局は自刃騒ぎもなく八月末には武装解除。全員が復員した。

ところが「徹底抗戦なくば国体の護持ありえず」と考

えて行動した仲間もいる。

犬山に展開していた第一中隊に真野、小野という戦友がいた。二人は、横浜に転属していた元第一中隊長の佐々木武雄大尉から「皇軍魂」をたっぷりと吹き込まれている。ポツダム宣言受諾の十二日、まず小野が脱藩して横浜に走り、今後の指示を受けて犬山へ帰った。

佐々木大尉は、終戦の日の早朝、神風隊二十人を率い、鈴木貫太郎首相の官邸、私邸、平沼騏一郎邸を次々に焼き打ちして引きあげた。憲兵隊からは「よくやった」とお咎めなし。

小野や真野らに次の指令がきた。八月二十八日に降伏調印のミズリー号を特攻攻撃しようという。二人は下士官、兵を連れ、トラックに武器弾薬を積んで横浜へ向かう。台風で降伏調印が延期されたため、特攻は実現しなかった。幸いであった。

二人は翌年まで岐阜山中に篭もり、追われる佐々木大尉を九州に逃がしてやっている。

◇第三幕（終戦一年後の東京）

★　第一景（トロ台との再会）

とき　昭和二十一年十二月はじめ。

ところ　小田急の通勤電車内。

終戦後復学して大学を卒業、しばらく材木会社で働いた。小田急で成城学園前から新宿へ出て丸ビルまで通う。当時、小田急線にはＴＫＫ（東京急行）と書かれた車両が走っていて「とてもこれでは殺される」と言われていた程ギュウギュウ詰めにされた。

ある朝、このギュウギュウ電車の中央部に立っていると、代々木上原あたりで角帽・学生服の男が押し込まれて私の目の前にやってきた。見たような顔の小男である。

「貴様、トロ台じゃないか！」

思わず大きな声が出た。拳を握ったが、満員で手が挙げられない。更に驚いたのは、トロ台の態度である。

「先輩、あの時はすみませんでした。土下座してでも謝ります。許してください」

何という変わり身の早さ。殴る気もなくなった。東大に通っていると言ったが、こんな男が戦後をリードしていくことになるのかと暗然たる思いにさせられた。

★　第二景（米兵とのいざこざ）

と　き　第一景と同じ日の夜九時すぎ。

ところ　銀座通り・七丁目辺り。

会社の同僚と新橋の飲み屋で朝の出来事をサカナに、一杯やっての帰り。銀座の人通りは少なかった。交番近くに来たとき、前から少年のように若いアメリカ兵が二人、千鳥足でやってきた。

当時、松坂屋地下に米軍慰安のダンスホール「オアシス・オブ・ギンザ」があり、そこの女にでも振られたのか、お店や街灯を蹴っとばしながら近づいてくる。

すれ違いざま、米兵二人から、いきなりバンバンと二発、鉄拳を二人の顔に見舞われた。こちらは敗残の身、じっと我慢。しかし悔しい。「やるか?」互いに頷きあって引き返した。

同僚は学生時代ボクシングの選手だったので勝負は早い。パンチ二発で米兵二人を路上にノックアウト。こちらがタックルするまでもなかった。

ＭＰ（米憲兵）に見つかったら大変。幸い事件の目撃者は近くの交番の巡査だけ。それも笑顔で「早く逃げろ」と合図してくれた。このころ、多くの人が抱いていた「負けた悔しさ」が今日の繁栄をもたらす大きなバネとなっていった。

◇フィナーレ（豊橋仲間の集まり）

と　き　平成七年二月某日午後四時すぎ。

ところ　有楽町駅前の東京交通会館。

豊橋時代の仲間が何十年ぶりに集まる。真野弁護士の事務所に三菱商事ＯＢの小野、それに不戦兵士の会理事の白水と私の四人。ボトルをあけて話し込む。その時の会話から。

「阪神大震災で思い出すのは豊橋の地震だ。営庭の池が水柱を噴き上げた。かなりの被害が出たはずだが、報道管制で黙殺された」

「最近の理科年表を見ると、あの東南海地震で千二百人を超す死者を出している。ところが当時の新聞は、一段か二段見出しの小さな扱い。死者は、東京から静岡・袋井に疎開していた児童二人が、倒れた校舎の下敷きとなっ

たことが報道されただけだ。翌年一月十三日に起きた三河大地震（死者二千三百余）も、新聞は東南海地震の余震程度と報道している」

「そこへいくと、阪神大震災はテレビで全国に詳しく伝えられた。被害の大きさはともかく、言論の自由は民主主義の基本だね」

「あの当時、テレビがあって、報道の自由があったら終戦はもっと早く来ただろう」

「ところで佐々木大尉はその後どうした？」

「名前を変えて活動していたが、その後亡くなった。終戦翌年の一月、岐阜署にぶち込まれて、ＣＩＣ（米の対諜報部隊）に調べられたのも今では懐かしい思い出だ」

「食いものはなかったが、バイタリティーは溢れていた。飽食といわれる現代、若い人たちのエネルギーを感じないのはなぜだろう」

「いやいや、阪神大震災で若者たちがボランティアで活躍しているのを見ると、日本の将来に明るい希望が持てるよ」

「もう終電の時間だ。話は尽きないが、また会うことにして、今夜はお開きにしよう」。

麻雀雑感

清水　喬

麻雀は、囲碁や将棋にくらべると、いささか品格がおちるようにいう人が多い。

しかし、これら三つとも愛好する者としては、知的スポーツらしい面白さ、奥行きの深さにおいて、甲乙丙つけがたい。

将棋は戦争で、碁は政治だ、といった人がいるが、麻雀は何といえばよいのだろうか。　中国では、かつて毛沢東により、亡国のゲームという烙印を押され、禁止されたとか。香港では、ホテルのパーテイなどで、ちょっと待ち時間があると、すぐに麻雀を始める。パイが大きく指ざわりが大味。ルールも日本より単純である。

ご存じのように、麻雀にはツキやウンの要素が大きい。ヘタでもまれに大勝することがある。そのせいか、ウヌボレ屋が多く、上達のため勉強する人は少ない。

けれども、一年間の戦績を集計すると、よくしたもので、大差がつき、実力のランキングは歴然とする。

この中には、ウマイ人とツョイ人がいる。ウマイ人必ずしもツョイ人とは限らない。

ウマイ人は、手づくりが巧みで早い。相手の手の内もよく読める。なのに、なぜか勝てない――。手にホレ、手づくりにのめりこむからであろうか。

ツョイ人はどうか。昨今のルールでは、順位が大きくモノをいうので、点差を重視する。

たとえば、ダントツでオーラス（最終回）を迎えたとする。このさいは、場の荒れそうなパイは捨てない。安全パイを残し、無理にあがりにはいかない。――そう、金持ちケンカせず作戦をとる。

逆に、三位やビリの場合、ここは、危険をおかしても、断固勝負手をはなつ。

場の状況としては、順位や点差ばかりではない。パイの流れや勢い、ツモのリズム、彼我のツキ具合なども充分考慮に入れる。

結局、強弱の差は形勢判断の差といえる。

企業経営においても、大局観は極めて大切である。ウマイ人は戦術家、ッヨイ人は戦略家であろう。

戦略を欠く戦術はお遊びに化す。戦術のない戦略は作文に化す。

麻雀も経営も、勝つのはむつかしいが、なんとも面白いものである。

ものを書くことの難しさ

都甲　昌利

私達は文字を知るようになってから様々な文章を書いてきた。小学校時代の国語の作文に始まり、中学、高校、大学と、そしてサラリーマンになってからも実に多くの文章を書いてきた。文字を覚えたての頃は単純に見たものの聞いたものの羅列で思想的なものは入っていない。「朝6時に起きた。花に水をやった。お母さんにほめられた。」の類いで、長ずるに及んで知識と知恵が増えるとこれに感情、感性、体験、想像、思想や理念が注入され、理論構成されてより複雑あるいはより高度な文章になり読む者に感動や喜びを与える。

青年時代の恋文には超感情が入り論文には思想や理念が理論化され複雑な高度の文章になってゆく。卒論や学術書などは多くの書物を読みコンデンスされたものがまとめられる。多く読めば読むほど書かれた論文は厚みを増して読みごたえのある文章になる。サラリーマンになってからも、ものを書く時、それが論文、学術書であれ評論、エッセイ、散文、韻文などであれ同じことが言えるのではないかと思う。従って比較的多くの書物を読める立場にあり、ものを書くことを職業としている作家や評論家あるいはジャーナリストなど専門家の文章が読者をひきつけるのはそのためであろう。彼らの趣味は圧倒的に読書だそうである。私達がゴルフをしている間にも何か本を読みふけっているのだろうか。私などは日本の高度経済成長時代のサラリーマンを三十数年間やってきたので仕事に関する本以外は読めなかった。その結果、文

章が浅薄なものになってしまうのは致し方ないと思う。

また、名文家が高等教育を受けた者とは限らない。外国ではデッケンズやゴーリキー、日本では啄木や松本清張がその例であろう。しかし、最高の教育を受けたものは、やはり立派な芸術的な仕事をしている。三島由紀夫などがそれで、彼は芥川賞の選考会議の場でも候補作品を論評しながら原稿用紙に小説を書いていたということだ。要は持って生まれた天分というほかなさそうである。

会社時代、私は実に多くの文章を書いた。稟議書、企画書、提言、業務連絡文、社外文書などである。あるものは先輩にめちゃくちゃに訂正され何度も書き直したこともあった。場合によっては意識的にあいまいな表現をして、意味がどちらでもとれるように書いたこともあった。これらの文章は別に文学や小説ではないので美辞麗句を並べる必要はないが、如何に会社の業務方針に沿って、あるいは相手に理解や納得させ、こちらの意図していることを伝えるかを目的としているので、それでも苦心惨憺をする。企画書や提言など、これこそ採用されると確信していても、拒否されたり注目されなかったりするとがっかりする。先方の頭が悪いのかこちらの文章力が劣っていたのか迷ってしまう。このような時私は何時も自分の文章力、表現力が足りなかったからだと反省したものだ。

私はこれまで僅かではあるが新聞、雑誌等にものを書いてきた。最近それらを読み直すと恥ずかしくなる。その理由はなんでこんな下手糞な文章を書いたのだろうかという反省である。浅薄、幼稚、薄っぺらな内容。実に恥ずかしい。友人や知人は「先月○○雑誌に書いたものを読みましたよ」と言ってくれるが内心は（なんてくだらない内容と文章なんだ）と軽蔑しているのではないかと思うからだ。かって、外国で日本人会の会報に雑文を頼まれて書いたことがあるが、これを読んだ家人は「もう止めて、こんなくだらないこと書かないで、私達の恥になるから」とぬかした。一所懸命に書いた文がこんな受け取られかたをしているのだ。人に興味をもって読まれるものを書くのは本当に難しい。

かねてから、私はものを書く行為は「知的ストリップ」と思っている。自分の頭の中にある知識とか知性などを

つぎつぎと剥ぎとって文章の中に表現するからだ。豊富な知識や知性があれば恥ずかしくはないが、貧弱だと恥ずかしい。豊満で美しい肉体を持ったストリップ嬢が自信をもって嬉々として大衆の前に衣服を一枚一枚脱いでゆくが、貧弱な体の持ち主は恥ずかしそうにしているのと似ているように思えてならない。ヴィーナスのような美しい肉体を女性に与えるのは神だとしたら、人に感動を与え読まれる文を何とか書こうと努力している私は絶望的にならざるを得ない。

更に、ものを書く上で難しいのは「言葉」の選択と定義の問題であろう。「自由」とか「平等」、「民主主義」という言葉はその定義あるいは概念が人々によって全然違った意味をもっている。大江健三郎氏が「戦後民主主義」という言葉を使って混乱が起きているという。私が勤めていた会社でも「アジア・オセアニア地区支店長会議」を開催した時、「アジア」とはを巡り議論続発、ヨーロッパから見ればイラン、イラクはアジアに属するという者まで現れて収拾つかなかったことがあった。なにげなしに使っている言葉が違って受け取られ誤解を招いたりするので恐ろしい。「不惜身命」という仏教語も、あの戦争末期を生きぬいた人々には、若い特攻隊員を思い出して嫌いだという。文章は種々な言葉によって書かれるのでその使い方、あるいは定義の仕方でその人の内面が見えてくる。

「文は人を現す」とは昔から言い古されている表現だが、その人の書いたものを読めばその人の人間性なり人格までが見えてしまうということだろう。そのため人は最良の言葉を選んで書くのだと思う。

最後に私は生来ものぐさな性格なので、資料を丹念に見ないでうろ覚えで書いてしまうことがある。記憶にはかなり自信があったためと資料を捜すのが面倒なのである。これは最も恥ずべき行為として自戒している。編集者がいる場合は訂正してくれるが、学術的内容のものであれば絶対に許されない行為であろう。そしてもうひとつは誤字である。最近はワープロの出現で漢字を拾ってくれるが、原稿用紙に書く時かなり辞書の世話になる。漢字をかなり忘れた。会社時代先輩に誤字を咎められ「お前、それでも大学出たのか。こんな字を間違えるな

んてお前の頭脳の程度が解る」と言われて恥じ入ったことがある。一字の誤りがすべてを露呈してしまうので、こんなおそろしいことはない。今だったら「ワープロが間違えてチェックしなかったのです」と言い訳ができるが当時はなかった。

本当にものを書くのはむずかしい。サラリーマン時代に比べると雑用は多々あるものの自由な時間が持てるようになった。今まで読めなかった本も読める。本は私を無知の世界から救ってくれる。現代の日本は書くことは自由な社会だ。この自由だけは守りたいと思う。ものを書くことによって身体に危害を加えられ、生命を奪われる国も世界にはある。これからも多くの恥じをかきながらまた先達の教えを受けつつ、ものを書いていきたいと思う。

ガンにならないために

池田　善行

年をとって体力が衰えると共に、健康を維持する方法はないものかと、悩むのは人情である。ましてや、ガンの家系に産まれついた者としては、ガンにならないための有効な方法があれば、それにすがりついてみたいと思うのは当然である。

私の妻の場合は、まさにこの例に当る典型的なケースといっていい。

妻の母も、妻の姉もガンでなくなった。妻の妹は熊本に住んでいるが、これもガンにかかった。五年程前に大腸ガンにかかっているということがわかって、手術をした。妻のすすめで、手術後、ある健康食品を食べ続け、今は健康になっている。

妻はガンにならないために、あらゆる健康食品に当たってみた。直接購入した健康食品だけでも、十種類を越え

ている。そして、数年前、妻自身でも納得のゆく健康食品に出会った。それは玄米発酵食と呼ばれる種類の製品であるが、それについては後で述べる。

現代医学は予防ということをやらない。出てきた症状に応じて、対症療法を試みるだけである。ガンの場合は、手術をして切除するか、放射線で焼き切るか、抗ガン剤を投与するだけである。ガンにならないために、適切な処置を施すことはない。したがって、ガンにならないための予防は自分で対策を講ずる外はない。

ガンに何故なるかということについては、最近そのメカニズムがわかってきた。ガンになるための犯人は活性酸素というものの仕業である。活性酸素は酸素の仲間であるが、人間の細胞に対して悪業を働らく。活性酸素の発生量は人間が呼吸をする酸素の総量の二%程度である。活性酸素は人間の体の中の組織がいれかわったり、活動したりする際に発生するために、その発生を防ぎようがない。酸素は本来八個の電子を持っているが、その中の一個の電子を欠いたものを活性酸素という。活性酸素は一個の電子を求めて体の中を動きまわる。そして、細胞膜や細胞核の中から電子一個をもらって安定化しようとする。

電子を奪われた細胞は本来の機能をしなくなる。機能しなくなった細胞はガンの素子と呼ばれる。ガンの素子が増えると危険である。そこで、体の中の免疫力が発動し、SOD酵素などを伴って、傷ついた細胞を修復する。

ガンの素子はその日のうちに大部分が修復され、正常な細胞に戻る。しかし、SOD酵素などが不足すると、ガンの素子のまま残る細胞がある。十五年から二十年の時日が経過するうちに、ガン素子はある一定量を越え、ある日突然ガン腫瘍として顕在化する。ガンとなった細胞は自己増殖をはじめ、体の各所に転移する。

ガンにならないためには、少なくともSOD酵素を大量にとる必要がある。SOD酵素は調べてみると、玄米の中に存在している。われわれが白米食をやめて玄米食にたち戻ることができるならば、ガンの大部分は撲滅されることになる。

玄米食にたち戻ることは、一部の人を除いて、殆ど不可能である。私も高圧釜を買ってきて、玄米食を試みて

みたが、二ヵ月ほどで挫折した。胃の弱い人には消化に困難があるからである。

私の妻は幸いにして玄米発酵食というのに巡りあった。玄米発酵食というのは、玄米の成分を消化吸収させ易いように、発酵させたものである。製品としては玄米酵素「ハイゲンキ」という名前で売り出されている。私は玄米発酵食を研究しているうちに、これはガンだけでなく、老化防止にも大いに有効であることが分かってきたので、「ハイゲンキは慢性病に克つ」という単行本を出すことにした。

これは昨年十月末に出版したが、年末までの三ヵ月で、二万部売り切った。いまのところ頗る好評である。玄米発酵食をたべて病気がよくなった体験例を一〇〇例ほど集めて公表しているので、好評なのはそのせいであろう。

われわれは白米食をたべているが、玄米発酵食をたべることによって、玄米食をたべたと同じ栄養分をとりいれることができる。玄米発酵食は小袋にはいっているので、食後小袋を破って、簡単に食べることができるようになっている。

ガンになる危険性を感じている方や、老化防止につとめたいと思っている方は、私に連絡して下されば、玄米発酵食の製品を紹介してあげたいと思っている。

なぜ黙って話が聞けないか

福井　律

もう二年ばかり前のことだが、友人の令息の結婚披露宴に出席して驚いた。場所はホテルオークラ、新郎はT大出身の俊秀弁護士、花嫁はお嬢様学校で有名な某女子大卒と、舞台と役者が揃った華麗な宴席であった。

形通り、仲人の挨拶、紹介も終り、新郎側の主賓の祝辞が始まった頃から、どうも様子がおかしい。水を打ったような厳粛な雰囲気といいたいところだが、ザワザワとザワめいているのである。震源地は新郎の友人達、若い仲間の席あたりだ。主賓が恩師の大学教授であっても、

おかまいなし。日ごろ懇意な同学師弟の関係に甘えてのことかとも思ったが、新婦側の主賓の時も全く同じ。その後、来賓のスピーチが何人か続いたが、その間、彼らは自分達の話題に夢中になって、スピーチに耳を傾ける様子はついぞ見られなかった。これが二十一世紀の日本を担うエリート達であるとは!!

後日、大学教授の友人に聞くと、大学で厳粛に講義を聞くなどというのは今や珍しく、大部分の教室は始めから終わりまでザワザワ、ガヤガヤ。一方、教授の方も生徒のおしゃべりも意に介せず、持ち時間をあいつとめ、平然と退出される由。

なぜそうなったか……。以下、珍説奇説を紹介し、原因分析を試みる。

（一）六つのポケット説

今や一家族での子供の数は平均一・五四人で、兄弟姉妹のない一人っ子が過半数を占める。一方、おじいちゃん、おばあちゃんは長寿で、年金もあり、お金持ち。子供にとって双方のおじいちゃんおばあちゃんに両親を含めてお小遣いのスポンサーは六人にも達する。欲しいものは何でも手に入り、我が儘一杯に育て上げられている。昔流のしつけなどトンデモない。辛抱、忍耐、礼儀、謙虚など、今は死語と化している。

（二）　ご存知「ナガラ」

子供の頃から一日中テレビばかり見て立派な（？）「ナガラ族」となった若者にとって、大学での講義もテレビから流れる音も同じ。テレビをつけっぱなしにして友人とおしゃべりするのと何の違和感もない。

（三）　日教組先生説

礼儀作法は学校でしつけて貰うものと考えている親達と、民主主義の下では先生は生徒と友達、聖職というより労働者としての使命に燃えている。楽しい学園作りを目指す日教組の先生方とのすれちがいはどうしようもない。

（四）　ファーストフード説

ファーストフードは、若者に立食いの簡便さ、気軽さを教えてくれた。しかも、そこには口うるさい親はいない。ハンバーガーをパクパク食べて教室へ、席について漸く落着いて、隣の気の合った仲間とじっくり情報交換

する。そして、ザワザワ、ガヤガヤ……。

（五）　喫茶店変貌説

一昔前喫茶店は、一杯のコーヒーで何時間も粘り、友人と政治論、人生論を語り、討論する場であった。今や一人っ子の若者がマンガ本を読んだり、テレビゲームをやる場になり果てた。「オタク族」の坊やが淋しく一人で時間を過ごし、仲間を求めて教室へ来た時には、やはり喋らずにはいられない。

等々いろいろ原因は思い当たるが、教室で身につけたガヤガヤ癖が社会人になっても抜け切らないのには閉口する。

人の意見を静かに聞く耳を持つのは、双方の立場、主張を正しく理解し合う基本であり、民主社会成立の第一歩ではないか。

若者諸君は勿論のこと、関係諸兄、特に聖職にある人々に、重ねて、他人の話を静かに聞く度量と忍耐心を持つ必要性を強く訴えたい。

プロ根性

藤岡　豊

新年早々新聞のスポーツ欄をにぎわせたのは、野茂投手であった。近鉄のエースとして五シーズンを投げぬき、そして今や億の年収を振り切って、本場アメリカのメジャーリーグに挑戦するという。独特のトルネード投法を見られなくなった私達には淋しい限りだが、彼の英断に心から拍手を送ると共に、そのプロ根性には改めて敬意を表したい。

野茂選手のケースは、日本のプロ野球やJリーグでプレーしている安易な「でかせぎ」外人選手とは訳が違う。リスクを恐れず、可能性に向かってチャレンジする心意気が嬉しいのである。去年もサッカーではベルディ川崎の三浦カズ、バレーでは日立の大林、吉原の両選手が、イタリアのプロを目指して日本を離れた。厳しい環境にあると思うが、現地での活躍を祈ってやまない。

プロ根性といえば、忘れ得ないことがある。もう十年も前のことだが、南アフリカ（南ア）でサン・ワールドというゴルフのトーナメントが開催されることとなった。アメリカ、ヨーロッパを初め、各国のトップゴルファーが招かれ、日本からはただ一人、青木功が招待された。当時南アに駐在していた私達日本人すべてが、青木の来訪を待ち望んだものだが、正直いって実現するとは思っていなかった。というのは、当時日本は国連ベースの決議に従って、南アのアパルトヘイト（人種差別政策）に強く反対し、制裁の意味も含めてスポーツ、教育、文化の交流を実質禁止していたからである。

ところが驚くなかれ、青木がやって来たのである。日本政府からのプレッシャーは相当なものであったらしく、関係者もこれは無理とほぼ諦めていたそうである。聞くところによれば、彼は日本を出発する前に、こう言ったという。

「スポーツ交流の禁止とか国連の決議とか、そんな難しいことは俺は知らん。俺はプロだ。プロゴルファーとして金をかせぎに行くのが何故悪い」

実に見上げたものである。これこそプロの権化と言えるだろう。考えてみれば私達だって、その対象こそ違え、南アで金をかせいでいるプロなのである。ヨハネスブルグの日本人会こぞって彼を迎えたのは、言うまでもない。

しかし何よりも嬉しかったのは、あらゆる反対を押し切ってやって来た青木選手を、南アの人達が拍手をもって迎えたくれたことである。当時南アに住む日本人は、「名誉白人」として特別扱いされてはいたが、所謂「ノンホワイト」であることに変わりはない。その土地で、人種を越えて青木のプレーに心からの声援を送ってくれた彼らの温かい気持ちは、今も忘れることができない。

ところで南アに住む非白人の中で、何故日本人だけが「名誉白人」とされていたのか、その背景は定かではない。人種差別の観点からすれば、むしろ不名誉というべきだろう。ただ日本、そして日本人が、白人、黒人のいずれからも特別な目で見られ、一目も二目もおかれていたのは事実である。これは南アに限ったことではなく、ブラジルでも同じであった。日本の経済力、日本人の能力、勤勉さといったものに、半ば尊敬、半ば称賛のまな

ざしが向けられていたのかも知れない。それだけに、おかしなことはできないと、自戒の念を抱いたものである。

ブラジルといえば、滞在中に面白い話を仕入れたのでご披露させていただく。

首都ブラジリアで、大統領が定例の閣僚会議を開いた。その日は特別の議題がなかったこともあり、大統領が次のような質問を投げかけた。

「このブラジルをもっともっと良くするには、どうすればよいだろう」

要するにブラジルの更なる繁栄のため、何かいい知恵を出せという訳である。

真先に手を挙げたのは、大蔵大臣であった。

「奇跡の発展をなし遂げた、日本とドイツを真似るべきだと思います」

そうだそうだと各大臣から一斉に拍手が起こった。

次に立ち上がったのは陸軍大臣である。

「私も今の大蔵大臣の意見に賛成です。日本やドイツのように、ブラジルも世界を相手に戦うべきだと思います」

また一斉に拍手が起こった。

大統領は暫らくの間沈思黙考していたが、やおら顔をあげるとこう言った。

「よし、よく判った。考えてみよう。しかし日本やドイツは、幸いにも戦争に負けたからよかった。もしブラジルが勝ってしまったら、一体どうすりゃいいんだ」

かくして折角の提案もお流れとなってしまった。

この話はブラジル人共通の、楽天的でお人好し、そして理論に弱い性格を揶揄したジョークである。一番まともなのは大蔵大臣で、その言わんとするところはよく判る。だからと言って一足とびに飛躍してしまう陸軍大臣も実に愉快である。最も愛すべきなのは、戦争すれば勝つかも知れないと、本当に思っている大統領である。真面目な顔で議論しているのどかな閣僚会議を、垣間見るおもいでまことに面白い。

しかしこんな笑い話に、日本が出てくるのが驚きであった。それまでジョークに登場する日本人と言えば、兎小

屋に住んでコツコツ働いてばかりいるすがたを、茶化したものばかりであった。それが知らない間に少しずつ変わって来ているのである。確かに先進国、発展途上国を問わず、日本に目が注がれてきているのは事実であり、裏を返せば、日本の果たす国際的な役割が増幅し、かけられた期待も大きくなったと言えるだろう。グローバルな経済の発展と世界の平和のために、日本の役回りは明らかに変化しているのである。

戦後五十年、もはや日本はアマチュアではない。れっきとしたプロである。それならば、プロとしての自覚を持ってしかるべきである。ところが日本の果たすべき役割をめぐって、国内でくだらない議論が繰り返されている。日本の官僚は一体何を恐れているのか、何故リスクばかりに拘泥ってチャレンジしようとしないのか。野茂選手の爪の垢でも煎じてもらいたいものである。

老いらくのマナー

衞藤　甲子郎

「古来稀なり」と言われるほど、生きてきた。

この句を習った中学生の時には違和感は無かったが、現在では全くリアリティに乏しい死語のように感じる。

自分では決して長い期間であったとは思わないけれども、客観的には七十年の歳月を過ごしたことに間違いない。その間には戦争末期のように、わが身を文字通り肉弾とするべく死を見つめて朝夕を送っていたことがあったのを思うと、今日まで生き延びたのは運命の神の気まぐれによるものだろう。しかし、いかに悪戯好きの女神でもこれ以上の依怙贔屓をしてくれるとは思えない。時は絶え間なく正確且つ冷酷に刻んでいるのだから、七十歳の男には人生の終末が近いことは子供にも判る常識である。

動物は種族維持のための生殖の役目を果たすと次第に

生命力を失って粛々と世代交替を遂げているのに、人類に限ってもろもろの情念に災いされて生命存続の煩悩がなかなか消えないのは実に困ったことだ。更にその生存願望を正当化しようとして、無理にこじつけた理屈やタテマエ的道徳を作り出すものだから、われわれの周囲には本来自然界のあるべき姿とは全く異なった歪みが生じ易い。

特にわが国は戦後一貫して国民の平均寿命が延び続け、当分世界一の座は揺るぎそうにないらしい。国民の寿命が長いことは一流国家として必要な要素の一つかも知れないが、長寿国なるが故の矛盾や不条理が顕著な社会現象となっていると言っても過言ではないだろう。

病人や老人のような社会的弱者を大切にすることは国民にやさしい政治の基本であるとの主張は、聞く人の耳に快く響き、語る人の暖かい人間性を演出する。従って選挙の票が増えることを計算する政治家たちは好んでこの言葉を口にするが、その一方で彼等は消費税の税率を上げるのも健康保険や厚生年金の料率を高くするのも、すべて迫りくる高齢化社会への対策であって福祉国家としては当然の政策であるという。

だが自分自身が現実に押しも押されもしない高齢者の範疇に入って周辺を見渡してみると、政府のいう高齢者対策がタテマエの福祉であることがよく判る。老人に対して強制的に健康診断を受けさせ、頭の天辺から足の先まで検査して無理に健康でない箇所を探しだし病人として治療を施すのはタテマエ的な敬老であって、それ故に高齢者への福祉対策の主眼が老人介護と医療、特に延命治療に偏り過ぎる結果となっているようだ。

いつも通ってくる常連の患者が病院に顔を見せなくなると、医者は病気が癒ったのだろうと考えるが、患者同士は逆に体が本当に悪くなったのだろうと心配する、というのは決して笑い話ではないらしい。医者の待合室が高齢者の情報源でありレクリエーションの拠点になっているのは福祉国家日本の象徴とも言えようが、この状態が改善されない限り老人医療費は間違いなく上昇を続けるであろう。

非学問的な考え方として世の識者のお叱りを受けるかもしれないが、生物には生れついての寿命があるのではないか。日常生活に万全の注意を払い、恵まれた環境で絶えず健康診断を受けていても、七十歳を超えると薬石効無く逝去する人が出てくるが、反対に不健康極まりない生活を送り喫煙・飲酒を無制限に継続している無頼の徒でも七十・八十まで元気な人も沢山いる。

どんな精巧な機械や立派な家具でも半世紀以上も使用していれば必ず歪みが生じてくるように、人間も長く生き続ければ経年疲労するし機能障害も起きるのが自然であるから、医者に頼っても今更若者の体のようになるはずはないと諦めてすべてを寿命にまかせてしまいたいものである。

良心的な名医は患者に節制を勧告する時、「あなたの寿命が幾歳であるか医者の私にも判らないが、現在のような暴飲・暴食を続けていればあなたの持って生まれた寿命が少なくとも三年から五年は確実に短くなる」と表現するそうだ。

経済大国日本ではモータリゼーションが浸透して農村でも人々は歩かなくなったから、脚力に象徴される国民の体力は著しく衰えつつあるというのに、医学の発達にともない延命治療の方法が日進月歩しているので、人間はちょっとやそっとではなかなか臨終を迎えないようになってきた。いや、生命の最終段階であることが明らかでも医者は崇高な使命感に基づき患者の生命を維持しようとして懸命に努力するから、日本には体力の弱い病人の高齢者の数が増加し、結果として平均寿命の延びが益々顕著になると予測される。

健康保険・厚生年金等々、わが国が誇る高齢者の福祉政策も国民の更なる長寿化によって費用が高騰し、制度維持も危ぶまれるのは当然であろう。

現在世間には終日看護を要する寝たきり老人や回復の見込みのない痴呆症の人たちが何十万といると聞く度に心が痛むが、彼等には国民に莫大な負担と犠牲を強いているという自覚がないだけに余計悲しい。

「生の尊厳」とは自律できる精神と肉体があってこそ存在し得るのであって、正常な会話や思考が不能で回復

の見込みがない生は決して尊厳であるとは思えない。

過度の治療や薬漬けを手厚い看護と錯覚していては、いたずらに医療費の高騰をまねくだけである。むしろ心のこもった看護とは期間の長さに反比例するものと心得るべきであろう。

労働生産に何等寄与しない老人がいたずらに病床に充満し、若い世代の人たちの大きな負担になっているのは心苦しいではないか。古来稀なほど図々しく生き続けてきた身としては、少しでも動ける間は病人ではないとの意欲を持って、医者にも罹らず病床にも就かず、寿命が尽きるまで医療期間の最短コースを採ることを選択したいと願っている。

老いらくのマナーは生命を永く維持しようとすることを前提にして検討するのではなく、いかに医療期間を短くして巧みに死に到達するか、その方法を積極的に模索することではないだろうか。

無賃乗車をした犬

亀井　弘次

その犬の名はブローディ。つがいでイギリスから輸入された牝犬。一才年上の姉さん女房である。犬種はフラットコーテッド・レトリーバー。最近CMでもよく見かけるゴールデン・レトリーバーとよく似ているが色は黒。稀にレバー色もいる。イギリスでは貴族の飼う犬として知られるノーブルな鳥猟犬である。

この犬を恐らく東日本では初めてイギリスから直接輸入したのはM夫人。例の悪徳ブリーダーとは正反対。いくら金を積まれても、信頼のおけない人には仔犬を譲らないと言う。

或る朝、犬舎を見回っていたM夫人がブローディのいないことに気が付いた。

〝またやったかな〟

ブローディは脱柵の名人で、今迄何回か前例があった。

左が無賃乗車したブローディです

しかしおかしい。脱柵を防ぐため、前の日に高さ約3メートルの天井迄一杯に頑丈な金網を張りめぐらしたのに。工事屋さんもこれで大丈夫でしょうと言っていた。

兎も角、近隣各地の警察署に失踪の届けをする。苦労して英国から輸入した由緒正しい血統をもつ犬だ。（註）祈る思いで連絡を待つ。

「港南台の駅前交番で、それらしい犬を保護している。至急引き取りに来られたい」の一報が入る。港南台の駅とは、M夫人宅の最寄りの本郷台より一つ横浜寄りのJR根岸線の駅である。

以下M夫人の推理した失踪経路。

苦心惨憺して脱柵したブローディは勝手知った近所で朝の散歩を楽しんでいた。ちなみにこの犬種は闘争心絶無の平和主義者。誰からも、どこの犬からも愛されていた。

その中に出勤する見知りの人を見かけ、ついて行くことにした。本郷台の駅では皆んなについてホームへ。駅員はまさかと思い見落とした。電車が入って来る。人の後からつい乗ってしまった。電車が動き出す。それ迄嗅

いでいたテリトリーのにおいが消えてしまった。これはしまった。やがて電車が止まる。降りる。かすかに懐かしいにおいがする。急いでその方に戻ろうと改札口に向う。ここで、今度は駅員に見付かってしまった。だけど大型犬に駅員は手を出せない。そこへ運よく犬になれた学生が通りかかり、捕まえて交番に連れていってくれた。

これで一件落着となるが、最後に警察官が言った。

「一駅間とはいえ、これは完全に無賃乗車ですな。」

それにしても金網をはりめぐらした犬舎からどうして脱柵したのか。

犬舎を詳しく調べたM夫人は、天井近くの隅に当たる部分に、壁との間に僅かな隙間があるのを見付けた。まさかあんな処迄登れるわけがないと思っていたのだが、何しろ脱柵の名手ブローディは一晩かけて、よじ登ったに違いない。外の道路は犬舎の床より更に低く、隙間から4メートル以上ある。よく落っこって怪我をしなかったものである。

ブローディの一才年下の亭主はマーティスと言う。この夫婦は全くの婦唱夫随。好奇心旺盛、積極果敢なカミさんに旦那はいつも後からついて行く。それでもこのやんちゃ奥さんにマーティスは首ったけ。来日後3回の出産で二十数頭の子孫を作った。

このブローディが昨年八月二十五日、突然死んだ。直前迄元気だったのに。肺に出来た悪性腫瘍が原因。最愛のカミさんを失った夫マーティスは急激に力を落とした。心臓疾患のため丁度4ヶ月後、十二月二十五日にカミさんの後を追い、天国に行ってしまった。

享年十才の若さだ。

（註）　かねて日本のブリーダーの金儲主義を不快に思う英国のフラットコーテッド・レトリーバー協会は、日本への輸出を厳しく制限している由である。

「吉葉山」つれづれぐさ

＝第五段＝

吉葉芳彦

晴海通り三原橋に、チャンコ料理「銀座・吉葉」がある。女将は豊川かよ子、立ち居ふるまいは爽やか、腰は低く、しかも、どこか毅然とした雰囲気を漂わす。電話の声は「毎度ありがとうございます、銀座吉葉でございます」。聞くものには、三十代女盛りの美しいひとをイメージさせてしまう。実は、もうチョットご年配なのだが。

これから、吉葉山と彼女との「純愛物語」を聞いて頂こう。誰も知らないことなので、ソーッとしておこうとも思ったが、でも、やはりハッキリと書き留めておきたい。

昭和二十二年、彼は四年間の中国戦線・抑留生活から、やせ衰えて復員した。

上京してただちに、所属していた両国の高島部屋（後日の大関三根山・関脇輝昇・横綱吉葉山が在籍）に馳せ参じた。

部屋は戦災焼失して、仮の宿は鎌倉。ヤットたどりついて、ご挨拶をした親方（元小結八甲山）は失意の病床にあった。弟子たちは四散、ひとり息子は戦死。

スゴスゴ折り返し、吉葉博士のもとを目指した。文京区白山。中仙道をはさんで両側に自宅と病院があったので、必ずどちらかは健在の筈。通い慣れて勝手知った道なのに、見渡すかぎりの焼け野原。茫然自失したうつろな目に、焼け焦げた看板がボーッと行く先を示した。「吉葉病院の移転先ならびに、家族の消息は左記に照会してください・・」。

左記とは文京区大塚、幸いにも焼け残った「女将」の家である。よろめき倒れ込んだ相撲取りは、今となっては、海のものとも山のものとも知れぬ、二十七歳の敗残兵。

彼女は数日間、この厄介者を精一杯もてなし慰め、力づけた。時まさに終戦直後、物資も食料も窮乏し、あま

つさえ、ひとのこころも凍てつき、すさんでいる頃であった。

この数日が、二人の出会いである。彼は彼女をいつまでも忘れられなくなる。いつしか必ず、恩返しをしたいと。

心身を癒され、気を取り直した相撲取りは彼女に見送られて、博士の落ちつき先・茨城県三和町に向かう。

二十数年の時は流れた。

元敗残兵は今や、角界最高峰・横綱をきわめ、理事・宮城野親方として日本相撲協会の枢要を占めていた。

移り変わりは世のならい、主人を亡くして彼女の境遇も激変した。彼は待っていたかのように「恩返し」を始めにかかった。

「小母さん。ぜひ、うちを手伝って下さい。私も、料理旅館・すし屋・チャンコと数軒いっしょに始めてしまったので」。彼は彼女の人柄・力量を充分知っていた。彼女も、彼の頼みが「こころ遣い」であることは承知のうえ、敢えて、乗った。そして、つとめに努めた。

昭和五十二年、彼は死出の旅路への病床にいた。見舞いに駆けつけた彼女の手に、力なくも触れながら「小母さん。チャンコ、頼みますよ。吉葉、頼む」と、つぶやくように。　彼女は心底から、彼の『こころ遣いと厚い信頼』に応えようと誓って、更に、努めた。

電話の声・立ち居ふるまいは若やいでいても、既に、「とし」である。彼女の過去の栄光を知り（固く口止めされているので語れないが）、その誠実な人となりを知る一人として、少しでも早くホッとして貰いたいと願っている。

濡れ場もなく艶っぽくもない「純愛物語」にお付き合い頂いてしまった。

「銀座・吉葉」女将・豊川かよ子は小生の叔母。モット詳しくは、吉葉山名付け親・吉葉庄作の夫人（小生の母）の、弟の連れ合いである。

黙々と働いている。僅か数日間の厚意を、生涯忘れようとしなかった「宮城野親方」の心意気を、彼女も決し

て忘れようとしない、かのように。齢すでに喜寿。
人情話として聞き流され、やがて、かき消されてしまうホンノ「ひと節」ではある。

終戦時は貧しさのなかで、ひとのこころは凍てつこうとしていた。
今や豊かさのなかで、ひとのこころはすさみかけようとしている。
貧しさのなかにさえ温もりはあったのに、戦後五十年して、こともあろうに、「豊かさと裕さとが相剋」している感なきをえない。　時代の先駆者が望まれることは勿論ながら併せて、歴史の語部も欠かせないのではないだろうか。
誰も知らないことなので、ソーットしておこうとも思ったが、やはり「ひと節」ハッキリ書き留めておきたかった所以である。

戦士の誼

間渕　達明

昨年、年の瀬が押し迫ったクリスマス・イヴの日に、友人から一通の書簡が届いた。音信が途絶えて幾年になろうか。友、遠方より来る。

前略　貴信拝受。久し振りの便り誠に懐かしく、ここに返辞をしたためます。
我々は同じ時期に社会にでて、貴兄は自動車、小生は銀行と業界は異なりますが、先兵として働き盛りの時期をともにして、ラテンアメリカで過ごしたことが、つい昨日のように思い出されます。
さて、近況をとの御所望ですが、最後にお会いしてから二十年以上の長い歳月が経過、何からお話して宜しいものやら、いささか戸惑いを覚えます。しかし企業戦士と呼ばれることに少しもはばかりを感じない小生にとっ

て、若干旧聞に属しますが、先ずは仕事の話題から入らせて頂くのが、ごく自然のように思われます。お許しください。

小生がメキシコに駐在していた頃、中米五ヶ国とパナマ、カリブ海の島々に出張し、貴兄は南米の拠点からこれらの地域の販売総代理店とディーラーを巡回。各地で幾度か奇遇を歓び、ホテルのロビーで日本風味もどきのつまみを肴に、冷房のきかない、うだるような熱帯夜の中、景気談義と故郷の便りを語り合ったことが思い出されます。

当時、中米、カリブ海諸国への日本企業の進出は、商社を別にすれば、その数が少なく、近隣国からの出張によってカバーしていた時代。何処にいっても日本人は珍しい存在であり、出張の都度ホテルの出入りを重ねるうちに、何時の間にか知己・同胞の『誼』が生まれ、情報の交換や、出張の合間をみて室内遊戯、時にはゴルフに興じ、再会を約束して空港に向かったことを今でも覚えています。

概してラテンアメリカは米国の金城湯地、とりわけ中米・カリブ海地域は米国の裏庭。金融市場は米銀とカナダ系銀行の独壇場、自動車は米国メーカーが圧倒的なシェアーを誇り、小型車中心の後発日本勢は悪戦苦闘。それ以外の業種も少なからず国際化揺籃期の悲哀を味わったものでした。攻めては叩かれ、叩かれては攻める。所詮勝ち目のない戦と嘆きもしましたが、それでも少しずつ活路を後の世代に拓くことが出来たのではないでしょうか。時が流れ『誼』を結んだあの頃の企業戦士たちも漸次戦線から身を退き、予備軍またはボランティア活動、或いは自適隠居の生活に入ったと聞いております。しかし、往時の『誼』は今もなお季節の挨拶状によって続いております。

小生も昨年六月末、六十五歳に半年を残して退職、年金生活の身分となりました。銀行に三十五年、物流関係の会社に十年、通算四十五年間の勤務の後、サラリーマン生活に終止符をうちました。銀行では十八年間をラテンアメリカで勤務し、地域とのゆかりを深めて参りました。第二の人生、職場では海外事業を統括する立場から、米・加・東南ア・西ヨーロッパの現地会社の経営に参画

し、海外出張に明け暮れる日々を過ごし、最後は米国との合弁会社に出向、昨年六月に退職しました。

退職後は企業OBペンクラブに入会し、多士済々の集まりなので、大いに啓発されております。企業人としての生き甲斐と、ラテンアメリカの事象、文化、言語などを自分なりに解釈して、次ぎの世代に伝えることが出来れば、これに優る喜びはありません。

今年は戦後五十年の節目を迎えます。多感であった少年の頃に思いを寄せますと、我々は学齢期から強烈な国家主義の理念と画一的な行動規範を叩き込まれました。ご存知、菊水の精神。「青葉茂れる桜井の」に始まる、忠臣楠木正成親子の「桜井の別れ」を感動こめて歌いあげた軍国少年時代。機体のジュラルミンを天空にキラキラ光らせ、白く澄んだ飛行雲をなびかせて、我々の手の届かない遠い世界に飛び去っていった、あの米軍爆撃機B29。空爆により多くの学友を失った勤労動員の時代。戦後は一転して今までの価値観が崩壊し、代わって自由と民主化の新しい胎動が始まりました。見ること聞くことの新鮮さに、目を輝かせたあの頃の感激を忘れることが出来ません。

お手紙によりますと、これからの時間を奥様と楽しく過ごされたいご意向の由。誠に結構ではありませんか。戦後自由に生きることが許されて五十年、小生の企業人生も丁度その節目のところで終わりました。これからは貴兄ご存知の『アスタ・マニャーナ』。明日に回せるものは、わざわざ今日やる事はない。聖なる日、今日を精一杯生き切ることが大切ークヨクヨしない。慌てない。焦らない。怒ってみてもはじまらない。ラテンアメリカで学習した『明日主義（まにゃーな）』の有り難さがわかるような気がします。明日の日は来れども、今日の日は再び戻らず。残された時間を大切にして、第三の人生を生き切りたいと念じております。

娘と息子は既に独立、今は妻と二人暮らし。孫たちの来訪を楽しむ身となりました。妻もお陰様で還暦を過ぎ、夫婦で同じ成人病を分かち合いながら、自分の時間を自分で支配し、自由かつ平穏な日々を過ごしております。

承れば昨年の秋、循環器系統の大病にかかり一命を取り留められた由。先ずは安心致しました。その後順調に

回復に向かっておられるご様子にて、ご同慶の至りに存じます。この上は静養第一に、御身をお労り下さるようお願いします。昨年の夏は記録的な猛暑、その影響が今になって健康面に出ていると聞きます。ご自愛ください。

小生は去る十月に胆石の手術、また諸々の事情もあって、この冬は風邪を引かぬよう心掛けております。春暖の候となりましたら、御地を訪ね、旧交を暖めたく存じます。それまでの間、養生に専念され、ご機嫌の麗しき折りには、お便りをお寄せくだされば幸いです。

末筆ながら奥様にくれぐれも宜しくお伝えください。

草々

カワセミ

岩瀬　昭三

カワセミという雀より少し大きい野鳥がいます。湖や沼、川のほとりに住んでいて、水中に飛び込んで太くて長い嘴で小魚を捕る。その素早い様子はテレビでたびたび放映されています。コバルト色の背と橙色の腹部をもった嘴の大きな美しい小さな鳥。日本全国に分布、繁殖する。冬期、北方のものは暖地に移動。水中にダイビングして魚を捕る。捕らえた魚が大きめのときは、枝や岩に叩きつけ弱らせたあと頭から呑みこむ。川面を「チィー」という鋭い声を出して低く矢のように飛ぶ。カワセミの名前は、雛の「ジャ、ジャ、ジャ」と聞かれる声がセミの声に似ているのでつけられたと言われています。平地から山地の川、池、湖などの水辺の土の崖に嘴を使って五十センチ～一メートルくらいの深い巣穴を掘り、一番奥に柔らかい土、魚の骨を敷きその上に卵を産み育てます。産卵期は三～八月、抱卵日数は二十日くらい。

しかし、コンクリートで堤防を固める河川改修工事がそのカワセミの住家を奪ってしまい、この頃はその姿がみられなくなりました。数年前、愛鳥家の要望によって、旭川市内の河川敷三カ所に繁殖用のブロックが実験的に置かれました。コンクリート製の繁殖用ブロックは、一つが一メートル四方、その中心に直径五センチの巣穴が

一つ作られています。これを川岸に三個づつ二カ所、四個を一カ所に置いたところが、ほどなく五組のカワセミの夫婦が入りました。そのうち四組の夫婦が二カ所で隣り合って巣づくりをしました。巣と巣との間隔つまり隣の玄関との間隔は一メートルもありません。「カワセミは、普通一・五キロほどの長さの縄張りを持ちその中には他のカワセミは巣を造らない。それが、一メートルも離れていないところに巣を造るとは、河川改修により、カワセミの世界にも住宅難が進んでいるわけで、カワセミの気持ちになって考えると、見ているのが苦しくなる」という愛鳥家の嘆きが新聞に載っていました。

カワセミは、かっては札幌市内の川や池にもよく現われ、円山公園の池では止まる杭もいつもきまっていたと言われています。この姿を消した幻の野鳥は、写真でみるといかにもキレイで、また水中の魚を一瞬のうちに掴み捕るという野生的なアクションが魅力です。

野鳥に対する思いやりが広がれば、そのうち札幌でも昔のように見れるかも知れないなと密かに思っていました。

夏の一日、私は札幌近郊の北村の公民館裏の池にヘラブナ釣りに出掛けました。退職して二年目、友人のA氏のすすめで始めた小生の夏の道楽の一つです。札幌近郊の農村地帯の北村、新篠津村、月形町では、村起こし、町起こし事業として沼や池にヘラブナを放し、一般に無料で開放しています。朝六時頃札幌を出て、車で約五十キロ走り釣り場に到着、四〜五時間釣り、それから近くの町村営の公営温泉に入り、帰途農道脇にある野菜即売店で新鮮な野菜類を買って午後四時頃帰宅という一日のスケジュールです。

その日の午前中は、さっぱり釣果があがりませんでした。気分転換しようと早めに昼食を済ませ、あらたな気持ちで午後の釣りに入りました。釣り場は、高い木々の間にあり、午前中は木影になっていて涼しかったのが、太陽が動き、午後から日光が背中に直接あたるようになってきました。汗が出る、暑い。小一時間も過ぎた頃ヘラブナが一匹かかりました。二十センチを越す大型のフナです。私の後ろで釣りを見ていた近くの村営病院帰りのじいさんが、鯉でないかと言いましたがヒゲがなくやは

りへラブナでした。それから一時間くらいの間、浮きは上下しますが釣れません。じいさんは飽きたのか何時の間にかいなくなってしまいました。さて、そろそろひきあげるかと考えていたとき右脇の木の茂みから小鳥がすっと出てきて、小生の竿に止まった。びっくりしました、紛れもなく写真で見たカワセミです。小生が右手で握っている一本竿（長さ四・五メートル）のほぼ真ん中、手元から二メートルほどの所にしっかりと竿を掴んで横向きにとまりました。（竿はカーボン製、先径一・二ミリ、元径二・四センチ、自重一一五グラム）目の前、手の届くような距離です。カワセミは、頭や背から尾にかけては鮮やかな青緑色（翡翠色）、腹部はオレンジ色。　そのコバルト色の羽毛が真夏のギラギラした太陽の光をまともに受けて、キラキラ輝く。青い池の水をバックに浮き立つその姿、かたち。こんなキレイな鳥が世の中にいるのか、いやいていいのだろうか。息が詰まりました。カワセミは、二十秒くらいジットしていました。かなり長く感じました。竿を動かしたら大変だと緊張のあまり右腕が硬直してしまいました。小さな体に大きな嘴、真ん丸のキラリと光るかなり鋭い野生的な目。なんとも素晴らしい眼光です。あのカワセミは、竿を掴んで小生をジット見詰めいたとき一体何を考えていたのだろうか、と今も思っています。

看護婦さんの友達言葉

八木　大介

今回思い付き見たいな格好で、静脈りゅう手術のために一週間ほど近くの共済病院に入院した。もう十五年も前から右足に静脈りゅうが隆起して居る。水泳やジョギングのときなど足が露出するので格好は悪いが、健康的には痛くもカユくもなかった。たまたま痛風で通って居た共済病院の看護婦さんが、「静脈りゅうは症状が出ると厄介になるので、症状が出ない中に手術して置いた方がよい」と勧めてくれたので、その場で血管外科へ行き

手術の日を決めてしまった。

手術は縫合（二十個所）に時間がかかったものの、三時間程で済み、術後の経過も良く、後は抜糸までの入院期間、退屈で困った。幸い日本シリーズがあったので、久しぶりにテレビをたっぷり見る事が出来た。

病室は六十五歳前後のシルバーばかりの四人部屋だった。私以外は心臓のバイパス作りや胸の動脈りゅう、人工透析しながら肝臓手術など大病の人が多かったが、三人とも手術前の検査期間だったので割合元気だった。

横浜の栄共済は最近急激に大きくなった病院で設備も良く、金沢大学系列のため医者や技術スタッフも優秀とのことだった。事実入院してみて医療や看護体制の充実振りに感心させられた。

痛風で整形外科に通って居た時には、こんな田舎病院と思って居たが、血管外科へ行ってみると、なかなかどうして、心臓のバイパス手術も一月に三四回はあるという。

「これくらいの設備とスタッフならひん死の大病でも体を預けるのに不足はなかろう」

思わぬ発見に拾い物をしたような気がした。

そしてもう一つの拾い物は、「患者に対してどうして看護婦が友達言葉を使うのか」という理由の発見だった。

もともと私は看護婦が患者、特に年配者に対して二人称的な友達言葉でしゃべるのを苦々しく思って居た。月に一回薬をもらいに通う整形外科でもそうだった。自分の孫くらいの小娘に友達言葉でなれなれしく話掛けられるのは不愉快である。老衰化して居るかもしれないし、体こそ弱って居るだろうが、看護婦から見下げられるような尊厳は失って居ない積りである。常々「これは一度、機会があれば注意せにゃならんな」と思って居た。

血管外科の病棟でも同じだった。ヒナにもマレな別ぴん看護婦がいきなり「お下の毛をそるわよ」と擦り寄って来た。なれなれしい言葉使いと共に、「バーのホステスじゃあるまいし…」と言う嫌悪が走った。

その後も、入院中に見て居ると病棟の全看護婦が同じ流儀である。「昨日はトイレ、何回だったァ。お食事、全部食べられたァ。今日は気分が良いんだ」等々である。流石婦長クラスの人はそういう友達言葉はないし、助手

さんと称する下働きの女性たちもちゃんと敬語を使って居る。「どうして看護婦だけなんだろう。友達言葉を使うのは…」といぶかっていたら、同室者の手術前になって漸く分かった。

今日手術台に登るという日の朝は患者も不安で緊張して居る。心臓手術ということと、全身麻酔では再び目覚めないかもしれないと言う心配である。そのときの同室患者は七十歳近く、良い年をしながら、「オレは酒飲みだから麻酔が効かないかもしれない。看護婦さんにそう言って来てくれ」とか、「絶食で腹が減った。カステラを食いたい」などと愚図って、付き添いの奥さんに「何を言ってるの」とたしなめられて居た。明らかに情緒不安定である。そのとき係の看護婦さんが寝台ベッドを持ってやって来た。

「さぁ、手術着に着替えて…。あら、T字帯を着けてないじゃないの。手術台がアクビして待ってるわよ」と急かせながら、子供をあしらうように手際良く着替えを手伝った。老人も仕方なく従ったが、顔付きからはもう不安は消え去って居た。

「これだな」と思った。

老患者は看護婦に全幅の信頼を置き、安心して任せられるパートナーと受け止めて居る。日ごろからの友達言葉の付き合いで、いざとなった時の信頼関係を作っていたようである。外科に限らず、病人は大なり小なり命に不安をもって居る。私のように肉や骨を切る訳ではなく、皮膚の手術のようなものでも…、そうして下半身の麻酔だけでも、メスが入る前はなんとなく不安である。事実、立会の医師などは不必要と思われるほど一部始終、手術の進行状況を説明してくれた。もっとも、下半身麻酔でも麻酔薬がだんだん全身に回ってくるので眠くなり、手術中はぐっすり寝込んで、手術状況は何も分からなかったが…。

こういう時には医師の説明も患者に大きな安心感を与える。と、同様の効果が看護婦の友達言葉による信頼関係作りにもあるのではないか。事実、入院して居ると看護婦の友達言葉が気にならなくなった。こうして漸く「ナゼ看護婦が友達言葉を使うのか」その理由が理解出来ることになった。

ところが片方でもう一つ面白い現象が出て来た。

退院するころになってきちんと敬語を使う看護婦が現れた。そう別ぴんでもないし、歳を食って居る訳でもないが、何となく品がある。中堅の看護婦で言葉使いは丁寧である。それで居て患者の信頼感は絶対だった。

「ああいう娘なら、息子の嫁にしても良いな」と思った。

そうなると再び、「看護婦の友達言葉だけが患者の信頼と安心感を得る方法なのか」と言う疑問が出てくる。

私は封建的なのかも知れないが、看護婦はやはり三人称言葉の方が落ち着くようである。

ア・ニュー・リース・オウ・ライフ

―航空機墜落事故からの生還―

大沢　章伸

「筆者は1993年4月26日インドのデカン高原北西部の町、オーランガバード空港で墜落したインド国内航空便の生残り乗客の一人である。離陸から墜落炎上迄の1分14秒間に、何を考え何を思ったかを、当時のメモと記憶をもとにして再生してみた。尚、墜落したこの便はボーイング737型機、乗員乗客合わせて118名のうち、死者55名。生存者は12人の重傷者を含め63人であった」

「ハヴ・ア・ナイス・フライト」インド人の空港職員にしては珍しく笑顔を見せて四、五十米程離れたところに「沖待ち」しているくたびれた機体に向けて顎をしゃくった。「お前が最後の乗客だ」と言われて、焼け付くように熱い空港のコンクリートの上を小走りに急ぐ。

機内に入ったとたんにドアが締まり、エンジンが始動する。長身のエア・ホステスが苛々しながら、「その辺の空いている席に早く座って」とこれまた顎で空席をしめす。シートベルトをしめるとドッと汗が流れ出す。

目一杯に人間と荷物を積み込み20年も働き続けた年老いたボーイングは、それでもソロソロと動き出す。窓から見える滑走路脇の雑草は飛行機の風にあおられて揺れているが、機体そのものは一向にスピードが上がらずいつ迄ものろのろと動いている。たしかこの田舎町の空港の滑走路は6000フィートしかないはず。海抜3000フィートの高原にある空港、気温も滑走路の上では50度近いので空気もだいぶ薄い筈だ。果たして飛び上がれるだろうか？　一瞬不安がよぎる。

それでも何とかフワリと機体が浮き、やれやれと思った瞬間に「パーン」と言う甲高い音とともに機体にショックがはしり、とたんに酸素マスクが天井からバラバラッと降って来る。「こんな低空で酸素不足である筈はないのに」と思っているうちに、今度は首筋を掴まれて思いきり後ろに引っ張られたような鈍い衝撃を感じる（後でわかった事だが、この時尾翼を3300ボルトの高圧送電線に引っ掛け、ショートして火災が発生）。それからは、窓から見える外の風景が突然褐色の大地と変わり、ずんずん迫って来る。機内は騒然。何を叫んでいるかは解らないがパニック状態に陥る。

やがて胴体着陸。強い衝撃は感じたものの、機自体は精々20フィートまでしか上昇しておらず、加えてスライドしながらの着地であったので、これで怪我をした人は余りなかったのではないか？　機体はまるで巨大な洗濯板の上をパンクした車で走っているような感じで、全体を震わせながら地上を疾走する。激しい振動は乗客の恐怖心をさらにあおり、意味なく発する人間の声が機内に充満する。

窓から外を見ると、綿花の収穫が終わった畑を突き走っているようだ。割合平坦な土地だし、「たいした事はなく終わるな・・」とホッとした瞬間左翼のエンジンから大人の背丈ほどもある真っ赤な炎が吹き出す。この時にはじめて「いよいよ死ぬのか？」と思う。アタマの中は真っ白になっているが、そこに漢字の『死』という文字

が浮かん来る。やはり経験していない事なので、イメージとして浮かぶのはこんなものなのだろう。乗客の悲鳴の飛び交う中でぼんやりとこんな事を考える。「火がこの座席を取り囲む前に扉が開いて外に飛び出せればオレの勝ち、火の方が早ければ黒焦げでオシマイ。なるようにしかならない……」。

機体が停止した瞬間、機内はこれまでの喧騒が嘘のように静寂が支配する。真昼の太陽のおかげで機内は明るい静けさ。皆一様に飛行機が止った事に安堵感を覚える。「そうだ、ともかくドアの側迄は行っておこう」。シートベルトを外し、思わず走って前方左側の扉の前にたどり着いた時にはすでに四、五人の人がドアの開くのを待っている。

さっきまであんなに明るかった機内が急に夕暮れが来たように暗くなる。首筋にさらさら灰のようなものがふりかかってくる。何だろうと手で触ってみると黒い煤。客室の後方から、黒煙が生き物のように天井にへばりつきながらこちらに伸びてきている。ツンと鼻を突く刺激性の強い臭い。慌てて息をとめる。ヨガの練習では四、五十秒は息を止められた筈と自分に言い聞かせて、ひたすら乗務員がドアを開けようとする努力を見守る。

やっとドアが開いた瞬間、まず機内に充満していた黒い煙が最初にどっと飛び出す。この黒いカーテンの先で我々を待つ大地がどの様な状態なのか、高さはどれ程なのか、地面は平らなのか等々、何もわからぬ儘に次々と乗客が黒煙と共に飛び下りて行く。もう行くしかない。せめてすぐ後に立っていたデブのオジサンの下敷きにだけはなりたくないと思いながら、ドアの縁を蹴って45度左前方に向けて思いきり遠くに飛び出す（百キロを超える大デブの彼なら真下に落ちるはずだ）。

私の着地はおそらく蛙が踏みつぶされたような惨めな格好であったろう。すでに前輪が脱落していたので、飛び下りた高さは二米余りしかなかったが、運動神経の衰えは情けなく、前のめりになり思わず両手を土についてしまう。しかしその感触は、「生きて外に出られた」という切実な解放感を私に伝えてくれる。すぐに地を蹴って駆け出し、燃え盛る機体から出来る限り離れなければと気持ちでは思いながらも、なかなか立ち上がれず、走

り出しても気ばかり焦り足は進まずという状態。ようやく前を走っている人の背中が動かなくなったので足を止め振り返ると、後の人達が必死の形相で走って来る。背中に炎を背負いながらも我々のかたまっているところまでは自力で走って来た中年の男性が、力つきてばったりと倒れ込む。まわりの人々が燻っている背中に畑の土をすくって投げつけ消火に努める。上着は背中に焼き付いてしまい、脱がしてやる事も出来ない。次第に意識を失って行く彼に声をかけて励ます事しか出来ないという無力感。

機体は首の部分だけ残して全体が火に包まれ、時々小爆発を繰り返しながら燃え続けている。ざっと周辺を見回してその辺に立ちすくんでいる人数を数えると50人余り。「そうすると半数の人はあの炎の中にまだいるのだな」と思う。ところがまるでSF映画を見ているような非現実感。真昼の照りつける太陽の下、木陰も何もない広漠とした収穫を終えた綿花畑の真ん中で、厳粛であるべき生と死を分ける儀式がいともアッケラカンに執り行なわれている。それを只見守ってどうする事も出来ないでいる自分の存在を極めて稀薄に感じながら、いつ迄も燃えている機体の火をみつめる。

ゆっくりと頭の中を過ぎるものがある。

「今年は数えで六十才、「還暦」はやはり「本厄」だったな。しかしこの分だともう暫くは生きられるかも知れない。いや、せっかく貰った二度目の命だからこそ大切にしなくては・・・」。やがてどこからともなく湧きでるように土地の人達が集まって来る。透明な雰囲気の中にあった生と死の儀式の場にインド的な人間臭さがたち戻る。頭の中で暫く消えなかった「(自分の)死」という文字も次第に薄らいで来た。

すぐ隣に、同じように立ちすくんでいた中年のインド人男性のつぶやきが聞こえた。

「アイ・ハヴ・ビーン・ギブン・ア・ニュー・リース・オブ・ライフ」

ようやく消防車の警笛が遠くから聞こえるようになってきた。

蘭亭紀行

藤井　長治

昨年十月、戦友十人ほどで、上海と、その周辺、紹興、杭州、蘇州、無錫、南京をまわってきた。兵隊として歩いた中支では、戦死、戦病死者の多い地域を、いままですでに供養して廻ってきたから、今度はすこし観光気分で、名所旧蹟を歩いてみようということにした。

杭州、蘇州、無錫などは、観光地としてあまりにも有名だが、紹興という所も紹興酒の本場だし、魯迅の生誕地でもあるから行ってみたいと、旅行社にあとからつけ加えてもらった。その紹興は上海の真南、急行列車で五時間半ほどのところだが、途中から遅れはじめ、七時間あまりもかかった。車中、中国人と話にならぬ話をしたり、停車駅の売店で、胡麻の飴やほし梅干を買って、みんなで噛ったりして、紹興についたのは午後三時すぎであった。

汽車のなかで、紹興で見物する所は東湖、蘭亭などといわれ、蘭亭とは王羲之が蘭亭序を書いた所、あの蘭亭か、とたしかめると、ガイドはそうだと云う。エ！王羲之ゆかりの蘭亭は紹興にあったのか、迂闊にも知らなかった。

旅にでるときは、出発前にあそこはこれこれ、ここはしかじかと、訪問先見物先を調べていくのが当たり前なのに、こんどは雑事に追われて、旅行社と幹事にまかせっきりでかけた。また、このところ中国の書を見ることにも遠ざかり、王羲之のことも忘れてしまっていたが、紹興の西南十二㎞に蘭亭がある、蘭亭序が書かれたその蘭亭が真近かにある、と聞かされて、小型のバスにのり込むと、心がなにかぶるぶると昂ぶり、王羲之のことも思いだされてきた。紹興の街はずれをすぎると、前方に会稽山系の山なみがあらわれ、田畑や原野を通ってほどなくバスはとまった。

両側に背の高い街路樹のならんだ道を、2百米も歩いたろうか？　観光旅行らしい人々が小声で話を交わしながらゆききする以外、物音一つしない。物売りの店もち

らほらあるが、売り声も聞こえない、静まりかえった佇(タタズマイ)だ。

落葉樹のなかに竹林が現われ、こんもりした森を入っていくと、そこが蘭亭である。仰々しい入口も建物もなく、竹と樹々があたりを抱えるように立ち並ぶ静かな森林である。我々一行のほかに、若い男女のグループや見物の人々が、ちらほらとあたりに見える。池のはたで連れだって写真をとったり、談笑したりしている若者達に、馬鹿笑いや荒々しい声はない。いかにも楽しげに、池の廻りを散策している。まさに一幅の絵だ。

この池を鵞池(ガチ)と呼ぶ（中国音は覚えてこなかった）。池のほとりに、王羲之が書いたといわれる雄大な鵞池の行書が、屋根つきの石碑となって周囲を圧している。その碑の傍らで、いれかわりたちかわり我が仲間をカメラに収めたが、出来上がりの写真を見ると、どれをみてもとられた人物より、羲之字があたりを圧倒しているのには驚いた。

拓本を石に彫りあげた〝鵞池〟の字は、肉太であるばかりでなく骨格が逞しく、なにびとがそばに来てもひけをとらない風格がある。余談ながら、王は鵞鳥という鳥が好きで、自分で何羽も飼って可愛がったという。後世池をつくる時、それに因んで鵞池と命名したものであろう。

この池にかかっている石橋を渡ると、右手に広場があり、そこに二階建の瀟洒な六角堂が建っていて、一階は六本の石柱が建物をささえている。その建物のまんなかに石碑があり、王羲之の功績をたたえた文章が彫られているが、落ち着いて読んでいる暇はない。

その広場の東南隅に、矩形状に型どられた花崗岩の石畳がつらなり、その間を二つの水流が走って、あたりは竹と楊柳などでかこまれている。その一つの流れの中ほどに立つ小さな石碑には流觴曲水と赤字で刻まれている。この庭の水流はどこまでつづいているのだろうか？庭のつきあたりは、竹を主にした樹林となっているが、庭の佇いはさして古くはなく、最近の造園のように見える。

東晉時代の永和九年（三五五年）三月三日、王羲之とその友人たち四十一名が、蘭亭の庭園で雅会をひらき、流觴曲水の遊び（上流から杯を流し、各々自作の詩を杯

にのせて流す。自分の前に杯がきたのに、詩が出来あがっていないと、罰で酒をのまされる遊び）を楽しんだ。この諸家の詩を集め、王羲之がその序文を書いた。これが名高い「蘭亭序」である。この書は、古来行書の名作、神品といわれているが、羲之の真筆は、楷、行、草書すべて、現在はどこにも存在していないという。

唐の太宗は、羲之の書を愛好し本物という本物をきょくりょく集め、やっと手にいれた蘭亭序は初唐の三大家、欧陽詢、虞世南、褚遂良に命じてそれぞれ臨書させた。太宗逝去の折、その遺言により羲之の書はすべて殉葬され、これより彼の真筆はこの世に存在しなくなったという。

蘭亭序の書と臨書の書道的価値については、後世の中国、日本のたすうの書家や研究者が鑑定し評価してきたが、その委細は優に万巻の書となり、ここではその一端をもとりあげる紙数がないし、あまりに専門的な内容は、読書子の興味を殺ぐこと甚しいに違いない。

蘭亭序のなかで、羲之は「今日は歌舞管弦の催しはないけれども、杯を交わし詩をつくって、奥ぶかい心を述べあい、晴れわたった清澄の大気のもとに、そよ風の吹いてくるこの川岸で、宇宙を仰ぎ見たり、地上のさまざまな物を眺めるのは、楽しみの極みであり、この楽しみを大いに味わおうではないか」とのべている。

この雅会は西暦三五五年に催されているから、王羲之はこの時四十七才に達し、当時としてはすでに老境に入っている。中年の頃、彼の親友が「人間、中年ともなると哀楽が身にしみるね」というと、彼は「老人にむかうと自然にそうなるもので、音楽によって憂いを紛らわすほかはないよ」と相槌を打ったという。

若いときより彼は、夷狄に蹂躙された洛陽、長安を奪回し、中原に東晋王朝を再建せねばならぬと、心のなかで誓っていた。四十才のとき護軍に任ぜられたので、異民族の居住地域を攻略宣撫すべく、宣城郡に派遣をねがいでたが却下され、右軍将軍となり会稽郡という富裕な郡の長官に任ぜられた。（これより王右軍といえば、王羲之をさすようになった）

武人として立とうとしたのに、地方長官として役不足で終わったゆえ、挫折感にさいなまれた。三十三才のと

き岳父を失い、その後つぎからつぎへと彼を認めてくれた上司たちが消え、寂しさはつのるばかりだ。また王氏家系にはその後めぼしい人物は現われず、一門に暮色がしだいに迫り、右軍の憂思は濃くなっていった。

こういう王羲之の心境から蘭亭の雅会がひらかれ、蘭亭序がかかれたものゆえ、その老境に入った彼の心の切々たる悲哀が、全編にながれている。それは、音楽によっても、人々と杯をかわしながら詩作に耽っても、心底では老の淋しさを慰められなかったのであろう。この中で羲之は、「自ら大いに足りており、老がいつ来るのか全く知らない」と悠然の態だが、人間老耄の根底的な悲しみが、まことによく出ている詩文だと思う。

この世界の書聖であり、天才であった羲之にして、その晩年は気難しくなり、家族や友人を大いに困らせたという。天才というものの終末は、往々にしてこのようなものかもしれない。

蘭亭内の一偶にある小店で、蘭亭序のコピー一巻を求め、会稽山系が薄墨色にかげり、あたりに暮色のせまる頃、心ひかれながら蘭亭を後にして、バスに乗りこんだ。

サンディエゴと日本

今村　亮

入会時、サンディエゴに二十年いたと自己紹介したところ、閉会後に、早速、お二人の先輩から、サンディエゴに旅行乃至出張したお話を聞くことができ、大変嬉しく思った。共通の話題を持つことが、ビジネスにあれ、人生にあれ、至上の喜びだと思う。アメリカに残った子供達は勿論、私にとって、サンディエゴは第二の故郷である。

サンディエゴは、米国西海岸の最南端でメキシコティファナ市に接し、近年、マキラドーラ工場の一大拠点として、脚光を浴びている。従業員二〇〇〇人規模の日系企業も数多く、特にテレビは米国の全需要を充たす黄金地帯である。国境沿いに二都市の共通の空港を作る話もある。NAFTAの実現で、サンディエゴは益々、日、米、墨三国間貿易に欠かせぬ町となる。

石川好氏のストローベリロードに描かれた様な小作農日系移民が南カリフォーニアに入ったのは、大正、昭和の初めであった。二世、三世と時代は流れ、今や、彼等の多くは、れっきとした農場の経営者である。二十年前、一世の方々からなる明治会にお邪魔したことがある。銀髪ながら、陽焼けした精かんなメンバーのお顔が印象に残っている。インペリアルバレーの内陸には当時の入植者を偲ぶパイオニアパーク博物館「日本ギャラリー」がある。

サンディエゴは米海軍の本拠地、平時は空母が数隻、港に横づけになっている。海軍兵士の多くは退役後も気候温暖な当地に留まり、余生を送る。日本駐屯の経験者が多く日本のすし屋さんが大もてだ。日本人夫人の数も又多い。

サンディエゴの日本姉妹都市は、横浜である。亡くなられた細郷市長が、数百人の横浜市民を引率し何回か親善旅行に来られた。メンバーに年配者が多いが、姉妹都市協会は、意気軒昂である。この協会が母体となって、日本友好庭園協会が生まれ、サンディエゴの中心にあるバルボア公園内に三景園（横浜三渓園の姉妹庭園）ができた。初代協会長は日本名誉総領事を勤めたヒッペンさん。私もこの協会理事を勤めた。現協会長は、元市会議員で滞日経験を持つヘンダースン弁護士である。チュラビスタは小田原の姉妹都市、少年野球の交換がある。日系の花屋さんの多いエンシニータスは九州、本渡市と姉妹都市である。

ラホーヤの海岸近くには、かっての駐日米国大使夫人、ハル・ライシャワーさんが住む。今でも毎春、ライシャワー記念講演会がUCサンディエゴ校で開かれている。この大学はバイオ、海洋学が有名、昭和天皇がスクリップス海洋研究所に立ち寄られたことがある。日本の政治研究で有名なチャルマー・ジョンスン博士も同大教授である。一方、サンディエゴ州立大には、ノモンハン事件の権威者クックス博士がいる。核融合研究の国際研がラホーヤにあり、東海村からの日本研究者も一時は大勢派遣された。日本語学習熱も相当なもの、州立大日本語教室には三〇〇名以上の生徒が学んでいる。

サンディエゴに日米協会支部（本部はロサンジェルス）

ができたのは、つい最近である。毎月、5・01クラブを各後援会社が持回りし、会員間の親睦を計っている。前述、クックス博士が企画した日本祭、SPOTLIGHTS ON JAPANは昨年十一回を迎え、サンディエゴと日本の関わりにおいて政治、経済、文化面で多大な貢献を果たした個人に贈るリーダーシップアオードを新設した。初回受賞者はなんと、サンディエゴ市長のスーザン・ゴールディング女史であった。市長自らが、日本との貿易、友好の促進に熱心なのである。サンディエゴ日本名誉総領事には元BOA在日代表であったジム・ウィーズラー氏が任命された。

さて日本では、アメリカズカップのおかげで、毎日のようにサンディエゴの海がお茶の間テレビに登場する。陽光きらめく海面、風をいっぱいにはらんだカラフルな帆、沖合には、グレイウエールの群れがバハカリフォーニアに向かってゆったりと南下していく。わがニッポンチャレンジ号はニュージーランドとの初戦につまずいたものの、その後はスペイン、オーストラリア等の強豪チームを押え堂々の四勝目をあげた。ラウンドロビン戦は計四回、三月まで続き先は長い。そして五月に、ルイヴィトンカップの勝者（挑戦艇Winner）と、シチズンカップの勝者（防衛艇Winner）がアメリカズカップをかけ対決する。この原稿が印刷完了する頃、私は現地サンディエゴ湾で海のF1とも言われるこの対戦を観戦している筈だ。

読書文化昂揚と被爆者竹下肥潤（ともます）氏

田中　良平

私が「全日本読書人クラブ」世話人代表の竹下さんと、運命的な出会いをしたのは、丁度八年前であった。

企業の尊敬する先輩で、卒サラ後、「冬青社」と興し、故郷の庄内史の研究を軸に据え、明日の日本の在り方を探求せんとする、読書人クラブの会友である、坂本守正氏の奨めによるものであった。

早速小宅から散歩圏に在る竹下邸を訪い、入会の意向を申し上げた所、先ず何よりも読んで欲しいとて、次の「設立宣言」のコピーを示された。

○「読書」と「益友」は人生を多彩にする。この二つを得ることが、クラブ設立の目的である。

○このクラブは読書を通じ平等の立場で「三慮」、すなわち、この一度限りの自分の人生を深慮し、二一世紀の日本人の在り方を静慮し、宇宙を含めた地球を、全人類を思慮することを、思索する場であって、組織社会が陥りがちな是非を論ぜずして得失に偏執する、管理計算の批判の場ではない。

○クラブには発起人も役員もいない。いるのは平等な会友と、核になる世話人だけである。

○このクラブは次の「三忘」を運営方針とする。年令を忘れ、肩書を忘れ、名利を忘れるの三原則である。

○そして、ささやかであるが、この全国運動によって、「読書文化」昂揚という理想を、我々は追求実践する。

青年時代から何よりも読書を愛好してきた私の心は、大きく揺ぶられ即時に入会し、会友の義務である月一冊の書評を書き、月例会にも努めて出席した。

会友は約三百名の熱心な読書愛好家であり、月例会には常時五十名位の老壮青の男女が参加し、何時も熱気を帯びていた。

竹下さんが精選される卓話者は、多方面に亘る斯界の権威者で、時には優れた会友の卓話も織りまぜて、毎回非常に勉強になった。

参加者全員名札をつけ、新会友は「氏名」「出身地」「所属名（肩書き不要）」「最近読んで感銘した本」のみを述べた。夕食・新会友紹介・卓話・質疑応答の順で進行し、会友相互の交流も極めて活発であった。

年会費六千円の他、夕食代僅か五百円で、八重夫人の「お袋の味」を賞味した。「ブックニュース」という八頁程度の月報が発行され、その中には竹下さんの中国の名言解説の巻頭言と、会友の二五〇字以下の書評多数が掲載され、巻末には卓話要旨も収録された。

別に一年分を纏めた立派な合本も頒布され、国会図書

館とローマのイエズス会図書館に献本された。この間の出費は会費で到底賄えず、皆竹下さんが自己負担された。

坂本守正さんから、竹下さんが広島に投下された原爆の被害者であることは予め聞いていたが、顔に少しケロイドの痕が残るものの、通常人を全然変わらぬ物静かな紳士というのが、私の第一印象であった。

敗戦後大阪外語中国語を専攻され、京大文学部史学科を卒業されたが、大阪外語は私の母校と兄弟校であり、竹下さんに対する親近感が湧いた。

「ブックニュース」第五号において、「吾が生や涯(かぎ)りあり、而して知や涯りなし」という題で、竹下さんご自身の波乱と苦難に充ちた過去を赤裸々に記述されている。

それによると、鹿児島県川内(せんだい)生まれの竹下さんの家系は、代々熱心な読書人が多く、戦禍で灰燼と化したが、万巻の漢籍が蔵に納められていたという。竹下さんは子供の頃祖父により「論語」等を素読暗記させられた由。

旧制中学時代胸を患い二度留年し、川内川のほとりで徹底した療養生活を送ったが、これが人生観形成に役立ったと書かれている。

父君の株式投資失敗の煽りで、中卒後大阪の株屋で辛いデッチ奉公を経験し、その後華北鉄道の兄上を頼って渡支し、三年間同社で働き夜間中国語を猛勉された。

帰国後牛乳配達までしながら、城北予備校で勉強中、昭和十七年召集令状が来て熊本の野砲隊に配属されたが、胸の疾患がぶりかえし、翌年三月即日帰郷を命ぜられた。そのお陰で志望の大阪外語の入試に間に合い、首尾良く合格し中国語部に入学することが出きた。

原爆投下の二日前、学徒兵として豊橋の予備士官学校を卒業した竹下さんは、広島の教育隊に派遣され、爆弾を背負って米軍戦車に体当り自爆する特訓を受けた。

そして運命の八月六日午前八時十五分、広島に原爆が投下された。爆心地から八百米の地点で被爆し、百二十名の仲間の中、竹下さんともう一名を除き全員死亡した。

広島城の城壁の裂目から見るも無惨な姿で這い出し、自力で脱出生存できたのは奇跡としか言いようが無い。時に竹下さん二十六才であった。

命からがら故郷に辿りついた竹下さんは、陸軍病院で治療生活に漕ぎつけ、血液の全交換のような大量輸血と、

肉親の寝食を忘れた介護のお陰で、翌年正月退院が許され、四月には宿願の京大に入学することができた。

大学卒業までの三年間は、嘔吐、眩暈、中耳炎、歯茎からの出血等、後遺症との苦闘の日であった。竹下さんは現在七十五才だが、その不撓不屈の精神力には驚嘆せざるを得ない。

昭和二十八年「リコー本社」に入社、五十二才で国際本部長まで栄進され、その後三愛会常務理事を経て、昭和五十五年六十一才で卒サラされた。竹下さんの企業人生活は決して順境ばかりでなく、昭和三十九年貿易部次長の時、豪向けカメラのトラブルで責任をとらされ、札幌の新設ホテルのボウリング部次長に左遷され、三年間双子の幼児を抱え北国の生活を余儀なくされた。

昭和三十一年三十七才で課長になった時チャンスが到来し、リコー・グループの創始者であり非凡な事業家でもあった、市村清社長の約八十日間世界一周旅行に随行され、人を愛し国を愛し勤めを愛すのいわゆる三愛精神を叩きこまれた。

只一人市村社長に対しても正論を吐き、うとまれたが、竹下さんの適切な措置が稔り、豪代理店の社長が来日時、この時のリコーのやり方が、豪市場で絶大な信用を築いたと称賛した。市村社長は竹下さんのことを想い出し、札幌に飛び涙を流し竹下さんに自己の不明を詫び、本社復帰が実現された。

札幌への左遷時、大先輩に当たる三愛会副会長で元野村証券社長飯田清三氏に挨拶に伺った所、「運不運は天の試練だ。困難に挑戦し毅然として仕事に打ち込め。家にあっては、古典を読み熟慮して之からの人生を考えることだ。」と励まされた。

飯田氏は市村氏と共に既に故人になられたが、竹下さんは之を「命の言葉」として、今も深く心に刻んでいると言われる。

「全日本読書人クラブ」の地味な活動が、朝日の「天声人語」や日経日曜文化面の「とじ糸」で大きく取り上げられ、反響は大きく広がった。朝日の辰濃和男氏と日経の井尻千男氏を一生の恩人と言われている。

竹下さんは益友に恵まれ、色々な分野の優れた方との深い人脈を持っておられ、海外の友人との交流も大切に

しておられる。海外にも近年まで、米欧中国等、八重夫人と赴かれた。

「逆境こそチャンス」「宮仕えの哲学」「中国名言選」等々順次刊行され、近く古典解説書を世に問われる。

「読書は生涯学習の源泉であり、世代交流の絆である。」と説かれ、一日一生を重んじ、人生のトータル思考論者である。

過日竹下邸を訪うた際、初めて薄緑色のカバーの「被爆者健康手帳」を拝見した。「死ぬまで努力する者は救われる」が竹下さんの信条で、我が人生の師の長寿を祈念したい。

イタリア北部の古都

吉井　米三郎

学生時代ルネッサンスの美術に憧れたこともあったが、三年ほど前、和辻哲郎の「イタリア古寺巡礼」を読んで以来、何れは訪ねたいと思うようになっていた。

昨年の暮れから新年にかけて「イタリア古都巡り」というツアーに参加した。参加者には同じ想いの大学講師、高校の先生夫妻もいた。

訪れたのはミラノ、ヴェロナ、ベネツィア、パドヴァ、ラヴェンナ、フィレンツェ、シエナ、アッシジ、ローマで緯度としては稚内から函館ぐらいであるが、地中海のせいで東京〜浜松あたりの陽気のように思えた。田舎の沿道は麦畑、牧草地、葡萄畑の下草のあさ緑、そしてときおりオリーブの銀白の緑があり、田圃が多く枯色の関東の冬とは違いがあった。

古都巡りの印象のきれぎれを厚かましくも初心のへぼ

俳句をまぜて綴ってみた。

―ミラノ―

イタリア経済の中心地の顔としては古い石畳、建物に近代が見えかくれする地味なたたずまいの印象。ゴシック建築の傑作とされている一三五本の尖塔をもつ大聖堂を訪れた。

・尖塔の林立燦爛と冬晴るる

世界初のショッピング・アーケードの入口のカンパリという老舗に立ち寄る。

・カンパリてふ老舗(しにせ)のカンパリ冬ぬくし

スフォルツェスコ博物館ではミケランジェロ最後の未完彫像が印象的。

・抱かれし降架のイエス像冬の色

―ヴェロナ―

ローマ時代から中世にかけて構築された旧市街はアディシェ川が巨大な濠として東・北・西面を囲んでいる。

・冬の古都繞る河面のいぶし銀

ジュリエットがロミオを待った館もあり

・ロミオの見上げしバルコニー蔦枯れて

ローマ時代からの円形劇場（アレーナ）では毎夏二万五千人の観客を集めて開くオペラは世界的とか。

・ローマ人(ひと)どよめきしアレーナ冬陽中

―ベネツィア―

街の入口でバスから舟に乗り換えホテル横玄関に着く。夕食前の散策でサンマルコ広場へ。二十五日クリスマスのせいで人で一杯。広場正面の華麗なビザンチン様式の大聖堂に入る。降誕祭のミサの行列の詠唱が堂内にひびき、行列は堂中央を信者と参会者の間をすすんでゆく。行列は司祭を除き白いケープのような白い法衣である。列の真中の司祭は緋色の丈の高い帽子と法衣をまとっている。

・降誕ミサ司祭の緋衣のまぎれなき

星の綺麗な夜となりゴンドラに乗りカンツォーネを聴く。

・冬の星座回りゴンドラ回りけり

翌日ドゥカーレ宮殿ではティントレット、ヴェロネーゼを楽しみ、ベネツィア派の集大成をアカデミア美術館で楽しんだ。

―パドヴァ、ラヴェンナ―

この二つの町は明るく開放的な田舎の町。パドヴァはルネッサンスの魁ともいわれるジョットのフレスコ画のスクロベニ礼拝堂（ミケランジェロのシスティナー礼拝堂の下敷）があり、キリストの一代記、最後の審判の壁画、マドンナの天井画とジョットの最高の作品群がある。

・冬陽うすく壁画はフレスコのイエス伝

・「受胎告知」冬の回廊まぶしかり

ラヴェンナは、ビザンチン帝国の総督が置かれたこともありイスタンブールと共に最高のモザイック芸術がのこされている。

ロマネスク様式の素朴な構えのサンビターレ聖堂の壁と、天井のモザイック画の美しさ、さらに、同じ敷地の隅の西ローマ帝国最後の女皇ガラ・プラチディアの霊廟は小さな煉瓦倉庫風ではあるが、一歩中に入ると天井から壁迄緻密で華麗なモザイック画で埋められており、小さな窓からの淡い光にきらめき、他の宇宙にいるような畏敬と感動に浸った。

・冬の廟モザイックきらめく宙秘めて

―フィレンツェ―

ミケランジェロ、ラファエロ、ダ・ヴィンチを育て、西欧近代美術の源となったルネッサンスのうねりを三〇〇年にわたって発信しつづけた古都の風格が街の隅々まで沁みている。

花の聖母教会といわれる三色の大理石を配したドゥオモ（大聖堂）はロマネスク、ゴシックにはない解放感と華やかさを湛えている。

・ミサすすむ「花の聖母」の霜の朝

何といっても圧巻はルネッサンス美術では世界一のウフィツィ美術館である。残念ながらラファエロの室は修復中であったが、ミケランジェロ、ダ・ヴィンチをはじめしっかり楽しめた。とりわけボッティチェリの「ヴィナスの誕生」と「春」の実物には魅せられた。

・「ヴィナスの誕生」たたへむ冬の虹

―シエナ―

シエナに近づくと、中世の街がドゥオモ（大聖堂）を囲んで丘陵のうえに何世紀も置き忘れられていたような眺めである。

・焼栗を売るゴシックの寺院前

ドゥオモもフィレンツェの花の聖母教会のように三色の大理石が配され正面には彫像が多く置かれていた。世界一美しいといわれているカンポ広場は毎春石畳の上での勇壮な競馬で賑わうとのこと。

・馬と喚声かけぬけゆくや冬の雲

―アッシジ―

シエナよりも高い丘陵の上に城壁も残る中世の街でその西端に聖フランシスコ大聖堂の新・旧が斜面に建てられている。堂内はジョットを中心とする壁画でうまっている。ジョットの「小鳥達を説教する聖フランシス」チマブエの「聖母像」を見たあと、黒の僧衣に麻縄の腰紐・裸足にサンダルという、厳しい戒律を想い起させる姿の川田さんという日本からきている方が「キリストの一代記」を説明してくださり頭の下がる思いであった。和辻哲郎もほめていたシモネ・マルチエの聖キアラ（生涯聖フランシスを敬慕しつづけた聖女）の肖像画の前に立つと私が十一才の時に他界した母への思慕にも似た熱い想いが込みあげた。おそらく生涯ではじめてで最後のもの。聖堂を出ると眼下のウンブリアの野に冬霞がひろがっていた。

・聖キアラあらはれよウンブリアの冬霞

―ローマ―

歳末の朝ヴァチカン美術館へ。大変な人出である。幸い学校の西洋史の先生に随いて回ったので、膨大な展示品の中でポイントとなる作品を選んで見ることができた。何といっても最大の期待は最後に入ったミケランジェロのシスティナ礼拝堂である。堂内の天井画も壁画も今春何世紀ぶりに洗浄したばかりで、色彩が輝きをとりもどし堂内全体が躍動感に充ちていた。とりわけ正面一杯に拡った「最後の審判」には今迄のイメージを微塵に砕くダイナミズムがあり、翌日帰国の飛行機の中でも何かに当てられたような感じが残っていた。

・「最後の審判」冬の怒涛の寄するごと

「ローマの休日」の名所・旧蹟を回りスペイン広場にきた時は昏くなっていた。ここ迄きてカフェ・グレコ（カフェの大老舗）に寄らぬ手はないとの案内のすすめで、年代物のテーブル、椅子、絵画、置物の間を抜けて

一番奥のショパンが掛けた椅子のある室で、カプチーノでイタリア最後の夜を楽しんだ。

・冬の夜のさざめきショパンのかけし椅子

翌朝小糠雨の中をバスで空港に向う。巨大なうす緑のまりものような笠松がやさしく並んでいる。あのレスピーギもながめた……。

・御降やローマの松のうすみどり

絵について思う

新井　進

例年、年末より年初にかけて美術出版会社が発行する「美術年鑑」「美術名鑑」etcが書店の店頭に現われてくる。

ざっと一瞥すると、日本画家約一千名、洋画家約二千五百名の先生方が全国に散在されている。そして、各作家ごとに略歴、出身地、所属団体、個展数などに、一号当たりの評価額が記載されている。

今年の芸術年鑑によると、日本画部門では平山郁夫（芸大学長、以下敬称略）、洋画部門では牛島憲之、吉井淳二（いずれも文化勲章受賞）諸氏が最高評価額となっている。そして通説的に、日本画の方が数十パーセント洋画より割高のようだ。

一般に日本の長い絵画歴史を紐解くと、日本画の方が伝統的に長年月の時間と空間を経て現在に至っていること、また画法自体が洋画と異なり、重ね塗りや、訂正描きが困難なこと、洋画より習練がむつかしいこと、また人数的にも洋画の約四十パーセントであることなどがその原因かも知れない。

それよりも、日本画の繊細さが日本人の心にアピールするものがあると思う。

洋画はご承知のように、明治の文明開化と共に日本に入ってきたため、その歴史は百数十年にしかすぎない。その点、数百年の歴史を持つ欧州諸国に比べて、技術水準・傑作品・著名画家数では日本はどうしても及ばない。

しかし、欧州先進国への旅行機会の増大、留学の簡便化、主要諸国の文化交流の活発化などの理由から、欧州諸国の水準にひけをとらない位までわが国の技術水準は向上してきた。

戦後一時期、「抽象画」が海外より紹介されてブームとなったことを読者の多くは記憶されているものと思う。あの絵は一体何を表現し、何を見る者に訴えようとするのか不可解な面があって、見る者がその絵から個人々々で随分気ままに解釈してきた。

しかし歴史は繰り返えす諺のように、写実を中心とする「具象画」が再び復活してきた。フランス印象派（十九世紀後半）のモネ、コロー、ルノアール、セザンヌなどの絵画は何となく親近感があって、見る者にほのぼのとした情感をさそう。

少々横道にそれるが、ヌードについて言及したい。戦前は軍靴の高鳴りと共にヌードは姿を消し、更に戦中になると高名な画家がかり出され戦争画一色となる。戦後、欧米文化が流入してくると、女体のもつ妖しさ、美しさが強調されて、ヌードが次第に勢力を増してきた。芸大教課によると、新入生は約一年間、石膏人体からヌードに至るデッサンでしぼられる。それは、人体、特に女体のプロポーションを的確に把握し描写することが、その後の静物・風景画へ進むに当り基本的要請であるという。

次のようなことを言うと大変叱られそうだが、どうしても、欧米婦人の方が豊満で八頭身であるため、日本婦人よりも描き易く、且つできばえも良い（最近では若い人も背が高くなり欧米人に近くなってきたが）。

余り大ぴらに描いたものを誇示すると、女房族よりひんしゅくをかうため、ヌードを描いてきた時はひっそりと部屋の隅に仕舞うことにしている。

自分の属する群炎美術協会も、ミレー友好協会も大半が余り奇をてらわない、素直な表現をキャンバスに表現する作品傾向にあるので、来場者にはややものたりないかも知れない（抽象画のように考える必要がないため）。

昨平成六年末に麻布美術館の評議委員に選出されたが、今後とも見る人に何時までも印象の残る良い油絵を社会に供給し、大袈裟かも知れないが、日本文化の水準向上のために努めたい。

因みに、芸術名鑑によれば今年の作品評価は七千円アップの号当り六万円となった。我田引水かも知れないが、自分の作品評価の上ることは気持ちの良いもので、今後のはげみとなることは間違いない。大いに精進を誓う此の頃である。

村境の橋

浅野　正春

村境の裾花川の流れに　コンクリート造りの
立派な橋が架っている。
鄙びた山村の橋としては　桁外れに立派な橋で
少年はそれを密かに自慢のたねにしていた。
川の水は遥かの下を流れ　両岸は切り立った断崖で
これこそ「渓谷だ」とよぶに相応しい景観だ。
雪がすっかり溶けて　川の水が温むころ
村人たちが川原に集まって　田んぼに水を引くために
この谷川に石を積んで　堰を造り水を用水路に導く。
橋の上で石積みの仕事に見入っている少年の耳に
村の大人たちが話す大きな声と　石と石とがぶっかり合う音が
遠くからのこだまのようにカチン、カチンと響いてくる。
少年はもうすぐやってくる夏休みのことを想って
川遊びの光景を頭の中に描き　胸を高鳴らせる。
冬の雪に覆われた川原は真っ白で　橋の上に吹きすさぶ風は
万物を凍てつかすように冷たい。
冬休みも終って学校が始まり　やがて正月の十五日が来て
村のドンド焼きの夜が来る。
昼間のうちに村の若い衆が山から切り出して来た松を
川原の雪をどけたあとに立てて　周りに石を積んで固定する。
たそがれどきになると　村の大人たちも集まって来て

松の根元に積まれた焚き木に　朱色に燃える火がつけられる。
飾りの御幣が煙に巻かれて激しく揺れ
やがてそれも炎となって　華麗な舞いを舞いながら
燃え尽きて闇のなかに消える。
家々からもって来た門松や　注連飾り繭玉が火にくべられ
一年の無病息災を祈って　焚き火で餅を焼いて食べる
冬の日がとっぷりと暮れて　ドンド焼きの火だけを残して
背後の川原と断崖は　闇のしじまの中に眠っている。

戦争中の疎開先、長野県長野市茂菅の一番西のはずれの、隣の上水内郡小田切村との村境は日本の渓谷百選にも入っている険しいが引き込まれそうに美しい渓谷美を見せてくれる裾花川という谷川のほとりでのことである。

その谷川には、川面まで二十メートル以上もあるような高いところに頑丈なコンクリートの橋が架かっている。

昭和十年代に、あんな山奥にあんな立派な橋がどうして架かっていたのだろう、今考えても不思議な気がするが、私の疎開先の家からは百メートル足らずのところにあったこの立派な橋が、少年だった私の密かな自慢のたねだった。

裾花川をさらに溯ると、一番奥の人里が謡曲の「山姥」の舞台として有名な鬼無里村であり、源流はそれからさらに溯った戸隠山の西の麓あたりらしい。

辛いことや悲しいことがあったときは、この橋の上に来て涙を流し、嬉しいことがあったときは下の谷川に大声で話し掛け、東京が恋しくて堪らないときも、この橋の上から東京の方角の空を見上げた、私の少年時代の無二の親友の橋。

疎開していた頃が懐かしく、大学生時代に一度戸隠山に登った帰りにこの橋を見に立ち寄ってみたが、橋は昔どおりの佇まいで健在でいてくれた。
その後約四十年間一度も行っていない。
今年は、出来ればもう一度この少年時代の約二年間を過ごした山河を訪れてみたい。そして心の友だちのこのコンクリートの橋が今でも元気でいるかどうか確かめて来たい。

日本生残りの座標軸

上澤　準一

一、「変革」せねば「没落」あるのみ

消防車が行っても「水」が出ない。それが「阪神大震災」の傷を深くした。防災という考え方はあった。だが「阪神には地震が少ない」という「社会心理」、「社会運営の座標軸」には、基本的欠陥があり、すべてを甘くしていたのではないか。

われわれの生活が向上するとともに、外部・内部の生活環境／事業環境は日に日に変化している。世界的に変化している。だが、折角変化に気付いても、生活条件が一応、整っていると、周囲の環境条件を変えることを好まぬ習性が「人類社会」にひそむ。

一旦安定すると「変化に対する抵抗」や「保守主義」となって、「変化対応の新しい負担」を回避しようとする。

勿論、急激な変化対応には、幾多の「不都合」や「痛み」をともなう。これを回避しようという動きも、人類の貴重な「知恵」ではあろう。しかし、何れにせよ「環境変化」そのものを回避する訳には行かないのである。個人的利害と同時に社会的利害に絡む。

もし「変化対応」を怠れば、地表はことなく過ぎているようでも、次第に「地下」にストレスが溜り、ある時「地震」を起こす。恐るべき「つけ」を貯めないためにも、「社会的変化対応」つまりは「変革」が必要なのである。しかも「不都合」や「痛み」を最小限にするための努力、即ち「軟着陸」の工夫もこらさねばならない。

二、「変革」のため「新しい座標軸」構築を

「変革」と「軟着陸」の第一条件が「新しい座標軸」の構築である。戦後五十年、日本は、まず古くなった座標軸を新しいものに、しっかり転換しておくことが肝心である。

「都市防災」でいえば、「建築基準」や「都市計画」「国土計画」等の見直しとなる。「自衛隊の運営」「政府／自治体の連携」についても「気迷い状態」は許されな

い。「関東大震災」以来すでに八十年たらず、「日本海溝」や「相模トラフ」に蓄積された岩盤のストレスは、何時「南関東大地震」を起こしても不思議はないと考えるべきである。

三、日本をめぐる環境変化と厳しい課題

「阪神大震災」以上の厳しさで、われわれ日本人社会に「変革」を迫っている重要課題が二つある。その一つは「世界との係わり方」である。ここまで拡大した日本経済は、最早、「世界との係わり」なしでは生きて行けない。だがその「世界」はどうか。「世界人口の大爆発」、「地球環境の破壊」、「資源の枯渇」、「教育・医療の荒廃」、「マフィアの横行」、「民族／宗教紛争の拡大」など、どの一つをとっても一筋縄ではゆかない大問題を抱えている。しかも多国間にまたがり、刻々深刻化している。政治面だけではない経済／社会／文化／宗教その他、多局面にわたる。

その中で、日本が果たすべき「役割」が、「国連」においても、「APEC」においても、「北朝鮮核開発問題」や「WTO」においても、次第にはっきりして来ていることである。「海外進出企業」についても「企業エゴ」むきだしの「経営活動」はゆるされない。

もう一つは、日本自身の競争力の低下である。「市場経済化」という世界的潮流の中で、東南アジア・東アジアの台頭、就中「中国の経済的躍進」がある。さらに、米国の競争力の回復がある。日本は「円高」と「内外価格差」「バブルの崩壊／複合不況」そして「産業空洞化」による「雇用の停滞」が見込まれる。――総じて日本経済は「競争力低下」要因が重なって、気が付いたら「ナイヤガラの滝」、吸い込まれれば「破産・没落」の底である。いくら「共生の時代」だなどと云ってみても甘えになっては世界の誰からも相手にして貰えない。この数年日本は一種の「気迷い状態」にあったのではなかろうか。

「共生」の時代認識に立つなら、世界のなかでどう役立ち、どう貢献するか、日本としての、明確な「座標軸」を設定し、世界の認知と支持をえて、「再生」をはかるしかない。

決して「一人勝」でなく、「経済大国としての責任」

を果たしつつの「共生」でなければいけない。バラマキの「金権外交」や「金権支配」であってはならない。

ＯＤＡ（政府開発援助）で云えば、これまでの「ハード中心」の支援を脱却して、「人間尊重」や「スムーズな技術移転」、「人材育成」や「経営ノウハウ移転」など、知的支援のともなった「実のある支援策」でなければならない。

四、日本生き残りの「座標軸」

基本軸としては「世界との共生」であり「経済大国としてのリーダーシップ確立」であろう。そのための「変革の座標軸」として、私は次のａ、ｂ、ｃ三軸を提案したい。

（ａ）輸出立国から科学・技術／研究・開発立国へ

第一義的には、これしかない。「経済的競争力」を確保しつつ、世界人類に貢献し、良い意味でのリーダーシップを発揮できる「ニュー・ハイブリッド・パワー」は、やはり財力や資本力だけではない。資金力は勿論必要であるがプラス「研究・開発力」である。　そのためには、①基礎研究機関の整備充実、②大学等の老朽化研究設備の更新、③マルチメディアによる情報ハイウェイの早期確立、④企業における研究陣／研究・開発体制の充実、⑤特許等知的所有権の確立と効果的技術移転システムの構築などマクロ・ミクロの各レベルでなすべきことは山ほどある。

（ｂ）日本的経営から国際的ハイブリッド経営へ（国際的人材の育成）

ハイブリッドとは「色々な要素を混合した」「複合型」の意味である。人材育成となると、兎角「学校」に頼り勝である。がそれだけでは足りない。「資質／能力」の養成、向上には「専門知識・技能」プラス「体験的・実践的錬磨」と「人間的魅力の蓄積」が必要である。特に国際化の流れにそって、「海外派遣人材」「現地人幹部人材」について、各企業／各地方／国の各レベルで「実戦的トレーニング」のための研修設備の充実、講師陣の整備および「研修後」の「人事労務管理システム」の構築が不可欠である。「異文化インターフェイス管理」という新領域にも挑戦しなければならない。

営業や技術的人材のほかに、経営全般を通しての「経

営基本管理」や「危機管理」についても、重複型人材育成策を忘れてはならない。

「語学」や「パソコン／ワープロ」「健康管理」能力の養成については、海外／国内を問わず、当然の基礎能力として、実務研修システム、経歴開発プログラムのなかに組込まれなければならない。

（c）海外直接投資の推進

日本企業の海外進出、海外生産の拡大は「産業の空洞化」につながる――という懸念がある。少なくとも目先「日本の雇用」に重大な影響を及ぼすという見方は論理的である。

しからばどうするか。（a）の科学・技術／研究・開発立国に戻る。

具体策としては、①新技術・新製品の開発を進めること、②情報化・サービス化の潮流を捉え、③産業の新分野を開拓すること。農業、流通業など従来生産性の低い分野での生産性を上げること。以上三点に要約される。これが出来れば、海外生産を拡大しても、即「空洞化」とはならない。

のみならず、生産の海外シフトには空洞化を緩和する側面がある。さる1月1日の日経紙上で長銀総研副理事長の吉富　勝氏が指摘しておられるように「海外生産の増大は日本から高度で高機能の資本財や材料や部品の輸出を、海外生産が行なわれている国に向かって増やす傾向が強い。また連結決算でみて日本企業の利潤が増える。だから海外生産の増大は、円高の行き過ぎからくる空洞化を緩和さえしてくれる」のである。

さらに、技術移転が進むことにより、相手国の経済発展に寄与すると同時に、知的資産である「技術」「ノウハウ」の対価も日本企業に帰ってくる。

統計によれば、1993年末の日本の海外直接投資残高は、差引総額6、102億ドル、投資収益はプラス・マイナス差引403億ドル（94年予想／460億ドル）となっている。これらの数字は、これからの日本「生残りの方向」を示しているという意味合いで重要である。

円高の行き過ぎからくる「空洞化」にたいしては、「外資の流出」、「証券市場の空洞化」「物流拠点としての港湾・空港業務の流出」など警戒すべき事項は残る。こ

れらについては、日本の事業環境を魅力的にするため、「規制の緩和」や「税制の改善」などマクロの対応策は欠かすことが出来ない。いずれにしろ「3％台成長」に備え、変革のための「新しい物差、新しい座標軸の確立」が、「災害復興」とともに望まれる所以である。

もっとエネルギー教育を

森田　茂

石油危機も遠のいたかにみえる今、エネルギー教育の重要性を考えてみたい。問題がおこるとその大切さがよく議論されるが、平素、的確な情報に基づく対策がとられているかが常に問われるべきであろう。

エネルギーもその一つである。ともすると、行政や専門家まかせになり勝ちだが、石油や電気などのエネルギーは近代社会生活に欠かすことのできない以上、エネルギーへの正しい理解が要求されるのも当然といえる。生活のレベルや環境保全という基本的命題にも関係してくるエネルギーの教育に、学校やコミュニティでもっと力を注ぐべきではないだろうか。

〈エネルギー事情〉　歴史的にみると、農耕文化の時代の主なエネルギーは薪、第一次産業革命の時は石炭、自動車や航空機などの流通革命は石油により、精密機械や情報革命は電気・光の利用で可能になった。時代と共にエネルギーの質は変化しているが、エネルギーは社会を変革するともいえる。ここに、エネルギー教育の必要性の第一の点が考えられる。

申すまでもなく、世界の消費する一次エネルギーの90パーセントは、石油・石炭・天然ガスなどの化石燃料で占められている。これからも、これらの資源開発は続けられるだろうが、来世紀半ばには石炭以外は無くなる予想である。価格も高くなっていくと思われる。

わが国は、エネルギーの輸入大国。石油はアメリカに次いで第二位、石炭や天然ガスは第一位である。そのため、エネルギーの国際情勢が国民経済に大きな影響を及

ぼすことは、先のオイル・ショックも証明している。

したがって、これからはリスクマネジメントの視点から、世界のエネルギー事情の知識や洞察力がますます求められる。これが第二の点。

〈環境対策〉　わが国は環境先進大国であるが、化石燃料を使う限り大気汚染は進む。環境の影響には国境がないから、外国から酸性雨がもたらされたり、地球規模の温暖化が進んだりする。

そのために、環境と調和できるエネルギーがどうしても必要だが、まだ先でよいなどと、そうのんびりはできない。

確かに、太陽、海洋、河川、風や地熱などを利用したクリーンな自然エネルギーがそれにふさわしいし、いま技術開発はされているが、商業化には解決すべき技術的要素の外に、コスト的な課題も残っている。

しかし環境保護対策を進める上で、化石エネルギーの改質や有効活用に加えて、官民あげて、クリーンエネルギーの利用・普及に心掛ける時期がきている。これが第三の点。

さらに、今まで世の中の発展はエネルギーを大量に消費してきたが、これからは節約して社会を進展させる方法を考案する必要がある。すなわち省エネルギーの社会をどう構築するかがその決め手になる。産業は言うまでもなく、生活環境を見つめる上で省エネルギーの見地からの認識が肝心である。これが第四の点。

〈三位循環〉　すでに述べたように、経済、環境、エネルギーの三要素は相互に関係が深い。どちらかと言えば、現在は悪循環現象が見られる。社会の慣習、制度や活動が、エネルギー効率型で環境調和型に組み替えられて、はじめて悪循環が断たれよう。二十一世紀に美しい環境のもとで繁栄した文明社会を構築するために、それは不可欠な要素となるだろう。

そのためには、クリーンな再生可能エネルギーの加速的開発と国民参加の省エネルギーの推進が極めて重要なものであるが、地域社会にエネルギーをどのように適応させたらベストなのか、というソフトウエアの確立も肝要なことである。それゆえに、エネルギーおよび関連する総合的情報の教育が必要となってくる。これが第五の

点である。

国際化時代の深まりと共に、途上国の経済社会の発展は、従来の先進国と同じパターンをとるのではなく、地球環境対策を採り入れた新時代にあったクリーンなものが望まれるが、その際、エネルギーの輸入大国のわが国がエネルギーソフトの輸出でお返しすることも価値あるアイデアではなかろうか。

これからの国際貢献は金や技術だけではない。その核は知的貢献となるべきだと考えるからである。新しい文明社会を創り出すための一つの背景の役割を担うエネルギー教育は、国際化時代の重要な知的貢献にも役立つにちがいない。

朝鮮語と日本語

村田　孝四郎

朝鮮語を学び始めると、誰でも一様に驚くことがある。それは文法が酷似していることだ。例えば、①語順が同じである、②助詞がある、③主格助詞の「は」と「が」の区別がある、④一人称代名詞がしばしば省略される、⑤二人称代名詞に適当なものがない、⑥敬語がある、⑦はっきりした女性言葉がある、⑧「……ですが。」という言い切らない表現がある、等々である。

ところが、単語は違う。漢語を除くと同じものがほとんどない。人体を表す基本的な名詞や卑近な動詞にも同じものがない。また、発音も違う。朝鮮語や中国語には非常に強い有気音があるのに、日本語にはそれがない。朝鮮語や中国語には音節末に n と ng の区別があるのに、日本語にはそれがない。日本語は朝鮮語に比べて母音の数が少ない。日本語では有声音(濁音)と無声音

（清音）の区別がはっきりしているのに、朝鮮語にはそれがない。日本語では促音や長音がはっきりしているのに、朝鮮語でははっきりしない。日本語では音節が子音で終わることはないのに、朝鮮語では英語のようにたくさんある。

このように文法は瓜二つなのに単語と発音はまったく違う。これはどういうことなのだろうか。日本語の起源を考える時、このことがいつも大きなネックになるようだ。

私は日本語と朝鮮語の起源は同じではないと思う。私の考えでは、大昔の日本にはもともと言語があった。しかし、それは文法ももたない、きわめてプリミティブな言語であった。そこへ朝鮮半島から進んだ人達が入ってきて文法を教えた。そういうことではなかろうか。その証拠に助詞の一部に共通の発音がみられる。例えば、主格助詞の「が」は朝鮮語でも同じく「ガ」だ。また、方向を表す助詞「へ」（発音は「エ」）は朝鮮語でも「エ」だ。疑問を表す終助詞「か」はやはり「カ」だ。これは偶然の一致だとは思えない。

さて、次に漢字の発音を見てみよう。漢字は中国から直接に、また、朝鮮半島を経由して日本に伝来したと言われる。しかし、日本の漢字の音読みは現代中国語の発音よりも朝鮮語の発音のほうにはるかに近い。本家の中国では発音が変わってしまったのに、分家である朝鮮や日本に却って昔の中国音が残っているのである。これは面白い現象だ。なぜなら、英語やスペイン語でも同じことが言えるからである。昔の英語の発音が米語に残っていたり、昔のスペイン語の発音が南米諸国のスペイン語に残っていたりするのである。

漢字を日本語で音読みすると、中国音や朝鮮音と一部共通する規則が見られる。例えば、日本人が区別するのが苦手の音に n と ng があるが、音読みして「ン」で終わるもの は中国・朝鮮音では「n」と発音され、「ウ」（たまに「イ」）で終わるものは中国・朝鮮 音では「ng」と発音されるという、ほとんど例外のない規則がある。少し例を挙げよう。

ナンキン（南京）は音読みではナンキョウだから、

Nan-king（または Nan-jing）

ホンコン(香港)はコウコウだから、
Hong-kong（または Xiang-gang）
インチョン(仁川)はジンセンだから、
In-chon（または In-cheon）
ピョンヤン(平壌)はヘイジョウだから、
Pyong-yang（または Pyeong-yang）
といった具合である。

ところが、不思議なことに日本語の音読みと朝鮮音との間には規則性があるのに、中国音との間にはそれが見られないという漢字がたくさんある。次にそれを見てみよう。

日本語の音読みで「ク」で終わる単語は朝鮮読みでは「ㄱ」(正確には終声子音といわれる k の音)で、日朝一致しているのに、中国読みはそうではない。日—朝—中で比較してみると、

漢字	音読み	朝鮮読み	中国読み
悪	あく	アㄱ	オー
握	あく	アㄱ	ウォー
育	いく	ユㄱ	ユィ
屋	おく	オㄱ	ウー
億	おく	オㄱ	イー
各	かく	カㄱ	コー
角	かく	カㄱ	チュエ
拡	かく	ホㅋㄱ	クォ
画	かく	ホㄱ	ホワ
革	かく	ヒョㄱ	コー
格	かく	キョㄱ	コー
核	かく	ヘㄱ	コー
覚	かく	カㄱ	チュエ
較	かく(こう)	キョ	チアオ
隔	かく	キョㄱ	コー

次に、音読みで「ツ」(たまに「チ」)で終わる漢字は朝鮮音では「ㄹ」(正確には終声子音といわれる l の音)で終わる。それはみごとに一致している。ところが、中国音は違う。今度は思いつくままアトランダムに挙げてみよう。

漢字	音読み	朝鮮読み	中国読み
一	いつ	イㄹ	イー

吉	きつ	キル	チー
結	けつ	キョル	チー
月	げつ	ウォル	ユエ
七	しち	チル	チー
室	しつ	シル	シー
出	しゅつ	チュル	チュー
鉄	てつ	チョル	ティエ
日	につ	イル	リー
八	はち	パル	パー
発	はつ	パル	ファー
必	ひつ	ピル	ピー
物	もつ	ムル	ウー
律	りつ	リュル	リュー
列	れつ	ヨル	リエ

最後に、いま日本ではやめてしまった旧かな遣いと比較してみよう。旧かな遣いの音読みで「フ」で終わるものは朝鮮音では「プ」(正確には終声子音といわれる p の音)で終わる。これも日朝みごとに一致している。旧かな遣いをやめたことで、こういう関係が分からなくなってしまったのは残念なことだ。

漢字	音読み	朝鮮読み	中国読み
押	あふ	アプ	ヤー
葉	えふ	ヨプ	イエ
合	がふ	カプ	ホー
及	きふ	クプ	チー
吸	きふ	フプ	シー
泣	きふ	ウプ	チー
急	きふ	キプ	チー
級	きふ	クプ	チー
給	きふ	クプ	ケイ
協	けふ	ヒョプ	シエ
業	げふ	オプ	イエ
挿	さふ	サプ	チャー
雑	ざふ	チャプ	ツァー
拾	しふ	チプ	シー
習	しふ	スプ	シー

このように見てくると、日本の漢字音は現代中国音よ

りも朝鮮音にずっと近いことが分かる。つまり、それだけ朝鮮語は日本人にとって学びやすいということにもなる。だが、韓国や北朝鮮では漢字の使用をやめてしまったので、今では筆談も難しくなった。先日、教養のある若い韓国人女性が「鈍行(各駅停車)は韓国語ではワンヘンという」と言うので、その漢字を聞いたところ、知らなかった。後日、今度はやはり教養のある韓国人の中年男性に聞いてみたが、やはり漢字を知らなかった。ワンヘンの漢字は「緩行」である。

ドイツの戦後五十年序説

鳴澤　宏英

一、はじめに

五十年前、日独両国民は相前後して廃墟の中から立ち上がった。以来長い道のりを経て、両国はそれぞれ世界で第二、第三位を占める経済大国となり、米国とともに世界経済を支える三極を形成するに至った。

両国がこの間たどった軌跡はむろん同じではないが、他山の石ということもある。わが国の戦後五〇年の歩みを想い浮かべながら、かつての盟邦の足跡を後づけてみるのも無意味ではあるまい。

以下はドイツの戦後史と銘打つにはほど遠いものである。わが国と対比して示唆的と思われるテーマのいくつかを、かなり恣意的に拾い上げてみた。それでも半世紀という歳月をカバーするとなると、かなりの長尺物となり、与えられた紙数を大きく超過する。といって単に各項目のシノプシスを羅列するのでは物足りない。とりあえず序説と題し、次回、さらにはその次を期待することとした。

二、分割占領と分断国家

ドイツの戦後は連合国（米英仏ソの四ヵ国）による分割占領から始まる。米国の単独占領下に置かれたわが国との明暗の差はきわめて大きい。もっともわが国にも、旧ソ連による北海道の占領という危険があった。それが

六〇万俘（ふ）虜の抑留、強制労働という高価な代償と引き換えに回避されたことは、今や史実として確認されている。とにかく分割占領を免れたことは不幸中の幸いであった。

一九四六年三月、当時のチャーチル英首相は、米国のフルトン市における演説の中で、初めて鉄のカーテンの存在を公式に認め、世界の耳目を聳（しょう）動させた。長い冷戦時代の幕開けである。その二年後には冷戦を象徴する事件が、ドイツを舞台として勃発する。陸の孤島と化した西ベルリン地区の旧ソ連軍による封鎖である。これに対抗して西側連合軍による物資の空輸作戦（「空の橋」Luftbrückeと呼ばれた）が開始され、三三二日の長きにわたって、二二〇万市民の命綱となる。ベルリン市民は連合軍に対する感謝の意を表すべく、テンペルホーフ空港の入口に記念碑を建立した。高くそびえる石塔はあたかも虹のごとく湾曲し、西方の空に伸びている。この飛行場は今は民間航空にほとんど使われていないが、記念碑は分割占領時代を物語るたしかなあかしとして市民の心を捉え続けている。

分割占領は翌一九四九年、東西に分断されたふたつのドイツの建国に引き継がれる。そのはざまにあって西ベルリン（東ベルリンは東独の首府となる）は、経済的には西独の一部でありながら、法的にはその主権が及ばず、連合国が潜在主権を保持したままその行使を市当局に委譲するという、国際法上前例のない統治形態が現出したのである。この異常状態の解消は一九九〇年の東西ドイツの統一まで待たねばならなかった。

ここで分断国家ならではの、ふたつの事件を挙げておこう。ひとつは一九五三年の東ベルリン暴動である。圧政と労働ノルマの桎梏（しっこく）に反発した建設労働者が実力行使に立ち上がり（六月十七日）、それが各地に波及する。西ベルリン市民は側面的に支援すべく一大デモを組織し、東西を分けるブランデンブルク門に向かって抗議行進を行なった。それを記念してこの大通りは「六月十七日通り」と改名され、また当日は「ドイツ統一の日」（国民の祝日）と定められた。その性格は「統一を祈念する日」というべきもの、これが名実ともに記念日になるのは一九九〇年十月三日である（祝日も当然

振り替えられた)。

もうひとつはベルリンの壁の構築(一九六一年八月)。東西ドイツの国境線に沿って長く延びた壁、そして鉄条網と地雷原ほど東西対立を象徴するものはなかった。なぜこうした非常手段がとられたのか。自由と経済の豊かさを求めた東から西への労働力の流出は後を絶たず、放置すれば東独経済が直撃されるばかりか、体制そのものへの信頼感まで動揺することが憂慮されたからである。ついでだが大量かつ組織的な外人労働力の旧西独への流入はベルリンの壁を契機として本格化する。それが西独経済の成長を支える重要な柱のひとつとなったのは公知の事実である。

三、K・アデナウァーとW・ブラント

旧西独建国以来四五年余の期間に宰相(Bundeskanzler)の座についたのは僅か六人。わが国の戦後二四人の首相とはいかにも好対照をなしている。さらに珍しいのは総選挙の結果首相が交代した例は皆無なことである。

六人の宰相のうちとり上げたいのは、初代のK・アデナウァー(CDU―キリスト教民主同盟の党首)と最初の社民党首相となったW・ブラントのふたりである。国民から親しみと畏敬の念をこめて〝Der Alte〟(〝じいさん〟の意)の愛称で呼ばれたアデナウアーは、ナチス時代、反政府行動を理由に投獄された経験がある。連合国の意向に逆らってみずからの主張を通す気骨の士、また徹底した反共主義者であった。その点吉田茂元首相と相通ずるものがある。宰相の座にあること一五年、一九六四年にエアハルト経済相(経済の神様との高い評価を得た)に後を託すとともに、あっさり政界を引退した。またフランスのドゴール大統領とは肝胆相照らす仲、独仏間の「永遠の和解」ができたのも両指導者に負うところが大きい。

W・ブラントの一生はさらに波乱に富み、数奇な運命の糸で貫かれている。一九一三年、北ドイツの古い町リューベックに未婚の母の子として生まれた彼は、地元の高校を卒業し大学入学資格試験(Abitur)もパスしながら、進学を放棄し、政治の世界に身を投じ、当時の社会民主党に入党する。ヒトラーが政権を掌握し(一九三三年)、野党への弾圧が始まるや、党中央の指令により、国外で

の党活動にあたるためひそかに出国する。行先はオスロ（ノルウェー）である。第二次世界大戦中同国がドイツ軍に占領されると、進んで反ファシスト地下運動に参加した。戦後ノルウェーの新聞記者としてニュールンベルク軍事法廷（戦犯裁判）の取材に当たるが、一九四九年、K・シュウマッハーらとともに社民党を再建。のちベルリン市会議員、ベルリン市長を歴任する。その間党首に選ばれ、一九六六年の大連合（保守・革新の連立内閣、「黒と赤の連合」と呼ばれた）には、副首相格の外相として初入閣を果たす。一九六九年、大連合が内部分裂から崩壊し社民党（SPD）と自由民主党（FDP…中間政党）との連合（二／三位連合）が成立すると、党首として宰相の座につく。初の社民党首班内閣の誕生である。

彼の首相辞任と事実上の政界引退の背景はまことに劇的である。一九七四年、首相の政務担当秘書官が、ことあろうに旧東独から送りこまれたスパイであることが明るみに出、ドイツはもちろん世界をあっと言わせた。問題のスパイの名前（G・Guillaume）を冠してギョーム事件と呼ばれるこの政治スキャンダルは、考えてみれば分断国家なるがゆえに起こり得た異例のものである。外見、言葉、生活様式など表向き全く違和感のないことを巧みに利用して西に潜入した彼は、やがて妻君とともに社民党に入党。十数年かけて歩一歩党の階段を昇り、最後に手に入れた念願のポストが政務秘書官である。ここは国家の最高機密を含めてあらゆる重要書類が通過するから、外国のスパイにとってこれ以上のポストはあり得ない。側近中の側近を充てるこの地位に旧東独スパイを登用したとなれば、首相の責任はとうてい免れない。それが引き金となってブランドは事実上の政界引退に追い込まれ、シュミット蔵相が後を襲う。わが国を毎年のごとく訪問し、なじみの深いH・シュミット（H・Schmidt）そのひとである。

四、東方外交

W・ブラントを語る場合、どうしても言及しなければならないのが東方政策（Ostpolitik）である。首相就任の翌年（一九七〇年）ポーランドを訪問した際、ワルシャワのユダヤ人記念碑の前で、雨の降りしきる中、跪いて祈りを捧げた。当時旧西独国内では、あまりにも屈辱的

との批判もあったが、この率直な姿勢が東西関係修復への道を開き、両独基本条約（一九七二年）、ヘルシンキの全欧安保会議（ＣＳＣＥ－一九七五年）につながっていくのである。

ブラントの灯した東方外交の火は、Ｈ・Ｄ・ゲンシャー前外相（ＦＤＰの党首）に引き継がれる。旧東独出身の彼は一八年の長きにわたって外相の座にあり（政権は一九八二年保守・中道に移ったが、ＦＤＰは一貫して連立与党の地位にある）、旧東独のみならず旧ソ連東欧圏との柔軟な宥和外交に政治生命をかけた。こうした地道な努力の積み重ねが、実は東西ドイツ統一への原動力となったのである。

五、社会民主党の歴史的転換

一九六六年に政権参加を果たす社民党は、それに先立つ一九五九年の党大会で、階級政党から国民政党への路線転換を果たす。現実路線を謳った新綱領は、大会開催地の名をとってバート・ゴーデスベルク綱領と呼ばれる。

戦後の早い時期にこのような転換が行なわれたについては、ドイツをめぐる内外の環境が大きく影響している。旧西独は冷戦とともに東西両陣営対立の第一線に立たされ、しかも対峙する当面の敵が同じドイツ人国家というのは、たしかに異常状況であった。その旧東独では、占領軍（旧ソ連）の強力な指導の下、かつての社会民主党（戦前は同じ政党であった）は共産党に事実上吸収され、社会主義統一党（ＳＥＤ）が誕生する。東側では社会民主主義は消滅したのである。旧西独の社民党がみずからの存在を主張し続けるには、穏健な現実路線に移行せざるを得なかった。加えて英国を初め西欧諸国では革新政権が相次いで登場したという外的事情もある。

そうした流れの中で旧西独は、一九五六年早くも再軍備（ただし国土防衛に限る）、徴兵制の導入、共産党の非合法化などの改革を実行している。内外の情勢が階級政党としての社民党の存立基盤を切り崩していったと言える。路線転換は必然の選択だったのである。ただ社民党が一枚岩として動いたわけではなく、とりわけ党内左派の一部が逆に過激化したのも見過し得ない事実である。三五年遅れてわが国の社会党もようやく変身するが、日独両国のおかれた状況は大きく違っていたことを知らね

ばならない。（未完）

〈あとがき〉次の機会には、戦争責任と戦後補償問題へのドイツの対応、経済の奇跡といわれた戦後復興の成功物語、東西統一とその後、国連安保理の常任理事国入り問題などを取り上げるつもりである。

『脱・帰国子女』を出版しての前後譚

荘司　忠志

私は一九九四年、『息子たちは「脱・帰国子女」』と題する単行本を出版した。

内容は、三人の息子が幼稚園から大学院まで学んだギリシャ、イギリス、シンガポール、アメリカでの教育の記録であり、欧米の学校教育の紹介である。

発端は一九六九年だった。私はアテネに駐在することになり、妻と幼い息子三人を連れて、未知の国に赴任した。当時のギリシャと日本には、日本からの船舶輸出以外には、さしたる物資の交流もなく、アテネの日本人社会も、百三十人ほどの小さなものだった。

赴任してしばらくしてお正月になり、日本人同士の新年会が持たれた。この席で「アテネ日本人会」が発足した。私も幹事の一人に選ばれたが、希望して教育担当にしてもらった。当時、日本人家族から三十人ほどの子供が、現地アメリカン・スクールに通学していた。私は以前、シンガポールに駐在したことがあり、シンガポール日本人学校の創立に少し関わったことがあったので、アテネにも日本人学校を作ろうとひそかに考えたのである。

この準備段階として、まず日本語補習学校を創設し、アメリカン・スクールの校舎を借用して、毎週二回の授業が始まった。アメリカン・スクールは非常に協力的で、学校の休みである土曜日にも、補習学校のために用務員を出勤させてくれたし、冬には暖房も入れてくれた。

一年の準備期間を経て、補習学校は計画通り、全日制アテネ日本人学校に発展した。

二人の先生と二十一人の生徒を得て、小さな学校が始められたのである。協力的だったアメリカン・スクールの生徒を奪う形にはなったのだが、寺小屋のような日本人学校に不安を感じ、アメリカン・スクールから子供を転校させることをためらっていた日本人家族も、やがて続々と子供たちをアメリカン・スクールから日本人学校に転校させることになる。

ところが、偶然のチャンスからイギリス系学校に入った私の長男も、アメリカン・スクールにいた次男、三男の二人も、新設された日本人学校への転校を希望しなかった。私も妻も、とくに確たる教育方針もなかったので、息子たちを日本人学校に転校させないままだった。やがて長男はイギリスへ、弟たちはアメリカの上級学校へ去っていくことになる。

この辺の事情は、私の「脱・帰国子女」に、さらっと触れている。

＊

私はアテネに駐在して、外国での教育に特別の関心を持ち始めて以来、機会あるごとに各地の日本人学校を見て回ったし、ヨーロッパ、アジア、アメリカの学校を訪問し、授業を参観したり、資料を集めて比較研究することを趣味としてきた。

その一貫として一九九三年秋、私は妻とともに、行けども行けども果てしない紅葉に埋もれたニュー・イングランド（アメリカ）を三週間にわたりドライブした。訪れた大学は二十以上におよび、たくさんの資料を集めてきた。

学校を訪ね歩く際、私はどこでもまずＡＤＭＩＳＳＩＯＮＳ　ＯＦＦＩＣＥ（入学事務所）に直行する。アメリカの高校や大学の入学事務所は、日本には例のないユニークな存在で、その機構と役割は独特であり、重要な部門である。日本のような毎年、全国的に一斉に行なわれる入学試験はなく、通常は九月に始まる新学年に対し、その年の一月とか二月の入学願書提出の締切り期限にむかって、全国から、世界中からの願書が送られてくる。それとは別に、入学担当スタッフは積極的に、優秀な学生を求めて、世界中の高校や中学校を訪問し、自分の学校をＰＲし、同時に入学志望者の面接を行なう。

アメリカの私立大学は、高額な授業料を徴収しながら、別途莫大な奨学金を予算としている。入学希望者は、入学願書の成績や論文などの評価で、合格の可否を大学側から決められるものの、学生側は、大学側の用意する奨学金の多寡で大学を選ぶことが多い。このため、希望する一流大学に合格できても、卒業するまでの資金的保証が得られなければ、奨学金を約束してくれる第二志望の大学を選ぶことになるケースが多いのである。

一方、大学側としては、要求する成績を満たし、さらに資金的に十分問題のない富裕な学生がいちばん歓迎できる。だが、思うようにはいかない。この辺を総合的に検討判断するのがアドミッション・オフィスであり、アドミッション・オフィサーである。

アドミッション・オフサーには忘れられない人がいる。

ボストンから車で二時間、コネチカット川の流れる村のノースフィールド・マウント・ハーモン高等学校を訪れたときのことだ。かつて二人の息子が学んだこの学校を訪問するのは、十数年ぶりのこと。そこで日本語の出来るアドミッション・オフィサーのヤンさんを紹介された。彼は中国人で三十二歳。北京大学を出て、東京大学大学院で国際政治を学び、しばらく東京のアメリカ系投資銀行で働いた後、ハーバード大学院、タフト大学院にも学んだ青年である。

ヤンさんの仕事は毎年数回、アジア各地に出張し、学校のPRをし、入学希望者と面接し、優秀な生徒を募集することである。私の息子たちがこの学校に学んでいた頃は、ほかに日本人は二人しかおらず、他のアジア系の生徒もほとんど在籍していなかった。しかし、私たちが訪れた一九九三年秋には、ヤンさんたちの努力も実りつつあったらしく、千四百人ばかりの学校には日本人を含む四十人ほどのアジア人生徒が学んでいた。

ヤンさんは近く、学校との契約も切れるので、香港に移り、ビジネスの世界に転進するらしい。すでに日本やアメリカ社会を十分に学び、経験したからであろう。

なお、ノースフィールドのようなプレップ・スクールには、アメリカの一流大学をめざす男女の生徒が集まり、寮生活をしながら、四年間の高校課程を学ぶ。

*

各地の大学で、古き時代の日本人の足跡に出会うのも喜びだ。

例えば、マサチューセッツ州のアムハースト大学に寄った際、新島襄がこの学校に居たことを知った。同志社大学を創立したこの人は、アンドオーバーの高等学校を卒業して一八六七年、アムハースト大学に入学している。それを私は卒業生名簿をチェックしていて見付けた。

この大学は入学事務所の入口の壁に、毎年百年前に入学した、新入生全員の写真を掲げられている。私が行ったときは一八八三年の新入生の写真があり、この年一年間、その写真を掛け続けるそうだ。となると、新島襄の写った写真は、一九六七年の一年間、ここに掛けられていたのであろうか。

ちなみに、アムハーストの近くには、マサチューセッツ州立大学、ハンプシャイアー大学、それに女子大学として名門のスミス・カレッジと、マウント・ホリヨーク大学があり、これらで「FIVE COLLEGES」を形成している。

これら五つの大学の学生は、自分の属する大学の講義のほか、他の四つの大学の講義を聴講し、そこで単位を取得すれば、自分の大学の単位として認めてもらえる。五つのどの図書館も自由に使える。五つのキャンパスは定期バスで結ばれてもいる。

最近、京都の私立大学の間でも同じような試みが始められているし、東京でも計画がある。

慶応義塾大学の故池田潔教授は、イギリスのパブリック・スクールで学んだ経験から、「自由と規律」という名著を残している。私の長男が同じパブリック・スクールを卒業したこともあって、とりわけこの名著を思い入れ深く読んだが、この本と息子の縁から、私はいくつかのパブリック・スクールを訪問する機会を得てきた。

その後、アメリカでもたくさんの高校や大学へ行き、調べたものだが、それらを通して、むかし日本にあった旧制高等学校について考えさせられた。

日本の旧制高校は、イギリスのパブリック・スクールを模範にして作られたといわれる。しかし、私の得た知識や感触では、イギリスでなく、アメリカのリベラル・アーツ・カレッジに日本の旧制高校が生きているように

思える。

本人に会ったわけではないが、香港出身の歌手兼タレントのアグネス・チャンが著した「ツバメの来た道」にも感心した。

彼女は芸能活動の合間を利用したり、一時活動を中止して、日本、カナダ、アメリカの大学で勉強している。主に学んだのは教育問題で、スタンフォード大学では「日米高等教育の比較研究」で博士号を取得している。「ツバメの来た道」は「中央公論」に連載したものを単行本にしており、彼女の生い立ち、日本でのデビュー、その後の歌手活動を描いている。彼女自身アカデミックな人なのであろう、すばらしい本になっている。

私の夢は、いつの日か、教育研究でアグネス・チャンの域に迫ることである。

＊

アメリカにはハーバードやエール、プリンストンなどの総合大学とは別に、リベラル・アーツ・カレッジが多くある。長年トップランクを保っているリベラル・アーツ・カレッジにはアムハースト、ウィリアムズ、スワーズモア、ウエスレヤンなどの小規模の大学がある。高等学校からこれらリベラル・アーツ・カレッジで4年間学び、その後、総合大学のプロフェッショナル・スクールである法律学校、医学校、ビジネス・スクールや他の大学院で学ぶ。リベラル・アーツ・カレッジでの勉強は、一部は大学院への準備でもあるが、一般に高等学校の延長であり、優れた教養学部なのである。十八歳前後から二十一、二歳くらいの若者たちが、専門教育とは別の歴史、哲学、理学、コンピューター、数学、基礎経済、美術などの課目を深く学び、読書、スポーツ、友情、思索に青春の一時期を過ごし、自分を見詰め、将来を設計するのである。　こうしたリベラル・アーツ・カレッジやアイヴィー・リーグ大学への進学は競争激甚だが、その準備学校としての全寮制高等学校＝プレップ・スクールがニュー・イングランドに散在している。これらプレップ・スクールはイギリスのパブリック・スクールによく似ている。しかし、日本では消え去った旧制高校は、いまではアメリカ東部に古くからあるリベラル・アーツ・カレッジが最も酷似しているのである。

プレップ・スクールやリベラル・アーツ・カレッジのほとんどは、喧騒の大都会を離れた、静かな町や村にある。今日のアメリカ社会の病魔である麻薬、セックス、暴力、殺人、貧困などから、遠く隔離されたこのような特権階級の若者たちが、温室育ちで実社会を知らずに、どうして指導者になってゆけるのだろうか。もちろんそのような危惧や批判は長い間、これらの学校や学生に向けられている。そうはいっても、こうした学校のキャンパスで行き交う若者たちは、家庭や金銭に恵まれ、健康でそのうえ秀才ばかりだ。実際に、プレップ・スクールからこれら良質の大学や大学院を経た人たちが、アメリカの知的エリートを形成しているのである。

このようなプレップ・スクールにはフィリップス・アカデミー、ディアフィールド、ホッチキス、ローズマリーチョートなどがある。

＊

ここ三十年来、日本企業の海外進出に伴い、多くの駐在員やスタッフが海外に赴いているため、そこに「帰国子女問題」が生まれ、論じられてきている。

そんななかで、わが家の場合は「帰国しない子女」の問題を抱えている。もっとも息子たちは三人ともすべて学校を終え、アメリカやシンガポールに職を得て、独立した。だから、今や「問題」はないのであるが。

確かに、企業のスタッフが海外勤務を命じられ、赴任していく場合、子女の教育は深刻である。現地に日本人学校があればまず安心だが、それで事がすべて解決するわけではない。

一方、せっかくの機会だからと、外国の学校で子女を学ばせる家庭も増えてきている。その延長線で、子供たちは外国の学校を卒業し、そのまま外国で働いている若者も多い。

私はかつてアテネで、日本人学校の設立運営に深くか関わりあったが、結果的に自分の子供たちはイギリスやアメリカで学ばせた。そのことが幸せだったかどうか息子たちと話し合ったことはない。息子たちから親が批判されたこともない。

そこで私が思うのは、「帰国子女」と「帰国しない子女」の問題である。

近年、多くの若者たちが主としてアメリカに留学している。若いうちに異文化を経験することは良いことだ。彼らがどのような成果を得ようとも、感受性の豊かな若き日、外国と自分の育った国とを比較できることは、将来必ず役に立つのである。こうした日本の若者たちが外国の地に、社会に、ビルト・インされて、日本との架け橋の役割を担ってくれるよう切に望みたい。「帰国しない子女」も洋々たる将来があるし、期待される像だと思うからだ。

さらに、私の趣味としての海外教育の研究が、いつの日か若者たちの参考になることを希望する。

外国の知の殿堂を巡って

中川　十郎

(1) 全学生の1/3を占める外国人留学生の教育に力を入れるイリノイ大学

一九三年夏、語学研修学生三名を引率し、一ヶ月ほどイリノイ大学アバナシャンパン校に滞在した。宿舎は大学院生用の寄宿舎で、メードが毎日タオルの取り換えと掃除に来てくれ、日本のちょっとしたホテルも顔負けのサービスの良さで、アメリカの大学の設備の良さに感心した。

食堂はバイキング方式で、その清潔さと安くて豊富な食事はとても日本の比ではなかった。地下にはコインランドリー、卓球台、ヘルスクラブが完備し、健康管理も行き届いており、アメリカの大学の学生に対するサービスの良さを日本の大学も見習うべきだと痛感した。

アバナシャンパン校はイリノイ州立大で、学生総数三五000人。うち三000人が世界各国からの留学生だと聞き、

びっくりした。わたしの奉職している大学は中京地区では外国人留学生数が一～二位といわれてはいるが、それでも留学生は、総学生数二〇〇〇人中、約2％、二〇〇人内外である。日本では皮相的なアメリカ教育制度の批判が多いが、財政的には決して豊かとはいえない州の予算を使って、実にこの大学の学生三人に一人の外国人留学生の教育に力をいれているのである。

この現状を見て、私はアメリカの寛大さと親切に強く打たれた。これら外国人留学生は将来出身国のエリートとして国家建設に活躍するであろう。かれらはアメリカの厚意を終生忘れることなく、自国とアメリカの友好と交流のきずなとして恩返しするだろう。

ひるがえって、わが国の現状を見ると、中曽根元首相の外国人留学生二〇万人受け入れ計画はいまだに五万人にも達していないという。年間一兆円以上にも上るＯＤＡ（政府開発援助）は、いたずらにハード機器や大規模な土木工事が中心で、必ずしも現地の要望に応えているとは思えず、むしろ日本側の関係者や業者の利権がらみの不正な談合の実体が最近明るみに出ている。惰性的なハード中心の援助は、もう、そろそろ卒業し、世界の未来を背負う若者の教育や、文化交流などソフト面の援助に重点を移すべき転機に来ているのではないだろうか。

―知の殿堂、大学図書館―

蔵書六〇〇万冊を有するというアバナ校の図書館は、全米有数といわれ、図書検索システムは、すべてコンピューターで制御され、大学図書館にない本は州や連邦図書館まで検索してくれる。一ヶ月の大学滞在中、私は毎日この図書館に通ったが、夏休みでも朝の八時から夕方五時まで毎日開館しており、外国からの語学研修生も含め、われわれ部外者まで、図書館を自由に利用できるサービスの良さは日本の比ではない。この図書館は学期中は大学学部生は朝八時から深夜十二時まで、大学院生は午前二時まで使用できるのを知って、日本とのあまりの違いに驚いた。

毎朝私が通った図書館の入口に刻まれていた次のことばには教育の真髄を教えられた気がして、私は終生忘れられない強烈な感動を受けた。

The whole world here unlocks

the experience of the past
to the Builders of the Future.
The Hope of Democracy
depends on the diffusion of
Knowledge and Wisdom.

ここでは　全世界が
未来の建設者たる諸君に
過去の経験を開け放っている
民主々義の将来は
知識と知恵の普及にかかっているのである

（筆者訳）

（2）理論と実学、産学協力計画でユニークな教育をするカナダ、ビクトリア大学

　四年八月、一ヶ月滞在したカナダのビクトリア大学はブリティシュ・コロンビア州立でバンクーバー島の州都、ビクトリアにある。緑豊かで、目もあざやかな色とりどりの花が咲き乱れているビクトリアは、一年中気候が温暖で、カナダの金持ちが退職後、余生を送る土地でもあり、人々はやさしく、親切な人が多い。

　ビクトリア大学は学部五年、大学院三年という世界でもユニークな大学だ。アジア・太平洋へのカナダの玄関口という地の利を生かし、アジア太平洋学部を有し、この学部では約1000人の学生が、中国語、日本語、インドネシア語のいずれかを学び、アジア地域の勉強にいそしんでいる。学生は学部四年終了後、さらに10ヶ月間、中国、日本、インドネシアの三ヶ国のいずれかの国の企業で研修し、卒業論文を書き、五年で学部を卒業するという、めずらしいシステムを取り入れている。

　さらに大学院に進学する学生も二年終了後、10ヶ月間、企業研修し、修士論文を作成することを義務づけられている。

　同大学では、このシステムをCooperative Program（産学協力プログラム）と称し、理論と実務、研修の理想的な教育方針をとっている。

　一方この大学は、「アジア・太平洋研究センター」を有し、カナダのアジア・太平洋諸国との政策研究に特化して実績を挙げている。わたしが学んだ東京外国語大学でも、これほど徹底した語学、地域研究はされていなかっ

たと思う。

国際化や国際協力を掛け声高く喧伝するだけで、実質の伴わない日本の国際教育の現状を顧みて、わが国の国際教育の後進性と遅れは寒心に耐えぬものがある。

（3）外国人英才学生スカウト教育

ーフランスのある情報大学院の例ー

九三年八月末から九月初めにかけ、わたくしは中国科学技術情報研究所に招待されて、上海と北京で、ビジネス競合情報について講演を行なった。上海で私の英語のスピーチを中国語に通訳してくれたのが、素晴らしく聡明で才色兼美のB嬢であった。

九四年三月フランス・ニースで開催されたフランス競合情報専門家協会の国際シンポジウムで研究発表のためニースを訪れたわたしは、このB嬢がニースの近くのフランス情報大学院に留学していることを知っていたので、同嬢に連絡をとり再会した。その時、驚くべきフランスの対外文化外交の実情を聞かされ、わたくしは、呆然とした。

B嬢はアメリカのR大大学院、オランダのA大学院ほか二校、合計四校の大学院の奨学生試験に合格。A大大学院へ留学手続き中に彼女の勤務先へフランスのT情報大学院から突然国際電話が飛び込んだ。二人の教授が一時間半にわたり、いろいろと電話で質問をした後、その場で留学生ならびにアシスタントリサーチャーのダブル奨学金を支給するからと勧められたので、この大学院へ留学することにしたという。

ことの成り行きに対する彼女の説明はこうである。件のフランスの情報大学院は五〇％の資金援助をFテレコムから受けており、世界各国の情報通信関係専攻の学生をこの大学院に留学させ、将来、フランス情報通信関連商内にも活用せんとするものの如くである。そのターゲットのひとつが中国であるらしい。この大学院は中国の学生で海外留学希望者中、英語の試験上位者で、学業成績抜群のものを各個撃破し、フランスへの留学を勧め、フランスの対外文化交流とあわせ、できればフランス情報通信関連のビジネスにも活用しようとしているようだという。

わが国の国公私立大学、企業、政府の文化交流戦略の

現状と、わが国学術、経済外交のあり方を反省させられた今回のニース出張であった。

短歌会通信

細川　謙三

昨年六月から企業ＯＢペンクラブでも短歌会を始めることになった。俳句会もあるのだから、同じ日本語の短詩型の短歌会もつくろうという趣意だったようだが、私は鳴沢会長の示唆に従って、いとも簡単にその主導者というような立場を引き受けてしまった。私にいくらかの歌歴があり、いくつかの素人のグループの会の指導をしているということを会長が個人的因縁で知っておられたことによるもののようであったが、実は、現在は恆悗たる思いでその責をふさいでいるのである。というのは、私は若い頃、ある機縁で短歌という形式の短詩型にひき込まれて以来、ある意味では気侭に親しんで来たに過ぎないが、その後この企業ＯＢペンクラブには私以上にこの三十一音の短詩型に親しみ、私以上に学識が深く、また立派な作品をつくって来られた方があることを知ったからである。

そこで、現在は、とも角、この伝統的な三十一音の日本語の叙情詩に興味をお持ちになる方々の気侭なサロンとして、この会を運営して行くことに私の役割があるのだと割り切って、毎月第二水曜日、養和クラブ地下室で皆さんと歓談するのをたのしんでいる次第なのである。

右のような歌会発足の事情をご諒解頂いた上で、この日本の伝統的な韻文学を作り、論じようという方々は、気楽に一首でも二首でも作品を持ち寄り、気侭に短歌というものについて語り合っていただきたい、というのが全く偽らざる今の希いなのである。ご出席の方々の作品は後で一括してご紹介するが、この他桜井清治さんなどには随時ご出席いただいて忌憚のないご意見をうかがっているから、どうか興味をお持ちのかたの気楽なご出席をお待ちしている次第。

ご承知のように、短歌という形式は永い伝統を背負ってはいるが、現在の課題は、一見混迷の態を示している現今の国際情勢のなかで、私たちがどう生きねばならないかを求め、それを表現しようとしているので、決して過ぎ去った幻影を追っているのではない。それと同時に、混乱しつつある今の日本語のなかで、日本語固有の微妙な韻律の美しさを追求し確立しようとしていることも亦争えないことなのである。自分の民族の言葉の美しさに対する感覚を失った民族はいずれ滅びるだろうと私は考えるがどうなのだろうか。

ともあれ、気楽でくつろいだ集会ではあるが、流石に日本社会の中枢で活躍してこられた方ばかりだから、三時間の会の雑談の間に色々示唆されることが多い。

ご希望の方のご参会をお待ちしています。

○　一・二月の詠草から（文責在筆者）

三枝　亨

冴え返る空にま白き富士の峯我も眺めつ「野菊の丘」に

ポプラ高き水元公園の並木の路過ぎしイランの旅思わしむ

遥かなるナザレが丘の雪解けの春見に来よと友誘い来ぬ

金町（かなまち）の縛られ地蔵香絶えず初春の綱願かけ結ぶ

古き鞄襤褸まといて終わり給う梵語こよなく愛し給いて

北田　純一

吹く風も四角ならむと人のいう幕張新都心に寒椿咲く

救援の物資ひたすら手に運ぶ新人類君らを見て涙ぐむ

初日さす湾をへだてて摩天楼の東京を越え晴れし富士見ゆ

萬両に鵯の来て飛び去りぬ孫の名を妻と思案する朝に

新春のサッカー駅伝ラグビーの若さは眩し不惜身命

鳴澤　秀影

ノエル近き電飾の並木続きゐてパリの女男（めを）のさざめき絶えず

枯葉舞ふブローニュの森冬眠に入りゆくごとく木立しづけし
非業の死遂げたる王の愛でしといふ白亜の城は青葉の中に
その夫は医療ミスといふ老婦人さりげなく車椅子押して過ぎたり
前向きに残存年令数えつつ生きよと熱く君は説きにきけり
空高く澄みて拡がるその下に瓦礫となりし故里の街
六甲の麓に続く家並は崩れ傾きなほ残りをり
家の泣く声を聞いたと老夫婦語りて路に面を伏せたり

アブドルカーダー・羊子

おはようとキスを受けたり今朝もまたやさしき夫よ窓に風花
モノ・カネをひたすら求め走り来しこの国人をあわれと思う
積み木積むごとくつくりし都市崩れ「都市型日本」脆く崩れき
わが街に降り積もる雪眺め居り震災の火の映像消して
よき子らとよき夫のいて雪の降る山河よわが故郷はよし

細川　謙三

「カレーの市民」の青銅の像たつ庭に光は澄みて松の落葉や

浅野　正春

遙々と帰り来りし空港に醤油の香りいたく親しき
黄昏の銀座の裏に花を売る老女の肩を照らす街の灯
リヤカーの虫の音の澄む街角の雑踏のなか歩み過ぎ行く
密林を切り拓きたる赤土に新しき工場建ててゆくべし
アラビア海の紫うにの食卓に今宵限りなく故郷を思ふ

西川　知世

冬空に名を知らぬ星輝きて夫を亡くせし友はうなだる
冬の日のやわらかく差す日だまりに献花の列は長く続

「洗礼者ヨハネ」の像に舞ふ落葉秋のひかりにひるがへりつつ

五十年前の感傷夕かげる大原美術館の階くだるとき

敷石の路あたらしき倉敷に友らと別れ夜汽車を待てり

藍色の雲淡あはと暗くなる冬枯の丘立ち去らんとす

欧亜感傷吟

田中　良平

森深く射す木洩日の輪に集ふ

小鳩の勾ひ冬は親しも（英国）

寄り添ひて初老の二人消え行きし

道仄々と雪明り冴ゆ（英国）

雨降れるレマン湖畔を妻と歩む

互みに持てる寂しさ触れず（スイス）

極北の白夜の浜を歩み行けば

粗き流沙がわが頬を打つ（北欧）

妻投げしコインゆらゆら消え行きし

ローマの泉夕さりきたる（伊国）

別れ来しワルソー娘の澄みし目よ

自由は遥けき彼方の星か（波蘭）

陽は落ちぬ隊商宿に目を閉じて

鳩の尿の音を愛しむ（トルコ）

時流れ再び踏みし天竺の

土の匂ひが我を包むも（印度）

ペン俳句 〈一年を経て〉

平間真木子 選

子の曲げし太刀を正して雛祭　浅野正春
人待ちてをり八重桜散る下に
そば啜る窓より薔薇の花を見て
緑陰に子等の声して紙芝居
文机に古今集置き九月かな
狩人の宿や大きなランプ吊り
法要のあとの寄鍋囲みけり

節分や星を数へし不寝番　石川正達
春闘の叫びを遠く花筵
自治会のつどひ焼茄子大皿に
住みなれし家を去る日の西日かな
スモッグは昔なかりし天の川
ささにしき高く積まれし豊の秋
熱き茶を啜り歳暮の思いかな

パン屋にも鶯餅を売りゐたり　亀井弘次
半蔵門の土手を菜の花いろどれる
風つよし江の島目指すヨットかな
夕暮れの意外に早き九月かな
山荘に横笛流れ十三夜
参道に落葉濡れゐし毛越寺
冬霧ににじみライトの流れゆく

刈取りのその日を待てる麦の秋　上沢準太
五月雨や路地に育ちし草の丈
あらためて帽子手にする残暑かな
十三夜更けて蒲団の欲しくなり
百舌の贄夕べの編笠に濡れてゐし
古びたる塀に日当り青木の実
小春日やペットボトルに猫寄らず

母の碑に薄紅梅のこぼれけり
花吹雪浴びし眼鏡を拭きにけり
風薫る山荘にして紅茶かな
母の忌や小さき寺の合歓の花
秋立つや土蔵の壁に桐の影
マンションの重なる丘の後の月
自転車に油さしをり年の暮

北田純一

紅梅と酒あれば足る耳順かな
花咲くと千鳥が淵に集ひたる
漢方薬の匂ひ流れく麦の秋
午後長し眠りを誘ふ合歓の花

小林正憲

早春の岸辺に赤きバイクかな
友あまた九段に眠る桜かな
四国へと架る大橋五月晴
草野球西日に長き影を曳き
老杉に蝉の唱名鬼子母神
落葉焚く野菊の里といふところ

三枝亨

岩陰に野仏のあり青木の実
うす紙に透き冷え冷えと雛の顔
薔薇咲くと一言添へし予報官
どこまでも麦の秋なるオレゴン州
一人居のけだるき午後や合歓の花
七夕やサボテンの花一つ咲き
ゴヤの裸婦壁に掛けある残暑かな
軍鶏鍋や肝胆照らす友のゐて

櫻井清治

ふるさとや道の辺に売る草の餅
黒髪を飾りてさくら吹雪かな
風薫る野外オペラを待ちをれば
突然の手術予告や五月雨るる
病院の西日や妻の誕生日
廬溝橋のその日思へり星祭
九月わが退院の日の決まりけり

佐伯利治

パリ風のカフェの前に辛夷咲く
水揺れてたゆたひをりし花筏
サッカーの実況放送熱帯夜
ダリア赤しプールの端に籐寝椅子
山荘に百舌鳴き筆の捗らず
小酌のあとの落葉を踏みにけり
北欧の日暮れの早き冬の霧

鳴澤秀影

遠き日にこころの遊ぶ雛祭
散る花の中の最高裁判所
切りつめし枝より伸びて薔薇開く
手にとりし茄子の軽さや朝支度
十三夜芋の味濃く煮上がりし
ドアのノブにぶく光りて冬に入る
海峡の宿に石狩鍋を食ぶ

西川知世

早春の浜一灯のなほ遠し
爛漫や岩屋のごとき裁判所
浴衣の子集めて鬼の話する

原青蜂子

長崎の丘を動かぬ西日かな
風薫る国際電話に母の声
亡き母に薔薇を供へて和みけり
花合歓に単身赴任の窓開く
かたはらに本開き置く冷し酒
孫去りしあとのさびしき九月かな
古稀近きことを諾ひ落葉焚く
自転車のペタルの重し冬の霧
一年の計の褪せたる年の暮

森田茂

客去りしあとの雛の間灯しけり
さくら散る最高裁の鉄柵に
アトリエに浴衣のモデル来てをりぬ
豆腐屋の三和土濡れゐし西日中
銀漢や千恵子の駆けし九十九里
鳩の来て象と遊べる小春かな
鱈ちりや故郷は吹雪の中ならむ
歳末や奥に欠伸の骨董屋

吉井米三郎

ためらひのゆっくりと脱ぐ黒手套　　平間　真木子

衛士若し桜吹雪の中に立ち

薔薇垣のあなたに涛の上りたる

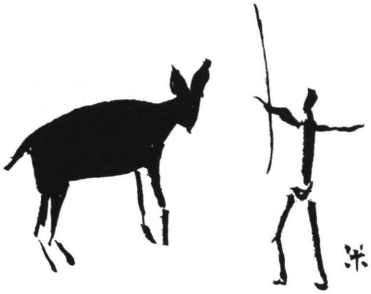
秋立つと長き象牙の箸を置き

銀漢の尾の垂れ蔵の町暗し

佐份利さん退院

退院や金木犀の香の中に

立冬の日の廻り来し青畳



ペン俳句の歩み ＝その二

平間　真木子

ペン俳句会は平成五年八月に発足し、すでに一年半が経過した。毎月一回の句会を通じ作句を共にし、自由で率直な意見を交換し合うことによって、前向きな楽しい会に育っていることを喜びたい。この間の、それぞれの方の作品より一句をあげて鑑賞させて頂く。

文机に古今集置き九月かな　　浅野正春

みな熱心な方ばかりであるが、ことに熱意の感じられる一人である。俳句の本以外のところからも基礎的な知識の吸収を求めておられる姿がうかがえてうれしい。「古今集」に対する季語「九月」の働きに注目したい。

春闘の叫びを遠く花筵　　石川正達

新聞報道の仕事を長くされた方らしく、俳句にも社会的な眼を向けて作っておられる。毎年の春闘、それはいつも桜の頃で、花見の人混みをよそにプラカードの列は続く。「花筵」と下五に据えたところが決まっている。

山荘に横笛流れ十三夜　　亀井弘次

京都「大河内山荘」での作とうかがった。いかにも古都の名園らしい雰囲気がある。横笛と十三夜の取合せは少し古風すぎるかも知れないが、なんとも美しい。もと企業戦士の横顔が、旅情の中に感じられるのである。

あらためて帽子手にする残暑かな　　上沢準太

半年遅れて入って来られた方である。その半年分を取戻すのはなかなか難しいが、熱心な方なので足早に追い着かれることであろう。昨年のあの残暑が思い出される作品で、この素直な表現は大切にしたい。

花吹雪浴びし眼鏡を拭きにけり　　北田純一

最も熱意をもって俳句と取り組まれた方。二尺に余る俳書の山を前にして勉強されたと聞いている。何事にも熱中する姿はすばらしい。掲出句の、ゆったりと身丈の伸びた作り方、余分な主観の無いところが何よりである。

紅梅と酒あれば足る耳順かな　　小林正憲

「紅梅・酒」そして「耳順」（耳順とは六十歳のこと）とすばらしい言葉がちりばめられている。今日の人生百歳の世ではまだまだ若いと言われる年齢であるが、一つの区切りとしての作者の思いが込められているのである。

友あまた九段に眠る桜かな　　三枝　亨

俳句会の全員に共通の思いがここには詠われている。あの戦で亡くなった友の幾たりが眠る九段、そこはまた見事な桜の名所でもある。生死を桜のごとくありたいと願った戦前の若者たち。生き残って桜への思いは深い。

ダリア赤しプールの端に籐寝椅子　　鳴澤秀影

外国生活を長くされたということで、いつも端正で且つダンディな方である。作品もまたしゃれていて明るい色彩が感じられる。この作品、地中海に向いた何処かのホテルであろうか。明るい午後の景が楽しい。

どこまでも麦の秋なるオレゴン州　　櫻井清治

かって仕事にて、アメリカ大陸を駆け廻った話をされたことがある。元気一杯の若き日の思い出、それをいま俳句という型をもって縦横に表現されている。わたくしには未知の國アメリカ、親近感をもって拝見した。

風薫る野外オペラを待ちをれば　　佐伯利　治

ヨーロッパ音楽ツアーに参加されるほど音楽の好きな方である。思わぬ大患をされ、その後すっかり回復なさったとはいえ、今後はインドアの世界、俳句に打ち込まれることもよろしいのでは、と申し上げたい。

ドアのノブにぶく光りて冬に入る　　西川知世

女性会員を得て、俳句会が楽しくなった方もおられるようである。熱意に加えて、若さによる感覚のよろしさがなによりの方である。ドアのノブと冬、冷たさが増幅されるこの把握に、今後の期待が寄せられる。

浴衣の子集めて鬼の話する　　原　青蜂子

お仕事の関係で句会への参加が少なく、残念に思っている。長い俳歴を持ち、単なる伝統俳句ではない何かを求めて止まない方のようである。時を得て、ペン俳句の牽引者となって頂けることを期待したい。

風薫る国際電話に母の声　　森田　茂

俳句会の方々は、みなそれぞれ海外赴任の経験を持っておられる。この作品より想像される作者は未だ若く、始めての海外生活の頃のようにも思われる。国際電話を通じて聞く母の声も、また若く明るいものであった。

鱈ちりや故郷は吹雪の中ならむ　　吉井米三郎

北海道小樽出身ということで、その故郷への思いは格別といつも拝見している。作句の経歴をすでに豊かにお持ちで、俳句の幅が広く多彩であることは楽しい。着実に作り続けてゆかれることを希いたい。

悠遊の記

身辺雑記

近況報告

松方　清

昨年六月入会させて頂きました。多士済々の集まりなので、大いに啓蒙されております。仕事の都合で、月例会出席も結果として三回にとどまり、申し訳なく思っております。

今年の正月は珍しくパリで過ごし、ロンドンで仕事を済ませて十五日帰国しました。「悠遊」への投稿も新春にふさわしい明るい話題として、国際列車ユーロスター号による英仏海峡トンネル体験談などを中心に、今回の旅行をテーマに考えておりました。

その矢先、帰国翌々日の十七日に阪神大地震が発生、阪神間には親類、知人が多く、被災状況を知るのに忙殺され、本日に至ってしまいました。大変恐縮ですが、今回は近況報告でお許し頂きたく存じます。

地震と会社

許斐　義信

危機的状態ではじめて物事の本質が判ると言われるが、南兵庫地震で被災した会社が社員に示した対応も、そのことが、間違いではないことを証明したようなのだ。

某社では無理して出社した社員に対して「出社に及ばず、被災者家族の面倒を見るべし」と追い返したような

のだが、また一方では「長期に会社に連絡も取らずに、出社しないのは何事か」と叱咤した会社もあったと聞いている。

同じように長年勤めた会社であっても、何が原因でこれほどまでの差がでたのか。経営陣の心の差がそうさせたのか。いわゆる社風なのか。それは判らない。ただ、多くの被災者は、近い将来、人生を考え直すであろうし、同様に会社との関わり方を考えるに違いないと想像している。その程度の感想しか述べられない我々の心も見透かされたのだ。

木村親さんを偲んで

木村　親（きむら・ちかし）一九二七年横浜生れ、第三高等学校卒、東京大学経済学部卒、三菱商事ＯＢ：　初代クウェイト駐在員、ロンドン支店（ザンビア国キトエの初代駐在員を含む）、サウディアラビア事務所長、本社輸送機部長、三菱重工業顧問、菱信リース株式会社に出向し専務取締役。企業ＯＢペンクラブ会員（初代事務局長）

木村親君よ

八木大介

木村君。誠に申し訳なかった。何回も筑波大学の病院や柏のガンセンターに見舞に行きながら君の最後どころか、お通夜や告別式にも参加出来なかった。これは一体どうしたことだろう。神が僕たちの友情にしっとして意地悪をしたとしか言いようがない。

あの朝、僕は午後アメリカへ取材旅行に出発することになっていたが、君の容体が何となく気に掛かったので、二月二五日の午前九時ころ、ガンセンターに電話した。奥さんが出られて『主人は今意識がありませんので…』と言われたが、『とに角、後一週間がんばって下さい。三月三日に帰国次第すぐお見舞いに伺いますから』と伝言して、いよいよ家を出ようとした時、神谷から電話がきた。『木村が十一時二七分かに死んだ』と知らされた。成田エッキスプレスの時間が迫っていて、神谷とも十分に話しする暇も無く、北田その他への連絡だけを頼んで電話を切った。旅行中もずっと気になっていたが、帰ってきて奥さんに聞くと、葬儀万端上手く行ったそうで何よりだった。改めてこの弔意を君の霊前にささげる。

君と初めて会ったのは、五〇年前、京都の旧制第三高等学校に入学したときだった。君は北寮十番、僕は北寮五番で、初めて入寮の自己紹介をしたとき、『兵庫県立豊岡中学四修、木村親』と怒鳴っている紅顔の美少年に驚いた。図体は大きいが如何にも四修らしくあど

けない。当時は中学五年卒業が高等学校入学の資格だったが、海軍兵学校や陸軍士官学校と同じく四年終了からも受験出来た。大体合格者の五割が五年卒業、浪人が三割、二割が四修だったのではないか。君は明治生まれのおやじさんに次いで三高、東大の道を歩んだが、豊中の後輩の話では、豊中始まって以来の秀才で、君が三高へ発つ日には、校長以下先生、生徒が駅頭まで送りに来た由。

三高の自由寮にも何人か四修の秀才がいたが、君はどちらかと言えば、ヌーボウとしていて、目から鼻へ抜けるというタイプではなかった。ところが話してみると鋭いことをぴりっと言う。四修とは思えない哲学や人生観も持っていた。

我々の高校生活は昭和一九年から二二～三年に掛けて戦中戦後の大混乱時代だった。ほとんどの生徒が人生を狂わされた時で、お互いに食うことと生きることで精一杯だった。君は理科から文科へ替わり、その後東大の経済に進んだが、僕も理科を卒業しながら、京大の経済に進むなどの混乱をやらかした。

その後君と再会するのは昭和二九年、三菱商事が再合同を果たした時である。新しく編成された機械輸出部に君がいた。その後は商事三高会でしょっちゅうダベったり、縄のれんで悲憤こう慨を繰り返していたが、その中お互いに海外に転勤したりしてゆっくり話すことは少くなった。せいぜい海外出張したときに会うくらいだった。

君は昭和三四年にクエートの事務所開設のために駐在員として派遣され、その後のアラブ貿易の市場開拓に成功したが、中でもユニークだったのは、当時日本人がプレイ出来るゴルフ場がなかったので、君が一人で毎日曜砂漠に出掛けて砂のゴルフ場造りをしたことである。今では商社のエリート駐在員が汗水垂らして肉体労働をすることなど考えられないが、当時はそういった仕事自体が海外進出の大きなステップになっていた。僕も君と一度砂漠のゴルフ場でプレイしたことがあるが、そこそこのモノだった。特に印象に残っているのはゴルフコースの中に生えてい

たスイカである。形こそソフトボール大だが、完全にスイカの模様をしていて、取り上げると砲丸のように重い。取って帰って君の社宅で切ったが、包丁が立たず、金づちでたたき割った事を覚えている。未熟だったせいか、ものすごく苦くて食べられたモノじゃなかったね。

その後君はアフリカのザンビアへ初代駐在員として派遣され、再び市場開拓に携わったが、またもや物に動じない楽天性で見事成功した。サウジアラビアのリヤード支店長になった時も何時の間にか他社をしのぐ実績を上げていた。君は三高時代から外面のヌーボウさに似ず、いち早くモノの本質を見抜く能力があって、直ぐ核心へアプローチするので、他人よりも効率的に成功出来るようだった。

ところがそんな君でもダメなことが一つある。それは競馬である。

君の競馬歴は東大時代、府中競馬場でアルバイトをしていたときに始まるが、ロンドン支店在勤中は本場の競馬に魅せられ、英国中の有名レースにはほとんど行って居た。支店長や三菱商事の社長でも難しいダービーのロイヤルボックスに招待されたこともある。競馬場に置ける君のえんび服にシルクハット、コウモリ傘にオペラグラス姿は英国の社交界でもちょっとした競馬通で通っていた。君の競馬趣味は日本に帰ってからも続いたが、本店の輸送機部長から、機械総合部長、機械本部長補佐と栄進を重ねて行く間に、ただ一つ部下に信用がなかったのは競馬の予想である。少なくとも君のアドバイス通りに馬券を買っても儲けた部下は居ない。君は死の直前まで奥さんに競馬の新聞を買って来させ、病院のベッドの上で予想を立てては、プッシュホーンで百枚単位の馬券を買っていたが、競馬に関する限り、権威ではあってもベテランではなかった。君は競馬が直感と予見能力を養うと負け惜しみを言っていたが、天国へ行ったら、競馬だけは止めた方が良い。笑わないエン魔様を笑わせるだけだから…。

逆に競馬以外では君からは有用なアドバイスを何回も受けた。ただ三菱商事時代は君の言うことを

聞かなかったので、失敗したが、今にして思えば、僕以外にも君のアドバイスに助けられていた人は多いのではないか。友人や部下だけではなく、上司も君の意見具申で随分助けられていた。君はよく『オレは学校の先生になりたいんだ』と言っていたが、確かに君は人を導いたり、育てたりする才能に長けている。

最後に君に助けられたのは、企業OBペンクラブの創立時である。

僕が参議院をやめた時、三井物産を初め、各社のOBからビジネスマンのペンクラブを作ろうとの提案を受けた。それ自体は有意義な事だし第二の人生を文筆に託すことは大きな生きがいになるので大賛成だが、問題は会の運営である。一応功成り名を遂げた口うるさい年寄達をまとめて行くのは事である。僕はすぐ菱信リースへ相談に行った。君は僕の話を聞くなり、『今度は君にも最後の仕事かも知れないから、失敗させる訳には行かないな』としばらく考えた末、『片手間になるが、協力してやろう』と事務局長を引き受けてくれた。お陰でクラブはうまく成長し、三年間に十冊近い単行本を商業出版出来た。『これでいよいよ軌道に乗った』と喜んだのも束の間、大きな災難が降りかかって来た。

君は娘さんの結婚記念にハワイへ家族旅行をして居る時に、鼻に妙な鈍痛を覚え、帰ってから聖路加病院で精密検査を受けた所、鼻のガンであることが発見された。流石豪胆な君もかなり動揺した様だが、すぐに立ち直り、鼻切除の手術を受けた。手術の結果は良好で、完全に社会復帰し、文筆活動も再開したが、ペンクラブの事務局長は辞めざるを得なかった。ところが一年後にガンが目の下に転移していることが発見され、国立ガンセンターで再手術ということになった。その後は入退院を繰り返し、僕も何回か柏の東病院に見舞いに行ったが、君は豪胆なのか、悟り切っていたのか、仙人のように淡々と死に対決していた。

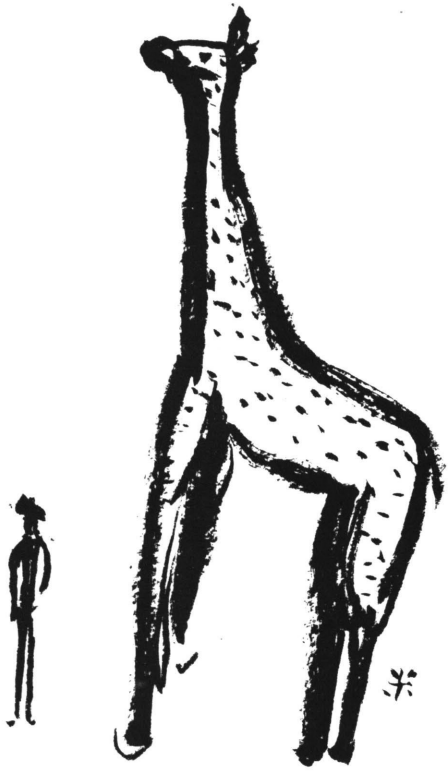
最後は二月の初旬、病室で奥さんと三人、カセットに合わせて三高の寮歌を二、三時間も口ずさんだことだった。君は最後まで指先で拍子を取りながら唇を動かして

いた。

人生は出会いだと思う。そうして生も死も…。何れまた二人は会えるだろう。五年か十年、長くて十五年だ。その時はエンマ法王庁の広場で『紅もゆる』を歌いながら、ストームで乱舞しよう。紅顔の秀才よ、当分の間、さようなら。

平成七年三月三日

永遠の仲間　八木　大介



企業OBペンクラブのあゆみ

企業OBペンクラブ（年表）［敬称略］

一月例会（十九日）
○新体制スタート
会長　鳴澤宏英
副会長　上澤準一
事務局長　佐份利治
業務担当　森田茂
会計担当　櫻井清治
監事　宮澤漸
○講演実施（一月十八日～二月三日まで六回）
横浜市勤労福祉財団主催「マイライフ・プラン講座」
○入会　五名　原信・児玉忠雄・吉葉芳彦・藤井長治・大沢章伸
○ゲスト講師
日本エネルギー経済研究所　理事長
生田豊朗氏　「最近のエネルギー事情」

＝平成六年（一九九四年）＝

（年史）

会員の選挙により、新理事五名、監事一名が決まり、一月から新体制で再発足することになった。

理事の互選により、会長に鳴澤宏英、副会長・上澤準一、事務局長・佐份利治となった。また理事会の合意で、業務担当・森田茂、会計担当・櫻井清治が決まった。監事には宮澤漸が選出された。

会の活動を推進するために、運営委員会が設けられた。会長からの指名で上澤副会長が委員長となった。委員長から上記の通り、十三名が委員を委嘱された。

会の目的である「知的生産活動」を具体化する上で、対外的な発表などのアウトプットは重要であるが、会員

二月例会（二十三日）
○運営委員会を設けた。十四名。
委員長　上澤準一
浅野正春・石川正達・遠藤俊也・北田純一・佐份利治・櫻井清治・三枝亨・田中良平・西島力・鳴澤宏英・平間真木子・宮澤漸・森田茂
○会員講演
鳴澤会長　「今年の日本経済」

三月例会（二十三日）
○寄稿開始
ビジネスザポート誌（東京商工リサーチ社）
碧空誌（社会保険広報社）
○ゲスト講師
帝京大学　教授
佐貫利雄氏　「日本経済五つのハードル」

四月例会（二十七日）
○プロジェクト事務分担取り決めを定めた。
○出版　「国際マナー常識事典」（学習研究社）
○同人誌　「悠遊」創刊
○会員講演

の研鑽によるインプットもおろそかにはできない。

そのため、会員を講師とした勉強会は勿論のこと、ゲスト講師を隔月招いて講話を聞くこととする。

前者の会員講師の勉強会として「国際情勢を考える」（座長・鳴澤宏英）「国内情勢を考える」（座長・上澤準一）「情報化社会を考える」（座長・佐份利治）の三つのプロジェクトをもつこととした。

「国際情勢を考える」「国内情勢を考える」の勉強会は、毎月行われて、特に鳴澤座長、上澤座長の努力により充実した内容となっている。「情報化社会を考える」は、佐份利座長が六月に入院されたので、二回目以降は止むなく中断されている。来年は再開を検討したい。

俳句教室は、平間真木子先生の指導で順調に伸展しているのは喜ばしい。

短歌教室は、細川謙三先生により、六月から始まり成果をあげている。

上澤副会長　「最新ロシア情勢」

五月例会（十八日）
○入会　三名　細川謙三氏・間淵達明氏・岡田敏夫氏
○ゲスト講師
霞山会　常任理事
渡辺長雄氏　「中国の現状と今後の展望」

六月例会（二十二日）
○事務局長代行に森田茂
○「PEN随想」連載開始
○短歌教室スタート
○入会　四名　松方清・村田孝四郎・荘司忠志・内藤徹雄
○会員講演
田中良平「東西文化の交流の国・トルコ見聞録」

七月例会（二十七日）
○会則を改定した。
○「会のご案内」を作成した。
○ゲスト講師

月例会での会員の講演も多彩で、充実しつつあり、会員は知的刺激を享受している。

外部からのゲスト講師は、各界のオピニオン・リーダー的存在の方々であり、講演内容は多岐にわたっている。外では聞けない話もあり、会ならではの企画と思う。

単行本は二冊出版した。

一つは、四月に学習研究社からの「国際マナー常識事典」。約四十ケ国の生活やビジネスでの礼儀・作法などのマナーの調査は容易なことではないが、当会員の広汎な知識や海外駐在体験がそれを可能にしたと言えよう。プロジェクトマネージャーは佐份利治で、関係大使館や知友人の協力も得て、この難題を解決した。

もう一つは、十一月に日本実業出版社からの「最新テクノロジー・不思議？なるほど！」。これは身近に見られる科学技術を広く紹介しているが、多彩で広汎な技術やノウハウをもつ会員ならではの成果と考えている。プ

第二国立劇場運営財団　理事長
木田宏氏　「我国の教育問題」

八月例会……夏休み

九月例会（二十一日）
○ワープロ一台を事務局に設置した。
○入会　一名　岩崎洋一郎
○ゲスト講師
時事通信社　解説委員長
藤原作弥氏　「李香蘭に見る昭和史」

十月例会（十九日）
○コピー機一台を事務局に設置した。
○講演実施　海外事業協力協会主催
「中高年者の人生設計」
○会員講演
櫻井清治「ウルグアイ・ラウンド後の食管法改訂と日本農政」

十一月例会（十六日）
○出版「最新テクノロジー・不思議？なるほど！」

ロジェクトマネジャーは小林正憲であったが、執筆取りまとめのさ中に、ご夫人が逝去されたため、中断せざるを得なくなった。そこで、中川路明、石川正達が全面的に支援し、出版にこぎつけることができた。

雑誌寄稿では、新規に三点加わった。すなわち東京商工リサーチ「ザ・ビジネスサポート」誌の〝海外駐在体験日誌〟、社会保険広報社「碧空」誌の〝まだまだやりまっせ〟、それと日経事業出版社「オニオン」誌の〝定年日記〟で、好評を得ている。

従来から寄稿継続中のものは、にじゅういち出版社「スクエア21」誌の〝話のパティオ〟、同社「マテリアルマネジメント」誌の〝コーヒーブレイク〟、アジア調査会「アジア時報」の〝話のひろば〟、海外職業訓練協会「人づくり」誌の〝海を超えて人造り〟などがある。これからも多くの会員の執筆参加を期待している。

講演会では、一～二月にかけて、横浜市勤労福祉財団

（日本実業出版社）
○寄稿来年継続決定（季刊）
碧空誌（社会保険広報社）
○ゲスト講師
三菱商事　顧問
北村汎氏　「英国と日本」

十二月例会（二十一日）
○会発足五周年、新書出版の記念を兼ね忘年会を行った。（於　東京銀行・青山寮）
○会計規則を採択した。
○会員講演
亀井弘次　「気功術」

主催「マイライフプラン講座」で、六回にわたり講演を行った。反響が良いため、来年も実施する予定である。十月には、海外事業協力協会主催「中高年の人生設計」で講演を行った。

今年は、「会則」を改定し、会計規則も定めた。また、プロジェクト事務分担の取り決めも明確になった。役員の選出手順については、今年中に決める予定。会の内部整備は進捗しているので、来年は、会の本来の目的である「知的生産活動」を更に具体化していきたいと念願している。

（平成六年末　会員数　七一名）

執筆者名簿

氏名	（カッコ内は本名）	出身会社	生年
浅野正春	あさの　まさはる	㈱日立製作所	1934
アブドルカーダー栄子	アブドルカーダー　えいこ	ニューサウスウェルス州立コレスポンダンススクール日本語教師	1933
新井　進	あらい　すすむ	伊藤忠商事㈱	1931
池田善行	いけだ　よしゆき	日商岩井㈱	1917
石井正紀	いしい　まさみち	千代田化工建設㈱	1937
石川正達	いしかわ　まささと	毎日新聞社	1921
衞藤甲子郎	えとう　こうしろう	住友商事㈱	1924
今村　亮	いまむら　りょう	京セラ㈱	1931
岩崎洋一郎	いわさき　よういちろう	三菱レイヨン	1929
岩瀬昭三	いわせ　しょうぞう	北海道建設業信用保証㈱	1928
遠藤俊也	えんどう　としや	㈱東京銀行　丸紅㈱	1924
大沢章伸	おおさわ　ゆきのぶ	日商岩井	1934
角谷朗宏	かどや　あきひろ	三井物産㈱	1928
上澤準一	かみさわ　じゅういち	三菱商事㈱	1927
亀井弘次	かめい　こうじ	キリンビール㈱	1928
北田純一	きただ　すみかず	三菱商事㈱	1928
きりん　たかし（正木　豊　まさき　ゆたか）		㈱マサリヤ社	1930
許斐義信	このみ　よしのぶ	三菱商事㈱三井物産㈱	1944
三枝　亨	さいくさ　とおる	三井物産㈱	1927
斎藤　勁	さいとう　つよし	呉羽化学工業㈱	1925
櫻井清治	さくらい　せいじ	三井物産㈱	1926
佐份利　治	さぶり　おさむ	京セラ㈱	1926
清水　喬	しみず　たかし	㈱ポーラ化粧品本舗	1933

氏　名	（カッコ内は本名）	出　身　会　社	生　年
荘　司　忠　志	しょうじ　ただし	石川島播磨	1932
田　中　良　平	たなか　りょうへい	三菱商事㈱三菱総研	1923
都　甲　昌　利	とこう　まさとし	日本航空	1933
中　川　十　郎	なかがわ　じゅうろう	ニチメン	1935
中川路　　明	なかかわじ　あきら	ダイセル化学工業㈱	1929
中　野　隆　夫	なかの　たかお	三菱商事㈱	1931
鳴　澤　宏　英	なるさわ　こうえい	㈱東京銀行	1922
西　島　　力	にしじま　つとむ	住友商事㈱	1930
野　村　嘉　彦	のむら　よしひこ	三井物産㈱	1917
林　　篤　二	はやし　とくじ	毎日新聞社	1924
平　間　真木子	ひらま　まきこ	㈳日本機械輸入協会	1925
福　井　　律	ふくい　たかし	明光証券㈱	1924
藤　井　長　治	ふじい　ちょうじ	三井物産㈱	1919
藤　岡　　豊	ふじおか　ゆたか	三菱商事㈱	1932
細　川　謙　三	ほそかわ　けんぞう	東京銀行	1924
松　方　　清	まつかた　きよし	東京銀行、第一ホテル	1928
間　淵　達　明	まぶち　たつあき	東京銀行	1929
水　谷　　汎	みずたに　ひろし	満鉄・友愛信用組合・横浜メキシコ名誉領事館	1917
別　宮　善　郎 （宮沢　　漸・みやざわ　すすむ）	べつみや　よしろう	日本郵船	1932
村　田　孝四郎	むらた　こうしろう	新日本製鉄	1934
森　田　　茂	もりた　しげる	出光興産㈱	1930
八　木　大　介 （木本　平八郎・きもと　へいはちろう）	やぎ　だいすけ	三菱商事㈱	1926
吉　井　米三郎	よしい　よねさぶろう	三井物産㈱	1926
吉　嵜　清　己	よしざき　きよみ	関西ペイント㈱	1925
吉　葉　芳　彦	よしば　よしひこ	出光興産㈱	1931
西　川　知　世	にしかわ　ちよ	企業ＯＢペンクラブ事務局	1948

事務局から

西川知世

悠遊第2号出版おめでとうございます。

私の事務局パートも、会員の皆様にいろいろのご迷惑をおかけしつつも二年目を終えようとしています。

今年は阪神大震災がありました。会員の福井律さんが西宮にお住まいで被災されましたが、おけががなく無事でいらっしゃったのがなによりでした。でもやはり生活はご不自由のことと聞いています。お見舞い申し上げます。私も神戸の出身で、親族のなかで箱根を越えたのは私一人です。母や姉妹家族をはじめ皆が阪神地区に住んでいます。全壊の伯父の家、半壊の母や姉の家などやはり被災は免れず、けが人の無かったことが不幸中の幸いでした。これ以上の被害が阪神に拡がらないように祈るばかりです。朝日新聞で阪神大震災を詠むという特集があり、その中で俳句や短歌に託することで悲しみが癒されていくことがあるとありました。私も少しかじりはじめたばかりですが、そのことはわかるような気がします。企業ＯＢペンクラブの俳句教室・短歌教室に参加させていただいて、こういう事に目が向くようになったと思います。感謝しています。

多士済々とは企業ＯＢペンクラブの為にあるような言葉だとつくづく感心しつつ、月例会に臨んでいます。会員も順調に増え、活動も活発に展開されている中、益々の発展をお祈り申し上げます。

悠遊創刊の火付け役を担ったので、昨年九月上澤準一副会長から、第二号の刊行についても音頭をとるよう誘いがあった。

石川正達さんのお蔭で立派な創刊号が生まれてサンプルがあることや、石川正達さんから「編集細部は林篤二さんに頼めるから」と話があったのでプロマネを引きうけた。

創刊号については当初、充分な原稿が集まるかと懸念もした。処が、これは杞憂で、積極的な寄稿により上首尾となったので、第二号の募集には全く心配がなかった。

むしろ内容に編集の重点を置いた。第二号の特性を出すために、「戦後五〇年」の特集や「メンバーのライフワークもの」などのカテゴリーを新設した。結果は、期待以上であり、メンバー各位の旺盛な物書き意欲に感銘し、さらに当会は、窓口も広いが奥行もまた深いものだと、改めて確信した。

悠遊は、この多様な出身の、個性豊かなメンバーの集まりと言うことを反映して、誠に多彩である。編集に際して、その善き特徴を生かそうと、林篤二さんがいろいろと苦労された。

原稿が大かた集まった今年二月中旬、大急ぎで原稿をグループ別に整理して林さんに渡してインドにでかけ、三月上旬帰国すれば作業は初校となっていた。そして、質量において、創刊号に勝るとも劣らない充実したものができあがった。

これは、石川正達・林篤二ご両氏のご尽力は勿論であるが、悠遊を続けようと言う会員各位の強いご支援の賜である。このプロメテウスの火は今後とも燃やし続けていただきたいものである。

（編集世話人　三枝　亨）

［編集メンバー］　鳴澤宏英、上澤準一、佐伯利治、森田茂、櫻井清治、浅野正春、北田純一、遠藤俊也、石川正達、平間真木子、林篤二

［事務局］　西川知世

企業ＯＢペンクラブ同人誌

「悠　遊」第二号

一九九五年四月十七日発行

編集・発行者　企業ＯＢペンクラブ「悠遊」刊行委員会
代表　鳴澤　宏英

印刷所　株式会社　ヨコタ
東京都江東区亀戸三－一〇－三（〒136）
TEL　〇三－三六三八－五四一一

連絡先　企業ＯＢペンクラブ事務局　森田　茂
船橋市小室町二七三六（〒二七〇－一四）
TEL　〇四七四－五七－八四三八

口座　第一勧業銀行丸の内支店　企業ＯＢペンクラブ
（普通　1633830）

頒価　一〇〇〇円